

No.147

日本村落研究学会東北地区研究会ミニシンポジウム報告
「あらためて中村吉治を読む―煙山調査を中心に―」

長谷部弘・三須田善暢・泉桂子

2020年8月10日

目 次

はじめに 三須田 善暢^{*1}

第1章 中村史学再考—煙山調査から学ぶ— 長谷部 弘^{*2}

第2章 有賀喜左衛門は煙山村調査をどう読んだか——有賀の読書ノートを中心に 三須田 善暢

第3章 玉城哲を読み直す 泉 桂子^{*3}

付録 有賀喜左衛門著（三須田善暢翻刻）『中村吉治「村落構造の史的分析」批評集』

*1 岩手県立大学盛岡短期大学部 misuda@iwate-pu.ac.jp

*2 東北大学大学院経済学研究科 hhasebe@econ.tohoku.ac.jp

*3 岩手県立大学総合政策学部 izumi_k@iwate-pu.ac.jp

はじめに

三須田 善暢

周知のように中村吉治とその弟子筋の研究は、日本村落研究における重要な財産である。しかしながら、中村理論の難解さのためもあり、ややもすれば平板な教科書的理解にとどまるか、場合によっては「誤読」がなされ、そうした理解にたつての批判がおこなわれているように思われる。

そこで、日本村落研究学会東北地区研究会*では、中村グループの系譜をつぎ独自の理論展開をおこなっている長谷部弘氏から、中村理論に対する氏自身の読解と肝要な点、中村理論の不足部分、中村理論批判への反批判などを提示していただき、長谷部氏の理論的展開である村落共同性の三層構造論についての説明をいただいた。

くわえて、三須田および泉桂子氏から、各自の研究を踏まえたうえで、煙山村モノグラフについて複数の視角からの報告をおこなった。三須田からは、有賀喜左衛門との関係性を踏まえての報告をおこなった。泉氏には、玉城哲の報告をお願いした。長谷部報告については、報告の文字起こしを本報告書に掲載することとし、三須田、泉報告はそれぞれの報告を踏まえた論考を執筆した。

今回のミニシンポジウムを契機として、中村史学を契機とした今後の村落研究・学説研究の展望を考えていきたい。事情により発刊が大幅に遅れたことを執筆者の皆様にお詫びする。付録ノートの閲覧・撮影をお許しいただいた有賀ご遺族の飯森様に御礼申し上げる。

* 本研究会は 2018 年 10 月 6 日にいわて県民情報交流センター(アイーナ)701 会議室で開催された。開催にあたっては岩手県立大学より学会等開催助成金を頂戴した。また、長谷部報告の文字起こしにあたっては岩手県立大学総合政策研究科の川原直也氏の助力を得た。記して感謝する。なお、本研究会の簡潔な報告について岩間（2019）を参照されたい。

岩間剛城，2019，「東北地区研究会報告」『研究通信』第 254 号，日本村落研究学会: 14-16.

第1章 中村史学再考―煙山調査から学ぶ―

長谷部 弘

日頃、私が実態調査や物書きをしながら考えていることを、現時点でいったんまとめ、それを皆さんに提示してみたいと思います。学説史的な議論を本気になって展開すると骨太な内容を要求されますし、また丁々発止の対応が要求される大きな議論を惹起してしまう可能性があるのも、今日は、申し訳ありませんがそういう話にはなりません。おゆるし下さい。別の機会に時間をたっぷり取って取り組んでみたいと思います。ちなみに、有賀先生が中村グループ煙山調査をどう評価されているのかについては、私は『村落構造の史的分析』が出版された際に有賀先生が「すごい研究が出た！」と書いておられる例の書評しか知らないのも後ほど報告して下さる三須田先生のお仕事から何が学べるか、非常に楽しみにしております。

今回の私の話はおおまかに3つの内容からなります。一つ目は、中村史学の見方・考え方についての確認です。中村吉治先生が「日本社会史」と名付けた歴史の見方(歴史をみる視点と枠組み)どのような特徴を持っていたのか、という点の確認ですね。さらに二つ目は、その社会史のベースになっている共同体論は、中村先生の本来考えていた日本経済史の世界にどのように埋め込もうとしたのかという話、私なりの解釈です。日本村落研究学会的にはいろいろと論争になりうるような問題ですけれども、一度は論じたいと思っていたことです。3つ目は、この中村史学のスキームの延長で、現在農村社会研究にどのような貢献ができるか、という話です。最近の私の研究の一端をお話したいと思います。

では、まず、中村先生の日本の歴史を見る際の見方・考え方を確認するために、先生の言われた「日本社会史」の経験的な(実証的な)基礎である実態調査研究『村落構造の史的分析』の解説から話を始めることにしましょう。煙山村の実態調査が現在の経済史学の研究成果を踏まえると、いったいどのように見えるのか、という話です。

今回、ざっと読み直してみました。しかし、この実態調査報告書は900ページ以上のボリュームがある、まさに大著と言うべき調査研究書です。準備に使った一週間程度の時間では丁寧に読み通すことはかなり難しかった、というのが本当のところ(最近大学はとにかく忙しいので、専念できる時間が限られているという事情もあります)。そんなわけで、皆さんには大変申し訳ないのですが、今回の通読作業には、私の内部で不十分感が残っています。ただし、私たちが現在進めている上塩尻村の実態調査プロジェクトでは、1998年に研究プロジェクトを開始した際、チームメンバー全員でこの『村落構造の史的分析』の900ページを精読し、読破したという経験を持っています。私にとってはもちろん、参加して下さったメンバーにとっても非常に有益な研究会だったと思います。実は、もし私自身に何らかの「煙山体験」があるとすれば、そのときに本書を丁寧に読みこんであれこれ討論した経験そのものなのです。煙山調査プロジェクトは、私が生まれる前に実施されたものであり、その調査自身が私にとって歴史的世界の出来事です。だから、「煙山体験」とはいつでも精読による「記憶の歴史化」でしかないのはあたりまえのことなのですが、私にとってはそれが大きな意味を持ちました。実際、その後の私のさまざまな調査研究を踏まえ、現代的視点から煙山

の村落社会の実態を見直してみると、実は新たに見えてくる事実や事象がたくさんあることに気づかされます。そんなことを以下、お話してみたいと思います。

今日、主催者から与えられた課題は、「①中村理論に対する氏自身の読解と肝要な点、②中村理論の不足部分、③中村理論批判への反批判などを提示していただき、④長谷部氏の理論的展開である村落共同性の三層構造論についての説明をいただく。」というものです。本気になると結構難問です。私なりに設問し直すと、①は中村理論に対する長谷部の読解の仕方と肝要な点と思われる所を述べよ、といったところです。この問題が何の前触れもなく定期試験に出されたら、私、おそらく合格点もらえないでしょう(笑)。それから②二つ目は中村理論の不足部分を説明せよ、というものです。煙山調査の不足部分ではなくて、中村理論の不足部分を私が説明する、これは私は中村先生ではないので、解答不可能な設問だ、と思いました。③三つ目に中村理論批判への反批判をせよ、ということで、お前どのように中村理論に乗っかって色々な批判に答えようとするんだよ、と肩をつかんで揺さぶられるような恐怖感を覚える課題だと思うのです。しかし、私としては、自分の考えしか述べられないので、中村先生から学んだことの理論的展開として最近主張している「村落共同性の三層構造」論をとりあげ、これを私がどんな研究史的文脈で主張しようとしているか、そして、この論の応用可能性がどんなものか、という話をすれば、おそらく解答めいたものになるのかなと思っています。

まず、一番目の私の中村理論読解の仕方についてです。『史的分析』の煙山調査自体は、三須田さんたちが三浦黎明先生と一緒に読んでいらっしゃると聞いています。ここでは、その調査研究の成果は経済史的にどのように評価されるべきか、という問題について論じてみましょう。この煙山調査は、歴史学的な視点から端的に位置づけると、近世以来の「村」という存在を、モノグラフィックな歴史の実態として実態調査してみたら、実際はこうだった、という類いの研究です。中村先生のお考えとしては、この調査をしてみたら、結果として歴史の見方それ自身が変わってしまった、という研究だと思います。それを確認するために、中村先生の講義テキストをもとにした『日本経済史概説』(1941年)を手がかりに、中村先生がどんな「日本経済史」の世界を取り扱おうとしていたか、について確認してみたいと思います。それによって、煙山調査でめざしたものと、その結果を新たな歴史認識にどう生かそうとされたのかについて論じ、中村先生の歴史の見方を検討してみましょう。

まず、『村落構造の史的分析』ですが、これが実態調査報告書として出版されたのは1956年です。当時はまだ珍しかった科研費での出版助成を受けた出版事業でしたので、現在の出版市場だったら出版社がけっして肯んじないような総頁数908頁という巨大な専門書として出されています。初版はもうなかなか手に入らず、1981年頃に御茶の水書房が出された改訂版、リバイズドされているのは最初の端書きだけなのですが、それが古書市場で出回っている、という状況です。一時は数万円という高嶺な値のついたようでしたが、最近はちょっと安価になり、一万円を切った時もありました。最近はまたちょっと共同体に対する関心高まってきたこともあり、Amazon古書市場なども値段が高くなっているようです。とにかく、株式相場みたいな話ですが(笑)、それが実態調査報告の学界的評価の指標かもしれない、なとも思ったりします。それはさておき、コンテンツの量的・

質的な話をしておきましょう。お読みになった方はおわかりでしょうが、まず第一章で 66 ページを使い総論と調査地の説明がなされます。この総論に関しては全部中村先生におんぶに抱っこということで書かれています。したがって、この本は、中村先生の歴史の見方というものを大きな枠組みとしながら、嶋田隆先生に始まって、菅野俊作先生、安孫子先生、村長先生、矢木明夫先生といった中村史学の重鎮の方々がそれぞれの担当部分を一生懸命調査分析して書きあげた、という全体構造になっています。本書の目次は以下のようなものです。

『村落構造の史的分析』1956 年、総頁 908 頁

◎構成

第 1 章「緒論」(66 頁)

第一節 総論、第二節 調査地

第 2 章「農村共同体」(632 頁)

第一節 農業労働組織(200 頁)

第二節 水利組織(140 頁)

第三節 林野の利用組織(216 頁)

第四節 生活組織(77 頁)

第 3 章「土地所有と貢租」(133 頁)

第一節 総説、第二節 藩政期、第三節 明治期以降

第 4 章「商品経済」(75 頁)

第一節 総説、第二節 高橋家の商品経済

第三節 煙山村の商品経済

この実態調査報告の真骨頂はどこか、というと、私は第 2 章だと思います。第 2 章の農村共同体とタイトルライジングした章立ては実に本書全体の三分の二を占める 632 ページもありまして、第 1・3・4 章は付録か、といいたいくらい位置付けです。つまり、この本は、「村落共同体とは何か」という問題を明らかにしようとして、文献資料の調査やヒアリング調査や各種分析を一生懸命行い、調べ回った結果を丁寧に叙述しているというもののなのです。第 2 章の内容を見ると、大きいウェイトを占めるのは農業労働組織と林野の利用組織です。200 ページ以上も叙述されています。そしてその次に扱われているのが水利組織なのですが、実はその 140 ページの中に水利組織図が綴じ込まれています。これは一読しただけでもおわかりになると思いますが、古文書として残されている水利絵図から元図を書き起こした後、実際に現地を調査して水回りや分水がどうなっているのか確認・再現したうえで、この図を書き直す、といった手の込んだ工程を経て作成されたものです。そのために投下した労働量は結構なものだと思います。単にページ数などの量には還元することができない、調査と分析の作業エネルギーを感じとることのできるものですね。よくよく読んでみると、第一節と第二節は論理的に非常に密接に絡み合っています。労働組織の関係と水の関係は家連合を繋ぐものとして非常に重要なものであった、と説明されているわけです。ただし、山林原野

の利用組織の叙述になりますと、これが独立変数的に扱われていまして、他の節との関連があまり密接ではありません。これは担当された菅野先生のキャラクターによるのかもしれません、南部藩の林野経営に関する話として論じられているとは言え、これは近世期の藩有林経営の研究としては日本でも最高水準のものではないかと思うのですが、一節と二節の関りで煙山における入会地利用に関する共同体的諸関係を明らかにする、という観点からみると、その問題意識が少し手薄であるように私には読めました。こういうそれぞれの特徴をもった調査研究の成果として、煙山村の村落共同体というものをつかもうとするならば、労働組織と水利組織、そして林野組織という諸機能組織を軸に考えるべきだ、という考え方が非常にはっきり示されているのだと思います。

このような調査研究は結構大変です。私も実際に幾つかの地域で此に類する歴史学的調査を試みましたが、思われることは、今となってはもう実施する事のできないと調査だ、ということです。嶋田先生がご存命中に質問してみたことがあったのですが、その時に言われたことは、これは史料だけではできない実態調査だ、調査当時は文書が作成された時期の当事者の人達がまだご存命だったので、その人達を前にしながら、この文書に書かれている内容や記されていない背景や事実、また文書の意味することは何なのかということを聞くことが出来たからだ、ということです。とても印象的でした。後代に生まれた私たちは煙山調査で拾うことの出来たような諸事実は、もう調べる事ができない。問題関心と意欲があっても、できない。私たちの生きている現実との間に越えがたい大きな裂け目、断絶の存在する歴史的な世界。記憶と過去の歴史的世界を架橋するためには、実は沢山の積層する経験的事実の確認が必要なのですけれども、私たちは、このような架橋のための情報を現在生きている人たちには求めることができないわけです。だから、今の私たちは煙山のような調査は出来ないうすけども、中村史学グループは、自分の時代の経験世界と過去の時代の経験世界との間を架橋する情報取得を、「古老」たちの記憶を通じ、文献その他の歴史資料だけを用いて歴史学的な研究ではできない、生きた現実との関わりを通じてこの調査研究を実施された訳でありまして、それはあたりまえのことではなくて、調査研究市場、特筆すべきことなのだと思います。この本が出たのが 1956 年であり、この調査が実施されたのは 1951 から 1955 年までです。

1955 年というのは私が生まれた年でもありまして、還暦をとうに超えました私から見ても、踏査自体が大層昔の話なのですね。この調査を行った先生方が対象とした時代は、感覚的に言うと、今私たちが第二次世界大戦の時代を想定するのと同じくらい「昔」の出来事だった。例えば我々が戦後の農地改革について研究しようとする、もう当時の農地委員会の人達を相手にするインタビューなどほとんど不可能です。農地改革の当事者の中でも若手だった当時 30 代の人達でさえは今では 100 歳を超える年齢であり、その方々がいかに記憶力の良い方であっても、当時は若手で、世の中のことは充分理解していなかった場合も多いわけで、人の世の複雑なあり方や実態の解明などはほとんどできないと思います。煙山調査は、幕末から大正期にかけて時代が対象とされていますので、当事者の方々を情報源とすることが可能だったわけで、そういった意味ではこの農業共同組織や水利組織の調査研究は、非常にリアリティが高いということが言えます。

第四節は村長先生が一生懸命書かれた箇所です。特に社会学の方々が「社会関係」という視点でとりあげる「ツキアイ」の生活構造に関する歴史学的調査ですね。これも、「昔」の話を聞き書きに

よって補強しながら書かれているもので、非常にリアリティがあります。色々な人から聞いた家々の役回りや小作をやっている人達の村の立ち位置、労働や手間を集める時に触れ回っていく農家のこと、そういった村の中のさまざまな役回りが描かれています。柳田國男の『婚姻の話』などを読むと出てくる仲人の話はご存じでしょう。農村社会において、「仲人」というのはいわゆる結婚斡旋業です。彼は婚活における情報媒体役といってよいのですが、柳田の説明で面白いと思ったのは、彼らは最終的に謝礼を受け取るわけですが、それを謝礼しては受け取らない。村の社会のツキアイの論理でやっているのだから、お金なんかいらないと最後まで言い張る。しかし何度も受け取ってくれと言われるから仲人役の謝礼ではなく、ツキアイの一環として仕方なく貰うという理屈を最後まで貫く。実際は仲人業の機能を担っているわけですがお金目当てであるとは絶対に言わないし考えようとしな。なぜそんなに村のツキアイという理屈を通すことに腐心するのかというと、柳田にいわせれば、嘘をついているわけではなく、これは村内に婚活の需要はあるが、それを満たす役割を市場形態ではなくツキアイの形態で行っているからだ、というのです。だから、これを婚活市場論で説明してはいけない、説明として間違ってしまう、という訳です。我々は婚活市場論的世界しか知らないの、仲人はお金を貰うのがあたりまえ、という話にしてしまうのですが、農村社会では違う論理や形態をもってこの仲人の役回りを演じなくてはならなかったわけです。

それと同じようなことを煙山村の農業労働組織においてもみることが出来る。煙山村の松ノ木部落家番号②の高橋家が田植の人手が必要だという時に、他の古い家が村中を回って人手を集めてくる。それはその家が、②高橋重助家との間で水を利用して貰っているからその役回りを演じるのです。結果的に水を使わせてもらえる、小作として最後に回されるけどちゃんと水は回してもらえる、だから人手を集める役回りをも自ら果たしているのだ、お礼として色々なお仕着せをもらった、お金を貰ったりすることもあるということが書いてある。とても面白い事実です。つまり村の内部の関係について、市場的に処理する単機能的関係として説明せず、別の生業上のさまざまな相互関係を踏まえて労働組織の運営の仕方を説明しようとしていた。その事実をインタビューを通じてつかみ取り、叙述しているわけです。実はここから、後に中村史学と言われる中村先生的な歴史を説明するスキームが構成されていくことになります。

第三章は土地所有と貢租、そして第四章は商品経済が論じられています。煙山村という農村社会でも、生業として営んでいる農業が「商品経済」(＝市場敬愛)をきちんと組み込んで営まれていますよ、ということ、高橋家と煙山村全体の商取引の事例を踏まえて、説明されています。しかし、この節は75頁にすぎず、共同体を扱った第二章と比べると非常に小さい部分しか割かれていません。煙山村が持っている地域的特性かもしれませんが、中村史学グループが商品経済に関してはあまり関心を抱いていなかった表れなのかもしれませんが、本当の理由は確定できません。私が今回読んで思ったのは高橋家が薪炭を含めて薪を盛岡の城下に行くとときに途中で他の米や穀物などとバーター取引している事例を発見し、貨幣を使わない取引が行われている、と書いてある点です。これはこの地方における商品経済化(＝市場経済化)は、そんな非商品経済的行為と並行しながら進展していたのだ、という姿が分かりまして、私には非常に面白い事実だと思いました。頭の中で考えて資料解説や情報蒐集を行うのではなく、歴史的現実 に即して史料解説

や情報収集が行われたからこそ、このような興味深い事実を発見することが出来たのだらうと思います。今回読んで面白かったことはこれらに限らずたくさんありました。皆さんも是非お読みください。問題関心の持ち方によって面白い事実を引っ張り出すことができるのではないかと思います。この調査報告書はそういう類の研究成果です。すぐれた実態調査、モノグラフィックな調査研究の持つ醍醐味は、そういう事実認識の多面的で多様な発見をゆるすのであり、それは、教科書的な理屈が先にあって、そこから理屈に合う事実や事象解釈を行ってしまうような研究からは絶対に出てこないものだと思います。現実とはそういう意味で奥深いものであり、多面的なものだなあ、という思いを、今回も煙山村の研究成果の読解から抱かせられました。

次に、『史的分析』の主な論点についてまとめてみます。繰り返しになりますが、この調査は 1951 年～1955 年に行われました。足掛け 5 年、実働 3 年くらいでしょうか。対象は基本的に岩手県紫波郡矢巾町旧煙山村の松の木部落が中心です。これが実は後に批判を生むことになります。この高橋重助家の史料とその周辺の家々の方々のインタビューと実態調査、まだ耕地整理がきちっと行われずに近世期の耕地状況や水利状況が残存している状況下、その「遺制」をつかみ出すことが調査研究の主内容でした。調査対象の高橋重助家ですが、実はこの家は古くから煙山村に在住している家ではなくて、宝暦 7 年に隣村から移ってきたと言わる家でした。その背景には宝暦年間にこの地方で 2～3 年ごとに続いた凶作があったと書いてあります。こうした背景の中で高橋重助家が村に入ってくるのですが、ほどなくして寛政年間、30～40 年を経、一世代後の時代に相当しますが、その時期になると高橋重助家はこの煙山村という行政村全体の中で重立の家になっていくのです。このプロセスがどのようなものであったのか、という叙述はありません。これ以上の分析は出来なかったのだと思います。実際に調査分析を行っているのは、幕末の 1860 年代から大正期の 1920 年代までであり、これがこの村の共同体の分析対象時期です。従って日本の経済社会が第一次世界大戦を経て、農業社会から工業社会へ大きく変化する時期、全国的に見ると労働力人口にしても生産高から見ても農業という産業が繊維産業や重化学工業、その他第三次産業の成長によって、大きく引き離されてしまう時期です。このような時期に、この東北の北上平野に位置する煙山の村の内部がどのように変化していったのか、が事細かに分析されているという事になります。ただし、事項毎に取り扱う時代の設定はきちんとしているのですね。ここに書いてあるように近世期の土地所有や年貢の仕組みと、近代になってからの地租改正後の土地所有と土地の貸借関係、地主制などはキチンと対比的に描かれておりまして、その点に関しては専門的な見地から安心して読むことが出来ます。

すくなくとも中村先生は、この本全体を、有賀喜左衛門の石神村の調査を念頭におきながら、これを乗り越えようというアンビションのもとに仕切っておられるように見えます。煙山村の名子制度の話もちろん出てきます。中下層農家で特に下層農家郡の小さな家々が、高橋家等の重立たる家々と名子契約をするのですね。おそらく近代になってからの契約関係というものが反映されているのだと思いますが、凶作の時には救済してくれるという意味で名子契約をします。従ってここでは、あまり存立基盤が強い小さな家々が大きな家の生業や各種インフラの中に丸抱えにしてもいい、その代わりに労働力の提供を行うという構造が描かれています。別の視点から見れば、そこ

に強調点を置きつつ叙述がなされていると言え、この調査研究の内容が、実は名子制度を含む家々の社会関係が、実はそれ自身単体として一義的に存在するのではなく、様々な共同体的諸関係の連鎖と組み合わせの中に存在している、という点を明らかにすることがこの調査の内容となります。後で図を見ながら確認しますが、共同体的諸機能として言われている労働組織の問題とか水利用の組織にしても、水系の問題から始まって、溜池の所有、利用の話に至るまで非常に複雑な構造を持っているのが煙山村の実態です。そこに入会の関係が入ってきまして経済的な諸機能をもとに家連合のグループができあがっているよ、これが実は一つのコンパクトな共同体にまとまらないで、それぞれ独自のネットワークを広げながら重層的に存在し、機能している、というのが分析結果のキモということになります。

これが有賀先生が、「斎藤家の部落」としてコンパクトな名子制度の「大家族制」として描いた南部二戸郡の浅沢村石神部落とは違うところなのですね。煙山、そして松の木部落は決して「高橋重助家の村」ないし「部落」ではない。高橋家は発言力は強いし、重立った存在ではあるのですが、石神とは異なって、各種機能毎の家連合ネットワークが高橋重助家を中心としてまとまっておらず、その意味でコンパクトな共同体のイメージとはおおよそ異なるイエとムラの構造だというわけです。これが煙山の発見です。しかし、それにも関わらず水や山林の利用関係の強さが労働力提供の基礎となっているという事実の指摘が興味深い点で、この事実が、実は名子、被助口（スケラレグチ）、テツダイと呼ばれる労働力提供層の社会経済的な背景をなしている。すなわち、彼ら遠くの家から近くの家に至るまで小さな家々が高橋重助家に非市場的な各種労働力提供を行う理由が、そこにあると指摘しているのです。従って共同体的諸機能というのが重層的に存在しているだけではなくて、相互に影響力を持ちあっているということも重要でありまして、中村史学の論者の中には、以後、「共同体諸組織の分化拡散の傾向性」というのが歴史理論のように取り扱われてしまったのですが、煙山の調査から導き出される分化拡散する共同体的諸機能組織の世界は、分化拡散し、解体するだけでなく、相互に関連をオーバーラップさせその点で強い共同性を生み出しているという面を持つ村落的世界でもあります。煙山の実態調査内容は、多角的に読み直されなければなりません。さらにも、共同体的機能が家連合組織として重なりあいをもつ家々が共同体としてのまとまりが強い、すなわち、共同体のコア部分はやはり様々な諸組織が一緒になっていますよね、というのがもう一つ発見した事実として指摘している事柄です。これは中村先生をはじめ既にくりかえし指摘しておられる事実でもあります。だから周辺部分にいたり、諸機能の重層性をもたない部分にいる家々となってくると、その家々は高橋重助家の支配下から離れて行くことになり、自由に行動することになるわけですね。それで、他の複数の重立の家々との間で新たな活動関係を持ったりしながら、特定の家には従属しないような「自立」した農家が登場してくるのだ、ということになる。そのような動きが、商品経済化（市場経済化）や土地生産力の拡大、水系の変化に応じた水利用の変化などとも相まって、農村社会のまとまりというものが解体していく、中村史学の共同体論の基本的な構図はそのようなものです。

有賀喜左衛門の世界では、共同体的諸機能はすべて家族関係の論理によって処理されてしまう。なんでも大屋斎藤家の血縁関係に繰り込まれます。土地を借りても小作名子となり、屋敷名子と

ならざるをえません。従属関係にある名子のような形態ですべてが斎藤家の「大家族」の関係に入ることとなり、手伝いに行かないといけない、生活を一緒にしなければならない。「全体的相互給付関係」に組み込まれていくわけです。煙山の場合は、小さな家々は、基本的に結構バラバラになっていく。しかし、石神のような世界がないわけではない。よくよく見てみると労働関係というものが親族家族、奉公人、名子、名子的出入人というコア部分の労働の部分に存在している。やっぱり血縁の論理というのが存在し、「高橋家の名子」というような意識のもとでその奉公人や名子達が働きにくるという構造も存在している。もちろん労働の対価は払われるのですが、基本的にはそのような意識構造のなかで高橋マケといわれるようなものが存在しているということも明らかにされています。結合の現実はやはり、生業における奉仕と分配という経済的相互関係に加え、血縁がそれを色付けしていくということですね。かつて私は、若気の至りで村研でさまざまな発言していた時、「同族とか家族というものはね」と教えてくださった方が黒崎八洲次朗先生です。先生は「実際の経済的な活動、生きていくための生活上結び合えばいけないような関係の上にポンと乗っかってくるに過ぎないのが、血縁関係や同族関係というもんですよ」と教えてくださり、それまでしゃちこ張った思考をしていた私はハッと目が開かれたような気がしました。実は、煙山でも血縁関係がそういうものとして描かれているということも、今回読んで改めて面白いと思わされました。大きく見ると、村落社会において、機能毎の変化要因によって共同体諸組織が分化拡散するという歴史的傾向はどこにでもみられたことであり、それが煙山の場合は、対象とする時期である幕末から明治以降にかけての時期に大きく変化する歴史的プロセスとして描かれているわけです。

かつて農村社会の解体とか共同体の解体というものを農民層分解論として論じられました。村研などでも 1940 年代後半から 60 年代にかけての時期、農業経済学やマルクス経済学の研究者が大会にたくさん参加されています。特に大内力先生が農民層分解論の論客で、非常にスマートに、農民層分解論によって日本の近世社会から近代社会への農村社会の解体を説明されています。私を指導してくださった嶋田隆先生が、「大内君はね、私達が煙山の実証におって提起した共同体の問題をほとんど考慮しなかった」と言っておられたことが印象深く思い起こされます。多くの研究者が中村史学グループの煙山の実態調査の存在は知っていても、にここから何かを学んだ形成は多くない、という事かと思います。従ってこの実態調査の成果から何を学ぶことができるかという問題は、いまでもけっこう新しい問題であり続けているのかもしれませんが。農民層分解として見えていた近世村落社会の解体という事象は、煙山調査の成果を踏まえてみると、家々の生業の自立化プラス家連合の分化拡散という事象です。大きな家がもはや小さな家を抱え込む必要が無くなってくる、逆に見れば、小さな家がもはや大きな家に抱え込まれなくても生業を維持できるようになる、そんな村落社会の姿が、実は両極分解的な農民層分解の過程として描かれてきた村落社会の実情だったのです。

両極分解という現象は、家産としての土地の所有規模でもって農家の経営規模を類推し、農家の生業規模が大小に二極分化する、というストーリーで語られる現象ですね。しかし、大きな家が小さな家を囲い込むような場合、これは家産としての土地が小さくても大きな家の経営の中に直接・間接的に入っていけば生きていけるわけですね。名子契約の中身と同じようなものです。非常

にリスクな状況の中で助けてくれさえすれば、多少生活水準は高くなくても生きていくことが出来る状況が村落内部にある。このことが小さな家にとっては大事なことで、この必要がなくなるということは市場の問題や他に働きに行くことができるという構造の変化の中で、小さな家々が特定の大きな家との関係を薄くしても生きていけるということでもあります。これが共同体的諸関係の希薄化ということで言われるものでありますけれども、実際に農村社会における大小の家の分解と言われるのは、同時に共同体的諸関係が残存するという面もありまして、これが全くなくなるというような時代というのは 20 世紀の後半にならないと出現しないわけです。

したがって農村社会における近隣関係の大変さや共同体の縛りのキツさという話は、こういう大きな共同体的諸関係の希薄化と残存と言われるところの残存の部分を見ているだけのことで、それが強い弱いといのは地域の諸事情によるわけですし、そこで生活を営む人々の生業関係の持ち方にもよるわけですが、大きなところではこの構造の中でみんなバラバラになって小さな家が自立していくプロセスとして、農村社会の農家経営の動向を軸に据えた歴史的説明が可能だといえます。

農家の複合的生業構造という言葉は、私たち共同研究グループのディスカッションから自然に使われるようになった言葉で、特に京都産業大学の山内太さんが内容を充実させて論じてくれています。文字通り生業を複合的に営むとことですが、農業経営といってしまうと近世以降の現実の農家が生きていくために作り上げてきた地域資源を利用した様々な内容の営みからなる農家の活動実態にそぐわない。むしろ米だけを作る農家は特定の時代の特定の地域の農家だけではないか、という観点からこういう面倒な言葉使いをしています。歴史的に見ると、「百姓」といわれてきた近世までの農村社会の人々は、中心に土地を利用した農業はあるが、その生業としては何でもやるような「農家経営」であったのではないか、という発想に基づく言葉です。

生業を営むために地域の中で他の家々と結ばなければならない様々な共同体的諸関係があり、それがたくさん重なり合うと共同体が強くなったと見え、そこに血縁的なものが入ると家の論理が強いとか、家族、血縁の論理が強いと見えてくる、という話でして、共同体というのは、実際に実態に即して見ようとするとその強弱や構造は複雑に絡み合った諸関係としてしか見えてこないということでもあります。だから家産の多寡で農民層分解論として農村社会の解体を説明しようとする、一面しか見えないことになり、実態に即した説明にはならないことになります。農民層分解に依拠した農村社会の歴史的変化の説明は、旧社会から近代社会への転換を教科書的に同義反復するだけで、農村社会の実態に即した分析にはなっていないと考えた方がよいでしょう。

これでだいたい終わりなのですが、[図を示して]煙山村はご存知のようにここにあって、石神村はここにあります。同じ南部藩、岩手県です。[さらに別の図を示して]そして労働組織というのはまさにこういうものでありまして、高橋重助家がありまして、家族がありましてその周辺部分に奉公人がいまして、その外側に名子層がいまして、その外側に名子的出入人がいまして、その外側に被助口がいまして、一番外側には賃労働がある。このように整理された労働組織の説明は見事だなと思います。これは石神村の事例を非常に強く意識した労働組織の説明であり、石神をみると、そこでは特に被助口もしくは手間、賃労働の部分が、ほとんど説明されていないのですね。実際にそれ

が無かったとは思いますが、あってもヒアリング情報として獲得できなかったかもしれない。

そして労働組織と非常に強い関係を持っているのがこの煙山の水系であります。この図でいうと高橋重助家はこの辺り[図を示す]にあるのですかね。そして重助家の土地がいっぱいありまして色々な所に分散し溜池も持っていて、この関係をもって家々は高橋家との関係を持つわけです。労働の問題と水系の問題を示したのがこの図でありまして、水系が違っていても高橋家が持っている溜池や水系の権利の関係の中で沢山働きにきていることを明らかにしている。こういうものがないと地域の支配権力が発揮できない、つまり基礎があるからこそ働きに行かざるを得ない、生殺与奪の権利を握られているということになります。それを緩和する結合の論理というのが、おそらく血縁原理ですね。ウチは高橋さんの所の名子であるということを意識しながら高橋家の生業生活に加わる。全般的相互給付関係はおそらくあったのででしょうが、煙山ではこの給付関係はあまり説明されていない。それに対して石神はとても丁寧に拾われていましたね。これは[ほかの図を示す]それぞれツキアイの関係だから煙山に留まらず色々な村々に伸びひろがっていることを村長先生の研究が示している。それをまとめてみるとこんな風になって[ほかの図を示す]、高橋重助家は色々なものが重なって年貢を納める組までこんな風に存在し、その中心にいるから重助家が重立った家として指導力を持っているという話になるわけです。

二つ目の話に入りましょう。このような煙山研究を踏まえ、中村先生は、御自分の作り出していた日本経済史の世界にそこからわかったことをどのように埋め込もうとしたのかという話です。中村先生の背景にある歴史観、歴史像なのですけども、その特徴がどのようなものであったのかについて、今回ちょっと真面目に考えてみました。中村先生の歴史学的世界は一般的に第二次世界大戦後に書かれた『日本社会史』に示されていると言われています。しかし、実は、歴史を経済史的に見る中村先生の考え方の基本線は、すでに大戦前に講義ノートをベースとして書かれた『日本経済史概説』の方にもっと明瞭な形で示されているように思います。かつて安孫子麟先生が「中村先生の『日本経済史概説』は名著だ」と仰っておられたことを思い起こします。私もその評価が適切だと考えています。私が大学院生の頃、この本をはじめて読んだ時の印象は、あまり面白くない、というものでした。なにせ古い本だしいろんな歴史的事実がごちゃごちゃと脈絡無く書きこんであるように見えたからです。実に浅はかな読み方でした。今回読み直してみたら、歳をとって少しは賢くなったためでしょうか、これはやはり名著だ、と随所で思われました。この本の内容構成をみてみましょう。次のようなものです。

『日本経済史概説』(1941年、日本評論社)

第一篇 原始時代(45頁):民族と文化の形成、原始経済、
原始社会、原始経済の推移

第二篇 氏姓時代(45頁):国家組織の発展、氏姓時代の農業、
手工業・交換・氏姓組織の変貌

第三篇 律令時代(94頁):律令国家、農業と原始産業、

手工業、商業と交通、律令制の推移

第四篇 中世封建時代(174 頁):中世封建制、農業と原始諸産業、

手工業、商業と金融、中世封建制の崩壊

第五篇 近世封建時代(238 頁):近世封建制、農業と原始産業、

手工業、商業の発達と都市・交通、近世封建制の崩壊

中村先生は、古代から始まって近世江戸時代に至るまでの歴史を日本経済史として、非常に網羅的に、かつ議論になるような論点をきちんと踏まえたくて論じておられるのですね。これはひとつのきちんとした歴史の見方なのです。歴史学では、時代区分論や社会構成体論といった議論がなされますが、それらの議論とは少し違った先生自身の視点からなるひとつの歴史学的スキームの提供なのですね。ただ、この『日本経済史概説』の世界には、基本的に共同体と発想はまだ存在していないのです。共同体論がありません。農村社会については、その近世期の特徴として自治を行うような村請制については説明していますし、都市の問題、性格もちゃんと説明しているのですが、その世界が共同体についての中身を持った言説としては展開されていない、この点が私の指摘したい事です。

この日本経済史の教科書としての特徴の第一は、当時のマルクス派以降の日本経済史のテキストとは大きく異なり、近現代という時代が存在していない、江戸時代で歴史がおわり、近現代の経済史が存在していないという点です。これは中世史研究から始まった中村先生の独特の歴史観です。中村先生にとって、明治維新以降は、まさに自分の時代＝現代であって歴史学の対象とする時代ではないのですね。古代か中世かわかりませんがあの時代の日本社会をプロトタイプにしなから、それ以前の原始社会とそれ以降の日本の歴史を見て、そしてそれが壊れていくプロセスというのが日本の近代社会が始まる準備期間だと考えておられる。日本経済史の学問的な形成史をみると、一橋大学の福田徳三先生が書いた『日本経済史論』、それと内田銀蔵先生の手記が書かれた一連の日本経済史の諸論考が示している通り、基本的な歴史のストーリーが明治維新で終わっています。そのような歴史認識が、日本経済史研究の出発点だったんですね。興味深いことに、中村先生が考えている歴史のスキームはそれらとほぼ同じなのです。明治維新を起点として日本の近代＝中村先生の徒っての「今」化が始まった、それ以前は旧社会が壊れ、近代を準備する歴史である、江戸時代はその近代化の準備期である、そういう歴史の見方です。福田徳三先生たちは、日本の江戸時代をヨーロッパの絶対主義国家のアナロジーで考えていますが、中村先生の場合はそれを、再編成された解体期の封建社会として押さえ、「制度的または表面的には最も整備された時代」であり、大名領知制の完成、戦国大名の領国内統治原則、一円知行と大名領国制がそれを示すとしています。しかし、「実質または内容からいえば末期的な現象の多くを含む時代」であり、さらに「封建的支配体制の崩壊、王政復古の明治の立憲政体は、既に偉大なる変革であり、これを以て原則的に封建時代の終末とするは当然であろう」(367 頁)と説明されるのです。

さらに、江戸時代を「幕藩体制」として支配統治秩序から説明している点が目につきます。しかし、農村社会の内部における「共同体的諸関係」の存在は自覚的に展開されておらず、説明する

論理も読み取れません。親分子分の支配関係に関する若干の指摘はありますが、共同体の持つ身分論的な特徴としては説明されないのです。近世期の市場経済化の問題は、商業の発達(外国貿易と大商人・高利貸商人の増大)と交通運輸、農村社会における地主小作関係の拡大、といった大まかな説明に終始しており、現代の経済史の捉え方とはずいぶん異なります。農村社会の市場経済化に関する視点や説明もほとんど存在しません。総じて、『には経済史概説』は、明治維新前の「封建制」社会が解体するという視点から日本の社会経済の歴史的変化を概説しようとしたもの、とすることができます。

そうすると、農村社会がどうなっているのか知りたくなります。村落共同体が支配的な農村社会の実体とその社会経済的な諸関係と共に説明されなくてはならない。商業の発展をみても農村内部の商業の発展が語られていないのが『日本経済史概説』の特徴です。したがって、明治維新前の封建性社会の解体という視点から日本経済の歴史的な概説は行っている、その見方は中世のあたりに始点をおき、それが解体する、という構図で説明されるものですから、当時のマルクス経済学者が描く日本経済史、すなわち後進国的な発展をした日本の特性は何か、それ以前の社会はどのようなものだったのかという「後から目線」で経済史を論じようとする見方と真逆な説明の仕方になっているのです。それが中村史学に対する色々な批判や、無関心を引き起こす原因になっていたのではないかと私は思うのです。

中村先生の書いたものの中では、御自分でもうすべてわかってしまったという視点から日本社会史を説明してしまっておられるので、私たちが中村社会史なるものを経済史を踏まえたうえで理解するためには、めんどくでも、『日本経済史概説』と『日本社会史』を併せて読む必要があるように思います。その際に重要なのは、『村落構造の史的分析』の後、中村史学グループによって『解体期封建農村の研究 諏訪藩今井村』の研究をはじめとして、岩本先生の三陸漁村の研究、矢木先生の製糸業発展の研究などが行われ、共同体という視点を踏まえた実証的世界が明瞭になってきたという事実です。それらの調査研究が進む中で、中村史学は、基本的に旧社会が解体していく旧社会解体史観とも言うべきスキームで経済史を論じる始点を確保していったように見えます。その前提に、中村先生の日本経済史に共同体論が埋め込まれた、という「中村社会史学の形成史」があるわけで、『日本社会史』は、その作業にはかならなかったわけです。さらにそれは『日本の村落共同体』の仕事へと繋がっていくわけです。これら一連の仕事は、最初の『村落構造の史的分析』の話の中でも触れたように、学説史的にみると有賀同族団論、家理論に対する経済史の実証研究からのアンチテーゼとして進められたものであったように見えます(長谷部「日本における村落共同体の発見——有賀「<家>理論」から中村「共同体論」へ——」)が、大きくみれば、日本の村落社会研究への本格的な取り組みとそれを踏まえた中村先生の「日本社会史」という歴史の見方がしっかりと経験研究に支えられて確立していったことを意味することでもありました。

ただこのスキームには幾つかの問題性を孕んでいます。それは、明治以降の近代化に関して中村史学は、遺制としての共同体以外、何も語れないということです。中村先生が『日本社会史』の後に論じた問題が、近代には共同体が残存するけどもそれは遺制であった、という指摘だった、ということがそれです。これは労農派や宇野派の考え方と共振し一緒になる。講座派の研究者達は

農村社会に関して政治経済学的な検討を一生懸命する、古い諸関係を利用した農民運動が農村社会をどのように変化させていったか、という問題を説明するわけですが、中村専制的にみるとそれは壊れてしまった社会関係の残存でしかない、積極的に説得する必要性がない、ということになります。

日本の近代史をみると、第一次世界大戦が終わる頃まで、日本はやはり農業を基盤とする農業社会であり、農村社会なのですね。高度経済成長が 1950 年代後半から始まり、ここで日本の農村社会が消えていくわけですが、実はもう少し大きな視野で歴史を展望してみると、逆に第一次世界大戦期の「大戦景気」が終了した時点で、日本の農村社会はほとんど現代的なものになっていたと考えるべきでしょう。残存といってもその時期までの事だと思っています。だから現代化というのは第一次世界大戦前後から始まったと私はみているのですが、戦後の高度成長も農村社会の変化もそれに続いて消えていくという感じですね。だから農村社会論は社会学でも非常にマイナーですし、経済史の世界でも、いつまでそんな研究をやっているのだと言われてしまっています。でも農村社会から共同体的要素がなくなってしまったからこそ、私は歴史研究の世界ではその問題が非常に面白いのではないかと思っているのです。各地の地域社会を歴史的にみていくと、中村史学的な始点からは論じられてこなかった社会経済史的諸事象が沢山あって興味深い。

実は、共同体論として未だ検討されていない課題は沢山あるのです。煙山研究における最大の課題は、近世の藩政村論が論じられなければならないという問題です。煙山研究批判の最大手は水津一朗(京大地理)先生の批判(『社会地理学の基本問題』1961 年)だと思います。私は、この批判は、中村史学にとっては決定的なものだったようにかんがえています。共同体的諸関係が煙山村を越えて分化拡散していたわけではなく、実際は行政村内に収まってしまっていたのではないかと、という地理学的批判です。これと村のまとまりとは一体何なのかということを巡って、中村史学とそれ以外の人達の議論がずっと対立してきた、というのが中村史学批判の主流ではなかったか、と思っています。確かに、共同体的諸機能組織の分化拡散によって、村落社会内部の共同体としてのまとまりは次第に希薄化していったのですけれども、何らかのまとまりは近代になっても確かに存在していた。これが近世藩政村や近代行政村との関わりで充分あきらかにされなければならないわけです。その意味で、中村史学における地域社会論的視点の不十分さを認める必要があるのだと思うのです。南部藩では通という形で村や藩の間を繋ぐ地域行政組織がありますよね。これは日本史の久留島[浩]先生の組合村の話と同じもので、関東地方に限らず全国的に存在していたように思います。藩や幕府が直接村を支配しているのではなく、その間に地域的な様々な組織を作られ、村を超えた村連合のような中間組織を通じて村々の支配行政が展開されていた。それが有形無形の歴史的な前提となって、近代以降の地方行政組織が形成されてくる。そのような地方行政の仕組みに関する議論はとても大事なことで、村が藩権力によって直接支配される構造ではないことを明らかにする作業がその後の歴史を説明する上でも非常に重要なものとなります。それは中村史学からすると近世期の村落社会は分化拡散する共同体的諸機能組織とその上部の行政村の無限の横断的連鎖として説明されていて、共同体的諸組織は村の行政支配の範囲を越えて分化拡散し、それとともに家々を繋ぐ共同体的諸関係は希薄化し、自立する家々を行政村が束ねながら

横に繋がっている、という図式で説明されるのですが、これはおそらく歴史の実態とは異なるものだろうと思われます。近世の地域社会の実際はこんな構造ではない。もちろん、行政村が処理できない問題は沢山あります。特に 18 世紀以降になると、村の家々の市場経済化する生業活動とそれを維持するための仕組みは村を越えた広域性を持つようになります。近世の農村社会にはそういった村を越えるような生業組織が沢山存在していたのです。その実態を現代の私たちはあまり知らない。明治新後の近代的地方行政制度の形成は、それら近世の諸組織・諸制度を一度チャラにすると同時にそれらを地域制度の前提として新しい行政組織・制度を形成していくというプロセスを辿る。その点の認識はとても重要だと思います。

最後に、三つ目の話として、それらの課題をどのようにして検討していったら良いか、という私の取り組みの話をしてみます。私はこの問題を検討するにあたって、これまで学界として使い慣れてきた「共同体」という用語を用いずに別のチャレンジをした方が良い結果に繋がるのではないかとそう考えました。中村先生は、近世の村を直接共同体とは考えず、むしろ領主が支配行政のために強制的に造った制度組織である、という事実を指摘されました。村落社会内部では家々が生業維持の必要から形成するさまざまな共同体的諸機能組織が幾重にも存在している。そうならば、共同体的なまとまりを共同体として論じるよりは、共同体的諸機能を「共同性」といった、ぼんやり、モヤっとした属性として理解し、そのモヤモヤとしたものを再度、今度は機能的にすっきりとしたカテゴリーに分類した上で、共同性の構造を重層的なレイヤーとして想定し、それを基準として分析してみれば、村々の個性や一般性を明瞭に説明できるし、各地の村々を同一基準で比較研究できるのではないかと考えたわけです。この考え方は、2006 年の 11 月に開催された村研大会で報告したのですが、けっこう静かな「ブーム」を呼んで(?)、村研の分科ではそれまで「共同体」という言葉しか使われていなかったものが、その後あっという間に「共同性」という用語が使用される用になり、最近では経済史の分野でさえ「共同性」という言葉が頻繁に用いられるようになってきました。新たな発想のパイオニアとして、一定の役割を果たしたのではないかと思います。

それを前提として、具体的には「村落的共同性の三層構造」論を仮説的に提示し、近世の「村」とは何だったのか、という問題について考えてみたのです。周知のように、これまで、近世日本の村落「共同体」の見方には理論的に二系統の考え方がありました。ひとつは、近世の支配行政村をまるごと村落共同体とみる考え方です。これは、近世村を自立した小農を単位とする「寄合」集団と考えるもので、集団の実態を経済・社会・政治の一体化した共同体とみなします。二つ目は、近世村を家・諸機能ごとの家連合・同族的家連合・行政制度が組み合わさったものとする考え方、中村史学的な村落共同体がこれにあたります。それとはちがった近世村落論として構想したのが、上記「村落的共同性の三層構造」論なのですが、これは、学説指摘に見ると、鈴木栄太郎先生の「自然村」論と安孫子麟先生の「三曲面構造」論に教えを受けながら、私たちの共同研究チームが進めている長野県上田市上塩尻村の実態調査の研究成果を踏まえて考え出したものです。

鈴木栄太郎の自然村論は、1930 年代の日本の農村を、行政的集団から始まって階級的集団に至るまで 10 の要素に分け、これによって近代日本の農村社会を分析しようとした。これらの要素

が有機的に一体化していたのが近世行政村であり、自然村と考えました。そして近代農村の中心を第一社会地区と考え、その周辺に第二社会地区を想定して複雑な近代の農村社会を構造的に説明しようとしたわけです。これを批判しながら中村史学的な立場から近代初期の農村社会の構造を明らかにしようとして安孫子先生が考えられたのが「三局面構造」論です。1970年代の村研の村落研究を代表する非常に優れた理論的問題提起だったと思います。この理論の前提となっている実証研究は、須永[重光]先生や菅野[俊作]先生達による宮城県南郷町の調査研究の成果で、『近代日本の地主と農民』としておおよかにされています。安孫子先生は、南郷村の調査研究の中で特に菅野先生の研究成果に依拠しながら、近代における行政村というものは近世村落共同体が解体後に再編されたものであって、行政末端機能、独自の自治機能、近隣的生活機能という三つの機能からなっており、これを整理することによって近代の村の特徴が見えてくるのだ、と主張されました。中村史学における近世村落共同体と近代の村との接合がこれによって化膿になるであろう、という問題提供をなされたわけです。

私はお二人の議論を踏まえ、村落社会の共同性の諸要素として中村共同体論における共同体的諸機能その他の要素を組み立て直して三つにカテゴライズし、これを分析の基準とすることによって近世から近代における村落社会を分析してみれば、さまざまな地域的差異を明らかにしながら比較研究ができるのではないかと考えたのです。その基準を具体化したものが、この3つのレイヤーです[シート資料]。を出してみました。これは不評で改めて考えなおして最終の比較基準モデルとして三層構造にまとめてみました。A 領主支配に関わる村落行政・社会生活、B 経済生活・生業における経済的共同性、C 同族的家連合集団における私的な共同性という三つのレイヤーです。共同性が非常に強い古い村落共同体とは、AもBもCの血縁関係の論理で一色になっているもので、近世初期以前お氏族社会の村落などはそのようなものとして説明されうるでしょうし、戦国時代の惣村などもそういうものとして分析できるかもしれない。もしAやBのレイヤーに属する共同性の要素がC的な血縁的共同性の性格を持たず、機能組織として純化しているのであれば、共同性のまとまりの性格は比較的新しいものになっているといえる。中村先生の議論を否定することなく村落社会を通観しうる分析基準となるではないかなと思ったわけです。山本先生の宗教組織のご報告を聞いている内に、こレイヤーには宗教組織も追加しなければならない、などと考えました。ただし、あまり沢山の要素を盛り込むと、複雑になりすぎて比較ができなくなる可能性も出てきます。まずはこんなモデルで比較研究を試みるなら、もしかすると国際的な比較研究も化膿になるだろうと考えています。

実際、私たちは日本とヨーロッパのドイツ、イギリス、フランス、アジアではタイ、インドネシアのバリなどの農村社会と比較研究を行いつつあります。アジアではタイもバリも米を作っている地域なので、生業条件が類似していることから、まずは比較研究を試みたのですが、結構比較の成果が出てきています。バリの農村などは、三つの基準に当てはまる事象をしっかりとピックアップすることができ、日本との類似性と異質性が明瞭な姿を取ってあらわれてきます。行政村は開発政策の一家案として権力サイドによるフィクショナルな共同性組織ですが、デサ・ディナスとしてきちんと存在していますし、それが伝統的な慣習村デサ・アダットと重なって存在している所にバリ農村の行政組織

の特徴があることが、よくわかりました。残念なことにバリは文書を作成し蓄積する文化のない社会なので、歴史研究には不向きで、むしろ私たちが情報を集めて村の歴史を作ってあげているような状態です。1970年代以降開発が本格化して以降の歴史しか探れませんが、日本の事例を前提として情報を蒐集すると、結構色々なことが分かってきて面白いです。現時点でも、「三層構造」に相当するような構造がちゃんと存在し、人々がその中で生業を維持しながら生活をしていることが明らかにあります。

雑ばくな話になってしまいますが、バリ農村の特徴として指摘できる興味深い事実があります。それは、バリには切羽詰まったまとまりがない、ということです。村としてのまとまりが薄い、と言ってもいいかもしれません。それに比べると、日本の村落社会はまとまりが強いですね。村落内部のどこかの家を中心にしてまとまる。そのまとまりは、かなり最近まで持続している。田舎は息詰まる社会空間だといわれる所以です。しかし、バリの農村は息詰まるような切羽詰まった空気がないのです。何事にもイージーな面が多く、この集まりをちゃんとやらなければならないという切羽詰まったまとまりが薄い。何故かなと考えていたのですが、最近地理学者と話をする機会があり、そこでヒントを頂戴しました。日本には冬がある。春になるまでどうやって食いつないでいくかが深刻な問題である。だからみんなで一緒に食いつなぐための生業活動に精を出さなければならない。それに対し、バリは熱帯です。消費生活の水準は決して豊かとはいえませんが、熱帯だから土壌は豊かであり、そこかしこに食べるものが豊富に実っており、必ずしも排他的ではない。そこらに生えている果物や食べられるものをパツともいで食べても問題化しない。だから餓死者も少ない。南国は南国ですし、北国は北国なのです。ヨーロッパの山岳地帯には日本の基準で比較できる共同性が結構たくさんあります。しかし、ヨーロッパはちょっと違います。フランスの平野部で或バリ周辺、イングランドのロンドン周辺などでは比較可能な弓道性が歴史的にもなかなかみあたらない。あちらの研究者に、コミュニティとは何ですかと質問すると、「教会の聖餐共同体」といった答えが帰ってくる。それはちょっと私たちが考える共同性とは違うんじゃないのかと思いました。冬の季節の深刻さは日本の比ではなく、平場の方はやはり生産力が高く、歴史の早い段階から市場経済が進んでいるのです。ピレネーなど山岳地帯は、食べていくことが難しい環境なので、みなまとまらなないと生きていけない。だから日本と同じような共同性の要素を発見することができる。これが今、私が「村落的共同性の三層構造」論によって東西の比較研究を行いながら獲得しつつ或結論めいたもので、さほど大した知見を獲得しているわけではないのですが、彼我の共同性の差異について何事かを説明できたような気にはなっていることの内容です。こんな風に、共同性の構造が持っている特性と一般性を比較することが実際に蚊姥分けで、ここから、世界中の村落社会が比較可能となるわけで、持続していくことが出来れば、なかなか面白い結果を得ることができるのではないかと思います。

日本の前近代の農村社会を扱った中村史学の延長線上で、こんな新しい研究もできるのだよ、ということをお示ししましたので、これで話を終えることにしましょう。

第2章 有賀喜左衛門は煙山村調査をどう読んだか——有賀の読書ノートを中心に¹⁾

三須田 善暢

1 はじめに

三須田は共同研究(矢野晋吾代表)として、ここ数年来戦前期日本農村社会学の再検討をおこなっており、家村理論の形成過程を批判的に検討する作業の一つとして、有賀喜左衛門の遺稿類の整理・分析をおこなっている。今回紹介するのは、戦後中村吉治グループが岩手県の煙山村調査をまとめた『村落構造の史的分析』(中村 1956)に対する、有賀の読書ノートである。読書ノートは大学ノートに書かれており、表題は「中村吉治「村落構造の史的分析」批評集」とあり、余白を含めて100頁を超える。書籍の152頁あたりまで、つまり「第2章農村共同体 第1節農業労働組織」の途中までについての読書ノートである。読書ノートのあとには、「東北地方における耕作地主の労働組織」と題した、書籍を読んだ結果としての教育大での講義ノートが書かれている。(なお、有賀は書籍にも若干の書き込みをしている。書籍は國學院大學附属図書館所蔵、こちらも第1節までの線引き・書き込みがある。)

周知のように、中村たちのグループは煙山の調査から、一枚岩的に扱われる傾向のあった村落共同体を、小家族の独立性が高まるもとで諸契機ごとの共同が複雑に組み合っているものとして捉えた。「村落共同体を成立せしめていた諸契機が……機能的に分化しつつ、それだけ強さを失いつつ消え去らずに外に拡大しつつあること、やがてその過程を経て共同体の崩壊へ進む」(中村 1956: 8)。それゆえ、近世の村は上から作られた行政村と理解するのである。有賀もこの考えを大筋において認める。「家連合はムラとか部落とかいう外枠を持っていて、その内部で複合(あるいは重複)していたと今までは一般的に考えられてきた。それが中村吉治の大著によって見事にくつがえされた」(有賀 1956=1971: 129)と述べられるように、村に対する有賀の認識を改めさせたといつてよい。

だが、この読書ノートには中村らへの批判・疑問が多々書き込まれている。それらは、妥当してはいても瑣末な点への批判・疑問かもしれぬし、あるいは、中村への「誤解」によるものかもしれない。しかし、そうした「誤解」が分かることによって、有賀自身の村、部落、村落共同体といったものに対する考えがうかがえるとともに、その中村との把握の違いも浮かび上がろう。換言すれば、そうした作業を通じて、中村の共同体把握の「不明瞭」さ、難解さも浮かび上がり、それは正確な理解につながるとも思われる。

本稿では、上述の問題意識のもと、読書ノートを中心に紹介し、有賀の中村共同体論への理解を検討したい。

2 煙山村調査・煙山モノグラフの概要

煙山村調査は1951年7月から55年まで研究がおこなわれたものである。このモノグラフの執筆者は中村以外に島田隆、矢木明夫、菅野俊作、安孫子麟などであり、有賀が言及している箇所は、

中村・島田・矢木執筆の箇所である。執筆において、細かい用語の統一などはしていない様子である。

中村の仮説は次のようなものであった。「共同体はくずれたともいえるが、しかしうすめられつつ拡散している」「そして順次に共同体の分解へ進む」「外観における集団＝部落が一村落共同体とはいえないで、……独立の農家なる近代へ移行する」(中村 1956: 6)。中村は、この仮説を実際の村落分析において検証しようと試みたといえよう。

このモノグラフの対象地は岩手県紫波郡煙山村(現矢巾町)松ノ木である。この地は水稻中心で商品生産は米以外あまりすまない場所であった。その大地主であった高橋重助家(農家番号②:農地改革前貸付田畑 20 町、1 町 3 反 3 畝を経営)を中心に、農業労働組織、水利組織、林野利用組織、生活組織といった機能組織を、幕末から大正期(一部昭和初期)までの変遷を調べたものである。行政区としては、藩制村は「煙山」(大字)であり、その中の小字松ノ木(元治検地では丁場と呼ぶ)が対象地である。1951 年当時 27 家が存在しており、幕末は 6-7 家であった。

この調査の結果、機能組織ごとに異なる家連合が形成され、②を中心に一定程度重なりあって、輪郭が不鮮明な共同組織をつくっていることが明らかになった。共同体は拡散し希薄化され、重層的になるのである。

こうして、従来の同族団、親族組織といった側面からの家々のまとまりを想定していた考えを中村は否定する。「地域的に集団している家を村または部落として単純に一共同体村落とみたり、自然村落とかたづけていては、村落の解釈は極めて危険」(中村 1956: 7)である。部落は、現在では行政的な意味とそれにつながる機能しかないと中村は考える。「すべての問題が、共同体という構造の中において把握さるべきであることが明らかだった。農村といい、農民という場合に、いきなり個々の農民を考えることはできない。それは……現在においてもまだ十分でない。」「日本近代化の中で漸進的にしか個体として、主体としての農民は成長しない。だから、……共同体・村落の問題を捨象して、農民を考えることは、……危険であり、誤りであるということを、われわれは主張したいのである。そして、まさにそれ故に自然村落とか部落とかいうものをそのまま共同体と前提するような性急さはいましめなければならない。」(中村 1956: 27)

ここで重要な用語を一部整理しておこう。

- ・「カマド」=血縁者の分家。
- ・「養子カマド」=本家の養子として働いた奉公人を分家したもの。
- ・「名子カマド」=屋敷及び耕地を借り受けていて反対給付を提供するもの。
- ・「助」=賃金労働以外の手伝の労働。
- ・「被助口」(スケラレグチ)=名子や名子的出入人にくらべて比較的に対等な手伝。明治期にでくる。
- ・「主なる出入人」=名子、スケラレグチ以外の者

3 有賀喜左衛門の読書ノート読解

以下、重要と思われる箇所のノート抜粋と、三須田のコメントを加えていく。(中村: 数字)とある

のは『村落構造の史的分析』のページ数、(有賀: 数字)とあるのは、有賀の読書ノート(付録に翻刻を掲載)のページ数(付録ではハイフン付き)である。引用文中の「／」は改行をあらわす。

【「血縁」規範として氏族をとらえる考えへの批判】

まず有賀は、「氏族は生物的な血縁・非血縁にかかわらず「血縁」の規範をもったものである」(中村: 4)という説明を批判していく。「この大体の考へ方は賛成するが、氏族が「血縁」の規範を持つという解釈には賛成しかねる。血縁の如き同族意識として捉へようとするものと思はれるが、氏族の中で氏族員が血縁だとは思はなかったと思ふ」(有賀: 1)。「氏族はむしろ古代の主従関係の組織である。そのことは古代の同族の考へ方をはっきりさせると明かになる。本家と主家は主従関係である。血の関係の家の間においても主従が生ずる。だから血縁関係でも主従的規範となることにむしろ問題を改めねばならぬ。血縁の規範にしてしまうとそれ以外の同族は全然説明できない。同族が血縁の規範で説明できるのは近世の変化である」(有賀: 1)。中村の大前提である、氏族・同族＝血縁規範を持つという点に、疑問をさしはさむのである。

「そこで、p.5の次の説明はおかしくなる」(有賀: 1)とする。すなわち、「氏族社会はその生産力の低さに対応して成立し、その低さの故に血縁＝同族規範をもった社会となったのであり、生産力の上昇にともなって共同の契機が変化するとともに構成員も数も規範も変化し、土地所有も進んで……氏族社会の身分的秩序に階級的秩序が加わるというように変化して、「同族」の内容も変ってゆくということ。その共同体の変化を考えてみた」(中村: 5)という説明である。有賀は次のような疑問を提出する。「これによると血縁＝同族規範が身分的秩序であり、土地所有の変化による階層の成立が階級的秩序であるということになる。それに伴って同族は変化するというがどう変化したのであるか。彼によると「近世という時代は共同体が分解する過程だがまだ分解してしまはずに共同体の諸契機が分化しながら崩れて行く段階だ」というのである」(有賀: 2)。

【原始時代の共同体を平等性の強いものとみる】

続けて、「今迄の所では原始的な或は封建的な共同体を *Gleichheit* の原則により結合するものと見ているようである」(有賀: 2)とし、「そういうもの許りを共同体と考へると非常に限定されてしまう。そういうものは日本にはないのだから日本の共同体をそういうものとする事は出来ない」(有賀: 2)と述べ、平等性の原則の共同体を例にあげて有賀は中村を批判しようとしている。

「原始時代に各戸の間に平等関係が支配したのは生産力が低くて能力の差異が大きく出て来ないからである。その場合にその政治構造に比較的平等組織が支配的だというのは一応推定出来る。それでも能力上の差異はあるから完全な平等はあり得ない。氏族制度の時代に豪族が成立して来たから明かに階級的になる」(有賀: 2-3)。

そこに豪族が成立して、階級的になってくるとしている。そうして「その中の本家(有力家)と共同関係を持つこと」(有賀: 3)により同族が成立するとする。

有賀のいう「封建的な共同体を *Gleichheit* の原則により結合する」との中村理解は間違いであることは、他の中村の著書(中村編 1965)を読めば明らかであるが、有賀でさえもそのように理解して

しまうということは、モノグラフでの中村たちの叙述が分かりにくいということでもあろう。

【「共同体的身分関係」という概念への批判】

有賀は次に、身分関係概念への疑問を提示する。「家は独立していないで何かの共同体(共同関係)に属するから、共同体がなくならないで、共同体の拡散であるとみる。そして共同体的身分関係はうすくなり、同族の意味は血縁に近く縮小し、家の独立性が強化したという」(有賀: 4-5)。「こゝで共同体身分というのは同族ということらしい。同族というなら同族的身分は考へられるが、共同体身分ということが考へられるだろうか。共同体は以上の用法から見ると家と家との共同関係である。……家と家との共同関係はいろいろある。その関係が身分的關係であるとはどういう理由で云い得るだろう。同族関係なら同族関係が親分子分、本家末家として古来成立したものだとするればそういう身分の意味がある。即ち主従的身分となる」(有賀: 5)。

有賀は、共同体身分という概念ではなく、同族的身分という概念を主張し、「共同体身分がうすくなって血縁的身分がになったとは云へない。古い同族的身分が次第に減少して平等関係の身分に移りつゝあったというのが正しい」(有賀: 5)とする。この点も、中村編(1965)などで整理された身分概念の叙述を踏まえるなら有賀の理解の混乱といえるであろうが、しかし、これも「身分」という重要な概念についての中村たちの説明が本モノグラフにおいて不十分であるがゆえの混乱ともいえよう。また、身分という概念の主従関係に有賀が力点をおいている点に気をつけたい。

【家の存立の必要が解消しない限り共同体がある】

「共同体の崩壊はこうにして行はれるか。家と家との共同関係の上に共同体が成立したと見て良いが、……家の存立することにより簡単には崩壊しない。」「部落外部に共同関係がひろがることにより共同体は消滅しない。……いくら外部にひろがっても家の存立の必要が解消しないからである。だから「拡散」ということによって共同体は崩壊しない」(有賀: 6)。この指摘は重要である。有賀は「家」の存立の必要が解消しない限り、共同体は崩壊しないと考えているのであり、中村たちが共同体の崩壊に力点を置いているとすれば、有賀は家の存立＝共同体の持続に力点を置いていることがうかがえる。

【部落と村落の概念的区別、部落を行政区とすることへの批判】

「共同体は地域概念としての部落を超えるものであるから区別すべきで、部落の内外に及んでいるから全く別の概念だ」(有賀: 6)。「中村の概念規定は行政区の単位として部落をきめる」(有賀: 7)。このあたりは中村理解としては問題はない。

だが、有賀は、「部落を地域的な行政区として限定してよいかどうか」(有賀: 7)とも述べるのである。「部落を地域的な行政区として限定してよいかどうか問題である。というのは共同体又は村落共同体には地域が限定されないかどうかという問題がついて来るからである。中村の調査の中で村落共同体は原始には部落の内に限定されるが、次第に分化することによって部落を超えると説かれている。それは煙山村の諸部落のように一種の散村において著しいと思はれるが、それでもこの

共同体(共同関係といった方がよい)の範囲は無限でない許りか、比較的せまい範囲に局限されている。在来の近隣という地域概念も不明確な概念であるが、この共同体は少くも cooley の neighborhood の範囲である。このことは村落共同体はほぼ neighborhood に局限されることを示す(有賀: 7)。

ここで、クーリーを引いて近隣関係として共同体を理解しようというのは意外に思える。なお(有賀: 14 および 51)でも neighborhood が論じられている。

また、有賀は、抹消部分ではあるものの、「部落をつねに行政区画と見ることはできるだろうか。たとへば大字を一部落とするという意味では行政区画であるが」(有賀: 9)とも述べている。

このように見ると、「部落」とは有賀にとって、単なる行政区画ではないという意識があるのだろう。

【家の独立による共同体分解理解への疑問】

共同体の分解についてである。「組合う範囲が広くなったり狭められたりしながら弱くなり、やがてその一つずつが無用になり、ついですべてが無用になって、家家は独立し、共同体はまったく分解するという順序をとる」(中村: 19)という中村たちの叙述を引いて、「これは共同体の分解の極各個の家が独立すると共同体は全く分解するという考へ方であるが、この考へ方はギモンが多い。共同体の規定を家々の共同関係(家連合)とすれば各個の家が独立すると一応分解したといってもよいように思はれるが、共同体といっても中村が見たようにその結びつきの範囲の大小は極めてまちまちである」(有賀: 8)。

有賀は、家々が完全に独立することはないと考えている。「家々の共同関係がいかになくなって独立するか。例へば貨幣経済の浸透して来て、自己の生産物を売り、自分の家の生活に他の家との共同関係が消えて行くことを意味するのであると思ふが、家の生活がほかの家との共同関係からはなれて存在できるのはいかなる状態において可能となるであろうか。少くとも我々は資本主義経済による貨幣経済の浸透によつては決定的に展開しなかった。②が部落内の他の家の米を集め又自分の米と共に盛岡の商人に売ったのは幕末からすでに行はれていた。②と商人との関係は家連合であつたのかどうか。私はこれですら町の商家と村の農家との間に結ばれた一種の家の関係と見たい」(有賀: 9)。「家と家との間に行はれた等価物の交換と見るべきであつて、売買が個人的関係であるとは必ずしも云ひ得られない」(有賀: 9-10)。資本主義経済での商人との関係も、一種の家の関係と有賀はとらえるのである。ただし、これは商家と農家との関係であろう。現在のようない賃労働者個人の消費行動とは異なる。

「家が完全に独立することは不可能に近いのは、家を存続させる基盤の中に家の完全独立を阻む条件があるからである。したがって共同体の分解はこの意味では完全に出来ないのが現実である」(有賀: 10)。このように有賀は、家は完全に独立せず、それゆえ共同体の分解は完全にできないとする。この点が中村たちと異なる点といえる。ただし、「家の存続する限り共同関係がなくならないと思はれる」(有賀: 10)とあるように、「共同体」とはいわず「共同関係」と述べていることにも注意しておこう。

【共同体と村落共同体の概念区分の批判】

「共同体という概念と村落共同体とが同じときめて良いかも簡単には云われぬ」(有賀: 8)。有賀は、「共同体」を広くとらえて疑問をだしているが、これは中村の問題意識とは、ずれているように思われる。このような疑問を有賀が出すのも、「共同体」というキー概念に対しての明確な定義が本モノグラフで欠けていることに起因すると思われる。

【前近代の残滓という把握への疑問・批判】

有賀は前近代の残滓という把握へ強い疑問を投げかける。「P.47 「⑭が⑬及び⑮に対して持つ関係を「いわば前近代的関係の残滓」として説明していることに対してのギモン／▼これは⑭がの労働が賃銀として対価を以て計量され得ない関係を示すのであるが、この種の場合に「前近代的」と云へばいつも明瞭であるかの如くであるのはどうであろうか。問題はどのようにして労働がはっきりした価格で表はされ得ないかということである。それは家の関係から個人がはなれて計量され得ないからである。完全に商品化されないからである」(有賀: 11)。有賀は、労働力の商品化にならないのは、家の関係から個人が切り離されていないから、と説明しており、そしてそれを「前近代的」ということに有賀は批判的である。

以下も同様である。「これによると半プロ的貧農は前近代的な貧農の形骸であると見ようとしている。こゝでも前近代的なものが残滓と見られるのであるが、残滓と説明するだけでは現実の説明にならない。」「しかしそれは家を新しい意味で存立せしめている社会的地盤の性格に関連する。半プロ的貧農と見た所でそれは日本の特殊な家と結びついて存立している」(有賀: 11)。ここも、前近代というレッテル貼り、「半プロ的貧農」という概念規定への批判が見られる。「前近代的」というのは個人主義的でない考へ方をさすのだから、その意味で必ずしも間違いとは云へないとしても、それではどうして労働が価格ではっきり表れないかとの理由は明かとはならない」(有賀: 11)。前近代的ということが必ずしも間違いではないが、労働が価格ではっきり表れない理由が「前近代的」というだけではわからない、と述べている。

以下も同様の記述である。「これで見ると家と家との共同関係が基盤で、個人の労働の価値をきり放して考量ができないことにある。だから非近代的であるが、非近代的でも欧洲の封建社会とは異なる。」「そしてこの非近代的なるものとは日本の封建社会でもなく日本の資本制社会に属するのだから、簡単に非近代的ときめるけるわけには行かない。これを通例半封建というのだが、そういうきめつけ方でも決して説明は出来ない」(有賀: 11)。

【政治構造の関係の重視】

以上の点を、有賀は政治構造の問題と関係させる。「家の存在は前近代の残滓であろうか。資本制経済でも家と結びついたのは政治構造の問題ではないか。政治構造が家の存立を許していたことにあるから単に残滓ではなく、現代的意味がある」(有賀: 11)。有賀は政治構造を重視し、政治構造が家の存立を許していたことに現代的意味があるとし、そのことを単に「前近代的」というだけでは説明できない、としている。そのときどきの意味を問わねばならないわけである。「家連合の

基本的なものが前代におけるそれと何かの共通性はあるが、現代においては多く政治的社会的条件がことなる」(有賀: 12)。有賀は同じ形態でも時代規定、政治的規定を重視していることがよくわかる。

【原始共同体への疑問】

「P.68 「前資本主義社会の基礎は共同体的な生産関係であり」「すなわち労働力は生産手段と結合して共同体に所有され、労働力の所有と利用、その生産と消費とは結合している。それ故労働力の生産並びに消費は協働社会全体の問題である。」「これは原始共同体の性格である」／▼この書物ではこう説明しているが原始共同体を説明しているわけではない。又原始共同体はこんな風に明確に規定されているのは大体 Marx Max Weber 等以来の学説による。しかしこれで良いだろうか。日本史の問題としては共同体をこのように解釈してよいだろうか。後考にまつとしても共同体が全体として生産手段や労働力を共有していたかどうかはなはな問題だ。これを説明し得る何物もない」(有賀: 14)。原始共同体は、中村史学でも前提とされるが、有賀はそこに疑問を投げかけている。

【共同体の家々は階層差をもつ】

「共同体は同値的な一全体としてとるよりも、階層の差のある家の結合したものと考へねばならないから、生産関係を単一体として見て良いような内容のものではない。そうでなければ家は存立しなくても良いはずだ」(有賀: 14)。この点の批判も、前述したように、中村への誤解にもとづくものといえる。

【ふたたび共同体とクーリー】

「◎[共同体の概念について]／㊤中村たちの部落(地域的なもの)と見るものは松ノ木、大木、堤川目の如き地域名称を持つものをさすがこの種の数村的傾向を持つものを部落とする場合にもっと大きな地域を考えへて Cooley の所謂 neighbourhood の概念で考へ直して見るのが大切だ」(有賀: 14)。ここでも再度、クーリーの近隣概念を出してくる。

【共同体を家連合に置き換えることの提唱】

「Marx や Max Weber の Community などは村落を一体として捉へたものである。中村達の概念では村落と共同体とはちがうから家連合に共同体の名を■しようとするのである。そうすると共同体がいくつか重複したり、ずれた部分も生じたり、村落の内部で結合するものも、村落の外部にひろがるものも出来るものとして見なければならぬから、村落とちがった概念である。私としてはこれを家連合という言葉で捉へる方が村落と混同しないと思う」(有賀: 15)。

有賀は、共同体を家連合に置き換えるのがいいと述べている。中村は、共同体を家連合に置き換えて使用していないものの、家連合として共同体を見ていく考えは受け入れていることはいうまでもない。

また、村落と共同体は中村で違う概念としているが、正確には「部落」と共同体が違うとすべきであろう。つまり、有賀は、中村批判において「部落」と「村落」を同義に捉えているようである。

【拡散の意味について】

「本書では A が B の成員を吸収する場合に A が大きくなり弱まり拡散するというのであるが A が強力なら大きくなり強力になり B を全然吸収してしまうことも有り得る。この場合には拡大強化である」(有賀: 15)。これはこの通りだが、あまり本質的ではない批判と思われる。なお、拡散についてはのちにも触れる。

【二重の本家について】

有賀は、「本家を二重に持つことはあり得るだろうか」(有賀: 18)として、二重の本家論を詳細に論じていく。「中村達の p74 の説明では高 5 石又は 6 石位より以下の百姓が分家を出す時に(分前が少くて独立出来ないの)②の如き地主から小作地を分家のために借りて辛うじて分家が独立する場合②は本家となる。血縁の本家と二重になるというのである。②からの小作地貸与によって果して新分家は②を本家とするかどうか。他の地方の場合ならこうして簡単に本家が出来るとは思はれない。②の如き地主と親分子分となるといっても形式的であることもあり、土地の関係も浅い事もあるし、又本家の意味をこの関係に全然適用しない慣習の場合には親分でも本家とは呼ばない」(有賀: 18)。つまり、小作地貸与程度では、本家とするのはおかしい、形式的ではないか、と述べている。

「所で他の場合を見よう。①⑨のカマド(血縁分家)である②は幕末期には②の名子となっていた。又同じカマドの仁太(金治)(3 石余)も②のカマド的存在で①⑨はこれらが②に吸収されるのを止めることが出来なかった(p.71)ということは或る家が創立される時は①⑨の分家であっても、②の分家になり得ることを示している。このことは②の勢力が増大し、①⑨は没落過程にあると、①⑨の保護支配した②や仁太が②の保護支配下に移ることを示すもの」(有賀: 18)であり、「この場合は本家が①⑨から②へ全く転換したことを示す」(有賀: 18)。この場合は、本家が変わったという例であり、二重ではない。

「そこでこの転換の過程を見ると初め①⑨が完全に本家であるが①⑨の没落の過程にしたがって②や仁太が②に次第に附くようになる。中間過程では①⑨と②とが②等に持つ力が伯仲して来る。この場合でも初めから本家と見られた①⑨が本家であるという意識が強かったであろうが、②の力が強くなると①⑨の本家的権威は劣り、②が本家オーヤジドーであるという意識が強くなる。ついに②を完全に本家にするに至る。この過程では或る時期(多分②の力が①⑨を凌ぎ初めた直後)に本家を二重に持つという状態が来るであろう」(有賀: 19)。つまり、二重であるのは、転換・移行の一時期であるとする。

「所で p.74 に説く場合は創立の時に父兄から多少の高の分与をうけ、又②から小作地をうけるものである。或は父兄は小百姓で分与する土地も小作地もなく、②から小作地を借りる無高小作の場合である。(1)の場合は父兄からの分家と意識され、父兄の家を本家とする。②を地主として本家

とするのである。これは本家の意味が明かにことなる」(有賀: 19)。先の例をいうと、②から小作地を貸与されている場合、有賀によれば、父兄の家が本家、②が地主だとなる。また、この場合、「本家」の意味が異なっているという。

「父兄の家を本家とする小さな分家が一般化して来たのは近世であった、近世本家の意味は次第に変わって来た。(2)の場合を見るなら、無高小作の場合でも父兄の家からの直接の分家として土地(+小作地)を地主から借りたものであるが小百姓の父兄の家と次三男の家との間に階級差はないから古い意味の本末家が生ずる■はない。ここでは分家の意識が表面に出て来る」(有賀: 19)。つまり、②から小作地をかりて分家するという場合、これは近世に特有な例である。本来なら父兄から土地をかりて父兄が地主となるのだが、そうではない。ゆえに、父兄と独立した次三男の間に階級差もない。そこでその間には本末の家の関係が生じないとなる。同等だから本末は生じないということであろう。

「幕末期になると二つの意味の本家が併存する。これらの場合に父兄的本家は無力であるし、これは親族的意味のものであり、地主的本家は親分子分的(主従的)のものであるから後者は生活の現実的圧力があり政治的関係である」(有賀: 19)。ここで有賀は二重の本家を認めているようだ。これが暫定的な時期だからであろうか。また、「父兄的本家」と「地主的本家」という用語を使用している。

「だから「二重の本家を持つ」ということはこの場合にはちがった意味になる。そしてこの場合には「労働組織にあらわれた共同体の重層性」p.74 ということは問題にならない位に意味が少い。したがって「土地所有の問題と重なる」p.74 はずもない。前述した①と②との関係においては各自を中心とする労働組織や政治的勢力の対立、牽引、結合等において様々の問題が生ずるし、「共同体の重層」組織として見られる」(有賀: 19-20)。どうやら、「共同体の重層性」と中村が捉えていることを批判しているようである。重層性があっても、ここでは意味が少ないとしている。つまり、地主的本家の方が重要だとしている。土地所有でもそちらが大事になる。ただし「他の場合」としてみた①と②の場合は、共同体の重層組織として捉えていいとしている。

【親分子分地主小作関係の本分家と親族的本分家】

「そもそも本家にとっては分家を立てるのは分家の労働力を期待するからである」p.74 と説かれているのは自分が「日本家族制度と小作制度」において最初に説いたことに初まるが、これは少くとも中世的本家の姿であって、近世になると本家の意味が次第に変わりつつあったから本家の意味も成立の要件とちがって来た。」「親分子分地主小作関係の集団における家の相互関係と親族的本分家の相互関係とでは著しくことなる。「本分家の一体性が残る」というのは前者であって、後者では経営の上では小部分の協力しかない」(有賀: 20)。

親族的本分家関係では、本分家の一体性は残らない。一体性が残るのは「親分子分地主小作関係」での本分家関係であると、有賀は述べる。血縁関係よりも、労働力での関係の方が一体性にとっては重要であるとされる。

【拡散の意味内容の違い】

「労働力の所有と利用とが一体となっているのは地主が支配が強いから、名子等の労働力を自己中心に確保することである。もちろん生産手段は地主が全部所有する。これでは小作は親方支配の内附関係に外ならぬ。この共同体が拡散するには小作人が一人の有力な親方に専属とならず他の親方の小作をし、その比重が両者に均等になるような状態でなければならぬ」(有賀: 20)。

「②の勢力の中に深く入るなら、他の同族団は拡散しても②の同族団が拡散したと見ることは出来ない。このことを明治・大正期の状態で見れば明かになる」(有賀: 21)。

ここでは、②の同族団と、それ以外の同族団との違いを指摘していて面白い。有賀は、②の同族団は拡散していないとする。しかし、ここは有賀の誤解があろう。中村たちにすれば、②の同族団も拡散しているのである。いろいろな機能が分化しているからである。「拡散」という意味が両者で異なるようである。その意味で「拡散分化」という概念は、やや一般的すぎるのかもしれない。具体的な想定事例は両者とも同じであるとしても。

【スケラレグチへの疑問】

有賀は、スケラレグチへの疑問も提示する。「「スケラレグチ」というのは明治期の②の帳面に出て来る。これは名子や名子の出入人のスケとくらべると②と比較的対等な手伝のことを意味する(p.73) 賃労働以外の手伝(スケ)をこれと区別して良いのだろうか」(有賀: 24)。有賀は、「大正期にはスケラレグチは②からのスケカヘシを伴っている」(有賀: 24) こと、「大正期に至る迄はスケラレグチはスケカヘシを伴わなかったのに大正期からスケカヘシを伴う」(有賀: 24-25) 点に注目し、「これに対して小作人の間の協力をユイというのはスケラレグチスケカヘシには②との関係から来る上下の意識があったのではなかろうか」(有賀: 25) と、ユイとの対比でスケラレグチスケラレカヘシに上下的な意識を見ようとする。それゆえ、大正期以降、「従属小作が普通小作に転換した」(有賀: 25) ことと同様に、スケラレグチも減少したのではないかと考えている。このことは「地主の変質による」(有賀: 25) であり、「それは中村達が「村の生産構造の変化」と称するものによく表れている」(有賀: 25) とも指摘していることから、中村たちへの批判というよりも中村たちの論の精緻化を試みているといえる。

【賃金労働とみなすことへの疑問】

つづけて有賀はユイについて論じるなかから、そこでの金銭払いの性格を考察する。有賀は中村の次の叙述を抜き出す。「⑪は大正6年に⑫を分家して」(有賀: 25) ほかにカマドを持ちマキとして独立した。その家々と⑪との間でユイが行われるが、これは「金銭払い」である。しかし「身分関係から見れば賃銀労働になっていない」(有賀: 26) とも判断されるものである。つまり、金銭払いがあっても、賃銀労働とはみなしがたいということである。

これと対照して、有賀は以下のように叙述する。「⑬や⑭が世話をして日雇人夫を集めて来る場合は賃銀労働としての性格を持つといっているが、前者と異なる所は家連合の形をとらない点であ

る。……賃労働は労働の質的計量をより正確に計らうとする点に規準を持つのでこの種の家関係による労働が貨幣で換算されることが直ちに賃労働であると云ってよいかどうか、少くとも欧米的賃労働とはちがった規準にあることはたしかである」(有賀: 26)。

このように、中村たちも金銭で支払っていても簡単に賃労働とはみなしていないが、有賀はさらに慎重に考えていることがうかがえる。家関係による労働は、金銭が介在しても賃労働とみなしうるかは慎重に考えるべきだということである。ここも、中村の批判というよりその精緻化といえよう。

【共同体の歴史貫通性】

上記に関連して有賀は「⑰の経営が以上のような自己のマキの形成の上になされることを以て、中村達は共同体的な性格だというのが、共同体のこういう概念による表現は適当か」(有賀: 26)と疑問を出す。そのうえで、共同体の歴史貫通性を指摘する。「共同体を個人主義的なものでないとするれば日本の家連合を共同体といっても良いがそれは封建社会を以て終りをつげるものでないし、資本制経済の地盤にもなり、又社会主義への過渡期の現在にも存在している。それは家を存続させる条件によって生じているから資本制経済でも日本のようなものでは共同体はなくなる」(有賀: 26)。

前述してきたように、有賀にとっては、家が存続する限りにおいて、近代以降でも家連合、共同体はなくなるとされる。この点が有賀の特徴である。

【夫役と地代の問題、親分子分関係＝政治構造の重要性】

その後、ユイの性格変化について、分家・別家について、およびホマチ田について若干の考察をしたあと、有賀は、夫役と地代の問題、それと関連しての親分子分関係について考察をおこなう。「明治初年に小作人が地主に出す手伝は単なる夫役代納ではない。」「借金(現物地代の未納分)だからこれを夫役で支払う。これに伴って必然的に親分子分が生ずるということは云われぬだろう。現物地代を出しても親分子分とならないということも云われない。現物地代によってそれがきまるわけではない」「地主と小作が主従的身分関係に入るのは土地貸借が夫役地代か現物地代か貨幣地代かということによって規定されるのではない。まず基本的には政治構造から来る。政治が社会保護的政策の皆無な、或は極めて低い状態にある時個々の家の利害を中心とする利害共同集団が根本となる」(有賀: 34)。

ここでも前述のように、政治構造が手伝の性質を決定すると有賀は主張する。地代の形態で関係性が決まるのではないというわけである。外部条件との関係、特に政治構造の重視という点是有賀に特徴的といえよう。

【共同体的諸関係の崩壊要因としての賃労働】

共同体的諸関係が崩壊する要因としての賃労働について考察している箇所(中村: 129)において、有賀は中村たちの論述を丁寧を追って、疑問を多々提出している。

まず、賃労働が共同体を崩壊させるのと逆の現象も生じるとする。「賃労働が共同体関係を崩す

要因のように見えるがその逆の現象を生ずる。／即ち一般の日雇が強められている段階でも、日雇は特定の家との間に強められる場合に所謂共同体関係が生ずる」(有賀: 38)。

有賀はさらに続けていう。「中村達の説では共同体関係の強い段階では賃労働は生じても共同体関係の内部で発生するので一般賃銀よりはるかに安い。従って共同体関係の労働関係と切りはなすことは出来ないというのである。……この見方を次の如くしてはどうか。共同体の身分関係が強いと労働は身分的性格を持つが、その外部に臨時的に賃労働はやはり存在する。それが内部にとり入れられる時これは共同体外部の賃労働であるから賃銀は高い。」「一般に共同体外部の賃労働は発達しない。……所が一般賃銀が *inter-maki* として発達して来る。その場合でもその地盤で A 又は B の如き地主本家に従属を深める日雇人は親分子分関係となる」(有賀: 38)。

賃労働と共同体の関係を精緻におこなおうとしているのではあるが、有賀によると中村はうまく説明が整理できていない。そこで、明治 10 年代の労働関係を引いて考察を続ける。

明治 10 年代は「マキ内の賃労働であるという性格を失はない。」「出す方の *cheap labor* が過剰だからである。このことはマキを崩す理由によらずに逆である。そして労働は何等か計量され支払はれるように思えるが一般的賃銀とはならない」(有賀: 39)という性格をもつ。

さらに有賀は、「10 年代前半の解釈がうまく出来ないと 10 年代後半の説明にうまくつづかない。こゝに何か誤解がありそうだ」(有賀: 39)として、明治 10 年代後半を考察する。この時期の性格を中村に沿って 6 つに整理し、それへのコメントを試みている。「1. 全般的に労働量が減少する／2 代払(代金払か)による雇(日雇)を多く用ひることにより、今迄夫役をとっていた関係の家との関係が少くなる(らしい)／3 名子以外の家からのスケラレグチも少くなる／4 それにも拘らず名子労働量の相対的増加の傾向(注このことは名子の夫役が余り減らない事を示すだろうか)／5 名子の夫役量は一定化しつつある／6 名子から夫役を多く徴した場合②より名子にスケカヘシが多い、その場合には下人労働がスケカヘシをする」(有賀: 39-40)。

この整理への有賀のコメントは「1. 全般的に労働費が減少したかどうかギモン。労働の内容が簡単に算定できないことも理由の一。M17 年はたしかに減少したようだが M18 年はそうは思われない。／2 M17 年の労働量の減少は代金払の労働が多かったからスケとしては少かったということだろうが、M17 年の記録には雇は 0 となっているから 14 年以後は 16 年の例外をのぞいて 0 であり説明上おかしい／3 名子以外のスケラレグチも少くなるとあるが M17 年は 19 人、M19 年は 30 人という如く多くなっている。／4 名子の労働力の相対増加はすでに見た如く M18 年から俄然状況がことなる。／5 はわからないがそうであろう／6 名子へのスケカヘシは M17 年までである」(有賀: 40-41)。

結局「M10 年代前半の理解の仕方にわからないことが多い」(有賀: 41)のは変わらず、もう少し詳しく考えることになる。

【明治 13 年と 17 年の比較】

中村たちは、明治 13 年がインフレ、明治 17 年がデフレであり、その影響が明治 13 年における「名子労働の減少、雇の増加 スケラレロに対する現物の決済の増加」の理由とする(中村: 141)。

それに対して有賀は、個々のデータを用いて疑問を出す(例:明治 13 年の名子労働の増加、スケカヘシの発生など)。そうしたことは「②のマキの規制の中で外部的変化の差異が内部関係のちがいを生ぜしめる」(有賀: 42-43)ということとして説明できる。

【マキの結合を「反動強化」とすることへの疑問】

有賀は次のようにまとめる。「要約すると②のマキの経営が M13 年のインフレ期に商品経済の影響により雇やスケラレロの大量の賃労働を入れ、名子の夫役労働をそれと結びつけて行ったのが、M17 年にはデフレにより雇全廃、名子とスケラレロで賄ったが、名子やスケラレロに対してかなり大量のスケカヘシを行ったのは名子の経営に対する関与を必要としたし、スケラレロに対しては雇代用の現物決済をしたと同時にスケカヘシによる関与もしたということになる。このことは②のマキの結合を M13 年より強くしたと説明し、「従来の共同体規制の反動強化、しかも全般的な経営の不利、中小地主の危機」p.141 としている」(有賀: 43)。

ここで次の疑問を出す。「反動強化」とあるが、……M17 年が不況といってもすでに商品経済の進展の中で旧に返へすことの不可能であった情況を示すものである。反動強化と云へば何か古い姿に戻るもの、如く印象づけられるが、それは M17 の新しい情況に対応した結果である」(有賀: 43)。

このように出された疑問は、細かい点については確かに有賀の指摘はあたっているであろう。それは、賃労働が共同体を崩壊させるというテーゼでの安易な分析を慎重にさせる。しかし、後述するように、中村自身も安易な適用をしてはおらず、この時期の雇の実態・性格が限界を持ったものであることを注意していることに注意しておきたい(たとえば、(中村: 153-154)など)。

【名子の 2 類型。宅地の重要性。「相互認知」】

有賀は名子を A 型(宅地・畑の小作料として夫役を出すもの)と B 型(畑だけの小作料として夫役を出すもの)に分けて考察する。「P.162 の第 50 表を見ると明治 17 年に A 型名子であったもののみが名子として残り、B 型名子(畑小作の夫役を出すもの)が主なる出入人になってしまっている。このことは名子と宅地との結びつきがいかに強いことを示すものである」(有賀: 44)。宅地(屋敷地)の重要性は、石神調査でも指摘されており、煙山でも同様にその重要性が指摘された。

また、松之助を例にして、名子と本家の関係にある「相互認知」を重視する。「従属……は深かったが従属の性質にやゝちがった所があったから名子ではない。ということになると従属のいかなる性質が名子になるか。これらは②との間に名子になるという相互認知が慣習上生ずることが問題なのである。」「この条件は次第にちがって行って夫役も少く賃労働も多くなっても、名子であるとの相互認知が大切である」(有賀: 44)。

【名子関係の理解における「相互認知」】

有賀はさらに、名子関係の明確化・崩壊といった理解についての疑問を挟む。「M13 年には名子の夫役量を宅地代分、はせ田分 畑穀分としてはっきりわけている。」「このことは「名子関係が

内容的に明確化された」ことになるのであろうか。そしてさらに後には「雇として一定の代払を他の家と同様にうけて②へ働きに出る、つまり名子という身分関係が崩壊した」と考へてよいか」(有賀: 45)。

これに対して有賀は、次のように主張する。「小作料意識が明確になったからといってそのために名子関係が崩壊したのではない。そこで名子とかオーヤとかいうのは何かということになる。この書物では身分関係だといっているが身分関係とすればそれは主従関係であり、親分子分関係である。」「主従関係や親分子分関係が崩壊するのはこの従属関係がなくなることであるから、夫役が小作料になるとか、賃雇労働になるということだけでは駄目である。」「双方でそういう親分子分になるのだという相互認知がないと生じない。それはたゞの支配従属の関係ではない。そういう深い関係を結ぶことを双方が認め合うことである」(有賀: 46)。

名子関係の理解に際して、有賀は単なる小作料の形態や意識ではなく、従属関係を結ぶことの相互認知が大事であり、中村にはそれが欠けているとみている。政治的・経済的条件に加えての、有賀における主観的な側面の重視といえよう。

【名子へのスケカヘシ】

次に、明治 14 年の名子米蔵らのスケに対するスケカヘシの例が取り上げられる。「この例は極めて面白い。これは名子に対するスケカヘシの良い例である」(有賀: 46)「これらのスケの中へ②(本家)が自家の主要な労働力を出していること、外から来た 8 人(長四郎をのぞく)に赤魚二枚づゝ計 16 枚の礼を出して」いる(有賀: 47)。ここでの名子、名子でないもののスケに対するスケカヘシをみて、「中村達はこの名子 5 人が②の経営に対していわば外部のものとして即ち③や⑩と同じスケラレグチとして同じ程度の関係になっていることを注意している」(有賀: 47)。しかし有賀は「これらのスケラレグチと名子の場合とを同じに見ることは出来ない」(有賀: 47)として、異なるものとする。「古典的」な名子に変化があったと見ることは出来ないだろう」(有賀: 48)とするのである。ただし、このあたりの説明の含意の理解は難解である。

なお、「赤魚の礼も労力の上ではお互にちがいのない交換をしているのだから、礼はいらぬはずだ。むしろ一種のおあいその如きものではなからうか、②の高い地位を表示するような」(有賀: 48)とあるように、ここでは赤魚が②の優位性をしめすものになっている。

【共同体がフラットではないこと、「共同体」という名称が混乱のもとであることの指摘】

「フラットな関係を以て生じている村落社会は Marx, M.Weber 等の古典的学説である。これらは決して日本の同族団の如きものを予想していない。もし村落について論ずるとすればいくつかのマキやマキと関係のない組合せが複合したものとして村落があるから、その中の家連合を……共同体というのとはずれて来る。」「フラットな関係のものを共同体と云うなら大抵の村落はそれからはずれる。」「中村達が②を中心とするマキに共同体という名前をつけても悪いことはないが、この命名はやはり混乱の元である」(有賀: 48)。ここでも、これまで同様の批判を有賀は述べているが、中村の概念の理解不足にもとづくものといえよう。

【村落と共同体の違い。共同体が村落のみではない】

共同体についての指摘はさらに続く。「中村的述語によると村落はいくつかの共同体が複合するものとなる。そして地域概念としての部落の内外にその複合が存立するから共同体は必ずしも村落を指すものではない。村落(部落)はこれとは別の概念である」(有賀: 48-49)。

「村落が共同体でないとは云はれないが、共同体は村落に止まらなくなる。」「百姓以外の共同体もあり得るのだからそういうものは村落のカラから忽ちはみ出してしまう。」「武士団も共同体である。こういうもの、根本は家中心の企業体であるからそれは大きくなったり小さくなったり他の家との関係が变っても崩壊しずに来た。②のような主従の家を中心とした共同体は分解したが家中心の企業の仕方が全然崩れたということはない。何が变ったかと云へば家と家との結びつき方が变ったと云はねばならない。それはちがった意味の共同体である。中村式の考へ方を分析しながら掘進めて行くとういうことになる」(有賀: 49)。

村落と共同体の違い、共同体が村落のみではないこと、それゆえ条件によって他の共同体もありえることを有賀は述べるが、これは中村も同様の理解をするであろう。その意味では、有賀の指摘は問題はない。有賀にとっては、家が残る限り家の結びつき方での共同体が残存する、ということに力点が置かれているといえる。

【スケラレグチと近隣について】

ここで再度、近隣がスケラレグチと関連させて論じられる。有賀は(中村: 148-149)の叙述をひく。「近隣がスケラレグチを成立せしめる唯一の契機ではない」という説の近隣はいわゆる向三軒両隣の近隣である。しかし「分散の範囲は一時期において略限定されている」と称するのは結局近接丁場に限られていることを意味している。これは Cooley の neighborhood として見るべきものであり、要するに②のマキの成立基盤を地域的に見ると neighborhood であることになる。このことは農業企業における地主大手作の限度によって来ることである。すべてのマキを neighborhood というべきでない」(有賀: 51)。

スケラレグチ(およびマキ)の成立契機を近隣 neighborhood にみるべきともいっており、しかしそれは地主の限度にもかかわるからすべてのマキを近隣 neighborhood でみてもいけないともいっている。近隣を重視しつつも、そのみで説明することは慎重になるべきとの指摘であろう。

【族団概念への批判】

さらに有賀は、「もう一つ族団的協業とか小族団的協業という定義に表れた族団という定義は明かな概念を示し得ない 族は同族親族血族等の族を混同したものとして示されるからである。はっきりした概念規定をするべきであろう」(有賀: 51)との批判を述べる。族概念は中村編(1965)でみるように中村共同体論のキー概念であるが、このモノグラフのみでは確かに説明が不十分であるといえよう。

【雇＝名子関係(身分関係)の後退とはいえない】

有賀は、以前も述べたように、雇が共同体を崩壊して名子関係を後退させるという考えを批判す

る。「雇は商品経済の影響をうけているといわれているが実質的には名子や主なる出入人がその労力の大部分を出し他はそれ以外のもので補っていると見る事が出来る。これによって共同体(マケの意)が崩れたことにならないのは前述の通りだ。共同体の内部関係がちがう点でちがってくるが、雇に変化したから名子関係(身分関係)が後退したといわれない」(有賀: 51-52)。

有賀は続ける。「こういう所論に見られるように賃労働が生じて、現実には人身的身分関係の変化をもたらさない面もあることをのべているが、これらは矛盾だと思う。……主従関係即ち身分関係は夫役が賃労働になっただけでなくなのではない。……労働への支払が直接にあるかないかということだけで主従的身分関係があるかないかという規準にはならない」(有賀: 52-53)。「直接人身的身分関係が後退したといっても身分関係の内容もわからないし、又それがなくなって来たような印象が強いが、賃労働の関係でも特定の人に深く従属すると主従的身分が強く残るのであって、賃労働が発生するとそれがなくなるかの如く考へるのはあやまりである」(有賀: 53)。

前述したことの繰り返しであるが、有賀は、賃労働、商品経済の侵入により、共同体が解体されるという安易なテーゼの適用・分析に慎重であることがよくわかる。また、中村たち自身も、有賀が論じる箇所の叙述は、慎重に分析と叙述を進めていることが分かる。ただし、力点もしくはベクトルとしては、有賀と中村たちに違いはある。

4 読書ノートからの考察・含意

以上見てきたように、多くの細かい点で有賀の批判があるが、いくつかは些末な批判であろうし、またいくつかの誤解も見受けられる。それは、いくつかの概念について、有賀・中村双方でずれているからであろう。たとえば、「村落」「部落」を、文脈によっては有賀が同一視しているのに対し、中村たちは異なるもの、部落を行政的区画に限定して使っているということや、「拡散」という用語についてなどである。また、中村たちのキー概念の定義がこのモノグラフでは整理されていないことも誤解の要因になっていると思われる。もちろんそこには、竹内利美が指摘するような姿勢、すなわち「現状の断面で主として事象をとらえ、ともすれば歴史的位相においての考察をなおざりにして、概念構成を急ぎやすい行き方や、あるいは断片的偶然的な記録史料のみをもとにして、既成概念にたよりつつ、その解釈を急ぐようなやり方」(竹内 1957: 107)を戒めようとする姿勢も存していよう。

有賀が力点を置いているのは、賃労働・商品経済の進展による共同体の解体というテーゼの安易な適用して分析することの批判、政治的な状況・政治構造の重視、関係性における「相互認知」といった点である。雇や地代の金銭支払いという現象も、その形態(さらには地代の形態)だけで主従的な身分関係(名子関係、親分子分関係)が解消されたかどうかは判断できず、そこでの地主・名子間の関係性を規定する政治的・経済的条件を考慮すること、およびそこでの「相互認知」という主観的側面の重視をしているのが有賀の特徴といえる。政治的な要因の重視、主観的側面の重視といったところに、中村とは異なり経済史家ではない社会学者有賀の特徴があるといえよう。それゆえに、家というものが近代以降の現代においても完全に解体しえないとの判断になっている。

なお、「部落」や「地域」をクレーリーの近隣関係で理解しようという有賀の意図の深意は、つかみかねている。今後さらに検討したい。

注

- 1) 本報告は、東北地区研究会では「煙山調査に対する有賀喜左衛門の反応: 有賀の読書メモから」というタイトルで報告され、その後改良された内容が、日本村落研究学会第 66 回大会 (2018 年 10 月 27 日、於; 宮崎県高千穂町役場) にて標記のタイトルで報告された。なお、本研究は、JSPS 科研費 JP18K01987 および岩手県立大学全学競争研究費の助成を受けたものである。

文献

- 有賀喜左衛門, 1956=1971, 「村落共同体と家」『有賀喜左衛門著作集 X 同族と村落』未来社.
- 竹内利美, 1957, 「書評 中村吉治編著 村落構造の史的分析 岩手県煙山村」『社会学評論』7 (3): 104-107.
- 中村吉治, 1956, 『村落構造の史的分析』日本評論新社.
- 中村吉治編, 1965, 『社会史 I』山川出版社.

第3章 玉城哲を読み直す

泉 桂子

1. 玉城哲に興味を抱いた背景

本稿で農業経済学者・玉城哲を取り上げるのは、農村社会をより深く理解するには水利用の視点が重要であることを彼が分かりやすく説いているからである。筆者がこの考えに至ったのは、筆者が職業上、現代の若者に農村社会やその成り立ちを教えているためである。筆者の出自は農学分野の林学であるが、現在まで2つ地方公立大学の文系学部で、農山村地域の活性化やその地域資源に関する講義を担当してきた。現在の勤務先は東北の農村部に位置しており、学生のほとんどは県内出身者であり、祖父母や親類は農業に携わっている、あるいはかつて携わっていたものが多い。それでも彼ら・彼女らに農山村あるいは農林業の具体的なイメージを持ってもらうこと、あるいは伝えることは現代では簡単ではなくなっている。彼ら・彼女らの多くは農作業の経験が少なく（あるいはなく）、その一方で幸せなことに旬の農産物を空気のように享受してきた経験を持っている。農産物には水資源が不可欠なこと、その利用は個々の農家ごとではなく村単位で規制されていることを例示すれば、学生達にも農山村社会の具体像を想像してもらえかもしれないと考えたからである^{*1}。

農山村における共同体のありようは、その歴史に深く根ざしている。農家が個別に独立した存在でなく、地域社会で相互依存、相互扶助、あるいは相互監視しあってきた（いる）のは、林野や水などの総有資源を村単位で利用してきたことにその一因があるだろう。総有資源の中でももっとも分割が難しく、かつ個々の農家の独立性を大きく制限するものが農業用水である。水は高きから低きへ流れ、水利用では上流側が優位に立つ。このような例を挙げれば初学者にも田んぼ同士が相互に影響を及ぼしあっていることは想像がつく。玉城哲の著作は現代の農山村社会を見る上でも多くの示唆を与えてくれる。

玉城の著作の現代的意義を評価した記述はこれまでも見られる。たとえば、農業土木の教科書である『水利環境工学』（丸山・中村，1998）は、その冒頭に古島敏雄と玉城を並べて引用^{*2}している。玉城について、「玉城哲は『日本は水社会』であると評している。筆者の理解では、水田での水利用は、畑作のように個々の農民の自由な水利用は許されず、相互に強く結びついており、これが相手を強く意識し、自分を表に出さないという日本国民の基本的な性格を形成したのでは」ないかと玉城の見解を紹介している。これは農業土木の専門家育成にあたっても、玉城の「水は農山村社会の基層」という考

*1なお、講義を効率的に進めるため教科書を執筆した（泉，2018）。

*2著者の一人、農業土木の専門家である中村良太は玉城と面識があった（玉城・旗手，1974：166）。

えが、一定の重要性を持つことの証拠である。

2. 玉城哲の略歴

以下、玉城哲の略歴を紹介する。本稿での記述は特に指定のない限り関矢（1983）^{*3}により、ページのみを示す。

玉城は、1928 年、経済学者・玉城肇の三男として東京に生まれた。玉城肇は「経済史、家族制度史を研究」（6）した研究者であり、東北大卒、東北学院大学教授・愛知大学学長を歴任した。肇は「宇野弘蔵さんの東北時代のゼミ生」（森下，1983：9）であったことから、同じく宇野弘蔵と交流のあった中村吉治のことは玉城も知っていたものと推察される。

玉城の生い立ちは父やきょうだいの影響のもとにあったようだ。玉城の少年期は「マルクス・ボーイ時代」（三輪，1983:2）と評され、マルクス主義の影響を受けたようだ。1941（昭和 16）年、府立 13 中（豊多摩高校、浜田山）に入学し、何人かの「文学少年だった」友人とグループを作っていた（5）。戦時中は「蔵王のふもとで開墾」（関矢，1983：6）に従事した経験があり、後述する東北農民への彼の印象もこの時に一部形成されたようである。1946（昭和 21）年頃、玉城は「新興宗教に熱中」し田食も会った。そのころ「長兄の徹氏は新鋭の歌人、詩人として注目されはじめ」、「歌人としての地位を固めつつあり、次兄素氏は（中略）東北地区で共産黨員として活動」（6）していたことから、玉城自身進路を模索していたことがうかがえる。

玉城の大学での専攻は農学部であった。大学入学後「理科、それも農業をやりたいという」志望を持ち、「24 年東京農大に入学し、28 年に卒業」した。「在学中はすでに結婚」しており、玉城は「学生運動に傾斜」（6-7）してもいたという

卒業後の研究者としての歩みは 2 つの研究所勤務の後、大学に勤務するという形であった。「さる教授が創立間もない『水利科学研究所』に玉城を推せんし、研究者となることができ」た。1957（昭和 32）年のことである。水利科学研究所は 1957 年*「当時の農水省、建設省、通商産業省 3 省共管のもとに設立され」（大貫，2008）た機関で、『水利科学』誌を発行で知られる。玉城は「サイドワークをしながら、基礎理論固めの勉強を昭和 30 年代は続いていた」（7-8）という。しかし、程なく退職した。

玉城は同所退職以来定職を持たずに、1965（昭和 40）年に財団法人農村金融研究会嘱託研究員となった。（財）農村金融研究会は「農林中央金庫の外郭団体で終戦直後に創立」され、「農林中金及び農林省からの委託調査研究を実施」（高橋，1983：3）した機関^{*5}であった。1968（昭和 43）年、専修大

^{*3}関谷や森下の論考が掲載された『専修大学社会科学研究所月報』1983 年 12 月 20 日号は「故玉城哲所員追悼号―追悼研究集会から―」と題され、編集されている。

^{*5}同研究会は 2017 年 9 月に解散、農林中金総合研究所が「同会の調査研

学経済学部助教授、1974（昭和 49）年専修大学教授に昇進するも、1983（昭和 58）年東京文京区山の上ホテルにて執筆中、死去した。享年 54 歳であった。

3. 中村（1956）にみる農業用水利用－有力農民による共同体支配の一端－

本研究会は「あらためて中村吉治を読む－煙山調査を中心に－」とされていることから、中村の著作で農山村の水利用に関する記述を振り返っておく。中村は『村落構造の史的研究』（1956、以下数字は、同書の頁を著す）において、産業化の進展（商品経済の発達）は共同体の解体を進める方向に働くことを実証した（詳細については長谷部報告）。中村が共同体の解体過程を見る切り口は多様で、農家経営（家族関係、労働組織、スケ、役畜など）、農業水利、林野利用、商品経済などにわたっている。上記の切り口の中で商品経済が江戸後期以降、煙山村に浸透してもなお共同体の性格がもっとも色濃く残ったのが農業水利であると報告者は読み取った。中村らの研究グループは松ノ木集落のすべての田を歩き、その水懸かりを記した詳細な水利地図を作成してもいる。このことは中村らが水利は共同体において最も重要な資源の一つだと認識していたことの証左であろう。

煙山村松ノ木が重要な農業水源とした岩崎川は、地形上流量が不安定であった。岩崎川は小河川で流路が短く、同じ水源から複数の小河川が発しているために降雨量が多ければ洪水、降雨量が少なれば渇水となる河川であった。松ノ木は水稻単作地帯に位置し、洪水を治めつつ「苦心してまで水田を造成しなければならなかった」村であり、「水不足の厳しさが推察」（342）されるという。

このような環境で営農を続けるには有力農民に従属するのが近道であった。たとえば煙山村松ノ木組の有力者・重助家（以下、中村の著作に倣って「②」と呼称する）を中心にしてみると、②は「用水高」（農地が必要とする農業用水量、すなわち水稻単作地帯では田面積）が高いことに加え、用水分配権限および用水使用違反者への処分権限を持っていた。②をはじめとする有力農民は、用水使用を通じて地域社会を支配していた。すなわち「石高が多く水懸かりの多い家が用水上の共同体の重要な機能を行使」（292）することができた。

さらに煙山村松ノ木で特徴的だったのは農業用水が河川・井堰からだけではなく、湧水や溜池をフル活用して調達されたことである。まず、湧水については、たとえば、②の敷地内には高清水湧水があり（334）、「高清水の湧き口は②の私有の清水とされ」、「灌漑地域内にある田は、農地改革まで、すべて②の所有地であり、そこでの耕作者は②の小作」（334）であった。湧水は井堰（本村では鹿妻穴堰）の通水開始に先んじて水温の安定した水を使用することができた。水温が安定していることは即ち、春先は河川水に比し

究事業と人材を継承」している（農林中金総合研究所 web ページ）。

て水温が高いということである。これは育苗において大きな優位性を持った（338）。つまり、零細農民にとってみれば、②のネットワークに入ることによって育苗へのアクセスが改善されることになった。零細農は進んで②との関係を築き、湧水使用の権利を得られれば、安定的な水稲耕作の条件が整ったのである。

加えて、溜池の存在がある。煙山村松ノ木集落周辺における溜池は「自作農層以上」によって所有され、「その灌漑用水を媒介として、より一層独占排他的、ないしは停滞的な水利組織が形成され」ていた。溜池を介して「地主と利用者間の共同体的な水利組織の間に結ばれる諸関係は、自ずから身分的な性格」を持った（343）。加えて溜池は河川・井堰に対する補助水源として大きな役割を持ち、湧水同様に「②の小作人であることが溜池の水を利用するための必須要件」であった。

中村によれば、②は農業水利を通じて自らの農家経営を有利に進め、組内・村内を支配し、存在感を示すことができたという。湧水は「②の小作人に対する地主としての権威を支える力」ともなったし、溜池も支配の一手段であったことは同様であった。以上中村ら（1956）の研究の意義は、特定の集落の水利を実証的に明らかにしたことにある。

4.玉城と東北農山村との接点ー水利と共同体に着目してー

4.1.農業水利システムの多様性

玉城は小流域単位、あるいは村単位での農業水利を実証し、多様な事例のバリエーションの中から農村社会の規範・ルールを抽出しようと試みていた。しかし、今回取り上げた文献の中で、玉城は中村らのような農業水利の田一枚一枚の分析・実証は行っていなかった。玉城は農業水利研究の魅力を次のように述べている。農業用水は「面白いのである。その面白いゆえん（中略）どうやらどこに行っても同じケースにぶつからないという点にある（中略）農業水利システムに同じものは絶対にはないのである」（玉城、1979：iii）。玉城の取り上げた事例を逐一ここで取り上げることは控えるが、たとえば、ある溜池では田頭会と呼ばれる溜池の水利用者による意思決定機関があった。「田頭会は溜池の堤上でひらかれ、池の水をみながら協議するという慣行をもっている。この地域では、いま崩れつつあるが、部落が任命した『水入れ』が水路から個々の水田への水引きを専門に担当し、農民の勝手な引水を許さないというきびしい秩序がたもたれてきた」（玉城、1979：24）という記述はその一例である。

加えて、上記 3.の内容から農村における水利の複雑さ、自然環境への依存の大きさは推察されよう。一集落の農業用水の田毎の配水を明らかにし、加えて補助的水源の解明を行った中村らの仕事は玉城もなしえなかった緻密で学問的に大きな意義を持つ調査であった。

4.2.玉城による中村の引用

玉城が中村を引用している箇所の一部を以下に示す。農村社会をどのよう

に見るか、という文脈で中村の『日本の村落共同体』が引用されている。

人間相互のとり結ぶ関係、社会関係の中に、色濃く「自然生的」性格が維持され、再生産されたのである。「自然生的」性格ということとを別の言葉で具体的に表現すれば、共同体的社会関係といってもよい。この関係は、もちろん自然との直接的かかわりを持つ農村社会において典型的にみられた傾向であり（中略）部落は閉鎖的、排他的な一種の”小宇宙”であり、かつ「家」の財産の所有の程度によって編成された一種の「家連合」的身分社会であった（玉城・旗手，1974：43）

続いて玉城は「共同体的枠組みの根強い存続を支えた直接の原因は、農業生産そのものにおける個々の農民の自立性の弱さ」であり、その本質は「水利－灌漑と排水－における共同関係」（同：43）だと述べている。玉城も中村と同様に、現代の農山村社会を性格づける重要な要素が水利であると述べており、中村（1956）における農業水利の記述との共通項がうかがえる^{*6}。

4.3.扇状地型用水としての鹿妻穴堰

中村が取り上げた煙山村において、人工的な農業用水路として大きな役割を果たすのが鹿妻穴堰である^{*7}。鹿妻穴堰のそのもの開通は1599年だが、煙山村に直接的な関係を持つ上堰の開通は寛延2（1749）年（中村，1956：391-392）であり、この開通により「水不足は暫時緩和され」た（同：393）が煙山村における水不足の抜本的な解消にはならなかったという。

さて、玉城によれば戦国末期は農業用水の大建設時代であった。このこと「治水技術と結びついて、水利開発もまた新しい発展をむかえ」、「扇状地的地形における農業用水の建設が活発にすすめられた」（玉城・旗手，1974：195）という。さらに玉城によれば日本の農業用水利用の特徴のひとつは自然地形を利用していることにあるという。日本では「豊富な流量の河川が数多く存在し、しかも平野部の多くも地形勾配の豊かな扇状地」であり、「農業用水施設を作り、灌漑を広げてゆく方法としては、重力灌漑方式（中略）がもっとも効果的であり、適切な形態」（同：172）と玉城は述べ、これを「扇状地型用水」（同：221）と名付けた。鹿妻穴堰も戦国末期にこのような地形を利用し、自然勾配を活かして開かれた農業用水路である。玉城の歴史的な整理は、中村らがフィールドとした煙山村の水利にも当てはまる。

4.4.村の自治への評価－大規模中央集権よりも小規模分散－

玉城は大規模ダムに依存した水資源開発と農業用水確保に警鐘を鳴らし、

*6別の箇所では中村の『日本経済史（上）』が引用されている（玉城・旗手，1974：247）。

*7鹿妻穴堰について詳しくは泉・古井戸（2007）、また鹿妻穴堰の通史は鹿妻穴堰土地改良区（1971）。後者の主な著者は森嘉兵衛。

村（部落）による農業用水管理や自治を高く評価している。玉城は水資源の稀少性や有限性を前提とし、村の単位による用水管理こそが資源利用を効率化し、農業用水の節水にもつながるとその必要を説いた。当時は水需要の伸びがまだ予測された時代であった。このような時代背景にあって、玉城が資源の有効活用や集落単位の水資源管理重視の視点を持っていたことは先進的ともいえよう。

玉城はダムによる水資源開発について、水の開発・配分・利用の物的システムが広域化し、巨大化していくことについて疑問を呈した。農業用水に関する「問題の核心は、少数のテクノクラート支配と、多数の利用者の無関心という事態」と述べている（玉城，1979：129）。玉城は「水についても、住民の参加による分権的管理の道を探し求める」（同：130）必要性を指摘している。玉城はまた浪費的構造を改めずに新規水資源開発することの矛盾も指摘している。今日的な言葉で言えば「もったいない」にも通じるであろう。

また村（部落）がこれまで担ってきた水路の共同管理を高く評価している。玉城（1979：261）は「ストックの経済」を評価しており、維持管理は「伝統的な資本ストック形成」であり、「実質的に資本ストックの補強」、「無償の労働を蓄積して資本ストックに変えてゆく役割をはたしている」（同：260）としている。

今日、玉城の上記の指摘を振り返ってみると、一面では農業用水は地域社会での調整関係が希薄になり、水の配分が広域化・巨大化している傾向がある。たとえば長濱（2003：70-75）は水稻耕作地帯における土日渇水やゴールデンウィーク渇水の存在を指摘し、加えて農家からの水田の水量不足のクレームは地域の水利組織の地域担当役員よりも土地改良区そのものに届けられる頻度が高くなっているとしている。長濱の指摘は水利の問題を村単位で調整するよりむしろ問題解決を広域化している傾向を表している。

その一方で、村単位・集落単位の水資源有効活用や共同管理の動きも見られる。その一つは農業用水における小水力発電事業であり、もう一つは2007年度に始まった多面的機能支払政策（農林水産省 web ページ）である。前者は地域におけるエネルギー供給の取り組みであり、後者は農業水利施設を含む施設の長寿命化の取り組みが一部で行われている。玉城の指摘した水路の共同管理は現在の農村でも行われ、かつその取り組みは地域に正の影響をもたらしたり、政策的な裏付けを与えられたりもしている。

4.5.東北地方に対する玉城のイメージ

玉城は前述のとおり、青年期に東北に疎開経験を持ち、その経験からか東北の農民についてやや批判的なコメントを寄せている。たとえば「第二次大戦の末期から戦後にかけての一時期、東北地方のある農村にくらした私の記憶のどこかに、東北農民についてのやや消極的なイメージがのこっている（中略）朴訥の半面、権威に対する卑屈さ、陰性な狡猾さ、めめしさなどを、そ

れがどうしてもない苦しい歴史の所産であることはわかっている、つい批判的な眼でみてしまう」（玉城、1977：68-69）と述べている。また、「私は農民の歴史の苛酷さ、とくに冷害と飢餓、圧政と貧困に苦しんできた東北の農民の歴史の事実を否定するつもりはない（中略）だが、過去の暗い記憶とむすびついた被害者意識の密室にとどまるかぎり、農民は自らの力で卑屈さやめめしさをのりこえることはできないであろう」（同：69-70）^{*8}とも述べている。

国内外の農村を歩き、多くの農民と膝を突き合わせ、話を引き出してきた玉城が当時このように述べていることは、東北農民・農村に彼が上記のような印象を確かに持っていたことを表しているだろう。

4.6.村（部落）の持つ二律背反

再び筆者の日常に戻りたい。筆者の周辺の学生の多くは自分の出身地に愛着を持っており、卒業後もできれば県内や出身地で働きたいと希望する者が多い。もちろん東京を含む関東圏への就職を希望する者もいるが、どちらかといえば少数派である。そのような傾向をもつ彼ら・彼女らですら、「地元に戻ると一挙手一投足を近所の人に監視されている気がする」と述べたり、その一方で女きょうだいの長女・あるいは家族の長男であれば「いずれ家を継がなければいけない」と進路選択に当たって常に留意したりしている。家と地域社会から寄せられる自分への要請と、自分の自己実現をどのように両立させられるかのはざまにある者が少なからずいる。「もっと自分のやりたいことに正直になったら、自由に生きたら」と筆者は口にしたくなるときがあるがよそ者の無責任な言動であるかもしれない。

その一方で、一部の県内農山村は急速な人口減少に直面しており、地域の存続が危ぶまれる例も存在する。地域が若者やよそ者にとって居心地のよい場所とならなければ農山村のさらなる衰退は必至だろう。

玉城は次のように述べている。「農村の青年や少年たちは、農村に止まるか都会に出て労働者となるかという主体的な選択」（玉城・旗手、1974：300）を行うことができる。青年や少年（現代なら若い女性も含まれるだろう）がそのような選択を検討するのはなぜか。一つの理由は「部落が二重の性格をもっていた（中略）部落は農民の生活になくてはならない相互扶助の組織であると同時に、厳しい相互牽制の組織でもあった」（同：300）ことだと玉城は述べている。「部落が表面的には素朴な暖かい共同社会の様相をもちながら、このようなエゴイズムを底に隠していた」（同：301）と分析している。

^{*8}玉城はその一方で赤川土地改良区（山形県）における自主的な流域管理（古河財閥による鉾山開発に一定の歯止めをかけ、農業用水の水源保全と治水のために流域上流に水源かん養林を取得）を評価してもいる（玉城、1979：238-239）。なお、鹿妻穴堰土地改良区の水源地取得も同書で言及している。

筆者は上記の指摘に大きく首肯する。佐無田（2014）が指摘しているように、衰退局面を跳ね返そうとしている農山村は、相互扶助の可能性をよそ者にも開き、新しい挑戦を白眼視せず、逆にそれを応援する場所になり得た事例が多いからである。農山村ではよそ者自身にも変化が求められるが、農山村の側も変革の必要があるだろう。

玉城も村が昔に戻ることは求めているし、若者を村に縛り付けることも求めているなかった。また玉城は「イエ」だけでなく個人も尊重される社会を目指すべきであろうとの立場を取っていた。

これまで玉城が指摘してきた、農山村の多様性、歴史的遺産、地域資源管理や自治と文献という強みを現代の農山村が継承し、相互牽制・エゴイズム・卑屈さ・狡猾さ・めめしさを乗り越えていくことは、依然課題でもある。

5.まとめに代えて

本報告では一般向けの書籍を対象に、農業水利という視点から玉城哲が農村社会をどのようにとらえていたかを紹介した。玉城の論考の中には中村吉治の影響が一部にみられ、また部分的ではあるものの、東北の農業水利団体や農民の気質が玉城の関心の対象にもなっていた。現代の農山村活性化におけるいくつかの論点も玉城によってそのヒントが述べられていた。

〈引用文献〉

- 泉 桂子（2018）入門・地域資源管理－水利と森林資源利用から展望する持続可能なくらし－2018 年度版－，森林計画学会出版局
- 泉 桂子・古井戸宏通（2007）鹿妻穴堰土地改良区における水源林の経営展開：戦後期を対象として，森林計画学会誌，41(1)：85-100.
- 鹿妻穴堰土地改良区（1971）鹿妻穴堰開発史，1631 頁.
- 丸山利輔・中村良太ら（1998）水利環境工学，朝倉書店，168 頁.
- 三輪芳郎（1983）玉城哲所員を悼む－開会の辞－，専修大学社会科学研究所月報，245：1-2
- 森下紀夫（1983）編集者としてのつきあい，専修大学社会科学研究所月報，245：9-12
- 長濱健一郎（2003）地域資源管理の主体形成－「集落」新生への条件を探る－（現代農業の深層を探る 2），日本経済評論社，214 頁
- 中村吉治（1956）村落構造の史的分析，日本評論新社，908 頁.
- 大貫仁人（2008）「（財）水利科学研究所」創立 50 周年記念特集号の発刊に当たって，水利科学，52(5)：1-2.
- 佐無田 光（2014）現代日本における農村の危機と再生－求められる地域連携アプローチ－，『自立と連携の農村再生論』（寺西俊一ら編著）東大出版：7-44.
- 関矢礼二（1983）玉城哲の思い出－昭和 20，30 年代を中心に－，専修大学

社会科学研究所月報, 245 : 5-8

高橋七五三 (1983) 玉城君を偲ぶ. 専修大学社会科学研究所月報, 245 : 3-4

玉城 哲・旗手 勲 (1974) 風土―大地と人間の歴史―. 平凡社選書 30, 332 頁.

玉城 哲 (1977) 稲作文化と日本人. 現代評論社, 238 頁.

玉城 哲 (1979) 水の思想. 論創社, 264 頁.

農林中金「お知らせ 2017 年農村金融研究室設置のご案内」

<https://www.nochuri.co.jp/topics/153detail.html> (閲覧日 2019 年 4 月 28 日)

農林水産省「平成 29 年度 食料・農業・農村白書 (平成 30 年 5 月 22 日公表) 第 1 部 食料・農業・農村の動向 第 3 章 地域資源を活かした農村の振興・活性化 第 3 節 農業・農村の有する多面的機能の維持・発揮」

http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h29/h29_h/trend/part1/chap4/c4_3_00.html (閲覧日 2019 年 4 月 28 日)

中村吉治「村落構造の史的分析」批評集

▼批評文

付録 中村吉治「村落構造の史的分析」批評集

有賀喜左衛門著（三須田善暢翻刻）

- 凡例 ■ …… 不明箇所
—— …… 抹消箇所
== …… 抹消の中の抹消箇所
[] …… 三須田による補い

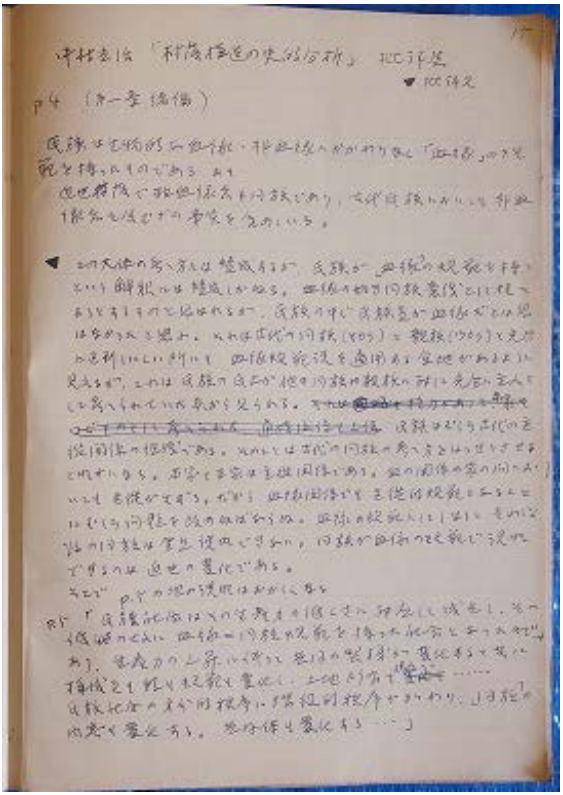


写真
ノートの冒頭部分

p4（第一章 緒論）

氏族は生物的な血縁・非血縁にかかわらず「血縁」の規範を持ったものである 云々

近世村落で非血縁者も同族であり、古代氏族においても非血縁者を含む等の事実を含めている。

▼この大体の考へ方は賛成するが、氏族が「血縁」の規範を持つという解釈には賛成しかねる。血縁の如き同族意識として捉へようとするものと思はれるが、氏族の中で氏族員が血縁だとは思はなかったと思ふ。それは古代の同族（ヤカラ）と親族（ウカラ）と充分に区別しにくい所にも血縁規範説を適用する余地があるように思えるが、これは氏族の氏上が他の同族の親族に対して充分に主人として考へられていた点から見られる。それは通婚も権力があって、本家をつぐものとして考へられた。通婚関係も上位氏族はむしろ古代の主従関係の組織である。そのことは古代の同族の考へ方をはっきりさせると明かになる。本家と主家は主従関係である。血の関係の家の間においても主従が生ずる。だから血縁関係でも主従的規範となることにむしろ問題を改めねばならぬ。血縁の規範にしてしまうとそれ以外の同族は全然説明できない。同族が血縁の規範で説明できるのは近世の変化である。

そこで、p.5 の次の説明はおかしくなる

p.5「氏族社会はその生産力の低さに対応して成立し、その低さの故に血縁＝同族規範を持った社会となったのであり、生産力の上昇に伴って協働の契機が変化すると共に構成員も数も規範も変化し、土地所有も 変化し進んで……氏族社会の身分的秩序に階級的秩序が加わり、「同族」の内容も変化する。共同体も変化する…」

④ 共同体の諸契機が分化するということを同じ集落の家々が同じに共同するのでなく、集落を超えて個人に共同を持ついるく場合が集落の家の間に出て来ることを云うのであるが、この結果同族の意味が血縁に近くなり、又は血縁に局限されたりするものと説明しているのである (p.6)

共同体の契機とはいろいろあるが、今迄の考へ方は集落生活を中心として共同体をつかむことを主としたので、灌漑用の水とか山とかをその重要な契機とした。これらは共同関係として成立する契機となるからである。しかし共同体といっても共同の主体が何かを考へる必要がある。もし日本のように家が共同の単位と見るべき場合に、家々の集まったものが共同の主体となるだろうが、家々の相互関係はいろいろあるから、家々が全体として一つの結合をすると許りが共同体とはならない。個人の家が二軒又はそれ以上でいろいろの結合をすることも何等かの意味では共同体である。今迄の所では原始的な或は封建的な共同体を Gleichheit の原則により結合するものと見ているようであるが、そういうもの許りを共同体と考へると非常に限定されてしまう。そういうものは日本にはないのだから日本の共同体をそういうものとする事は出来ない。

▼これによると血縁＝同族規範が身分的秩序であり、土地所有の変化による階層の成立が階級的秩序であるということになる。それに伴って同族は変化するというがどう変化したのであるか。彼によると「近世という時代は共同体が分解する過程だがまだ分解してしまはずに共同体の諸景気が分化しながら崩れて行く段階だ」というのである。p.5) ④

~~これはどうもうけとれない考へ方である。共同体の諸契機が分化するというのは、その前■段階として考へられる部落内で諸契機が結び合っているものに対してのことであるが、又現代を共同体の分解してしまつた状態として見て、その過程と見たのであろうが、日本における村落共同体とは何かきまらないから、こう云つてしまつては困る。古代的な村落共同体はもちろん崩壊して来たが、古代的な村落共同体を何と見るか。中村式に云ふなら氏族・血縁＝同族規範ということになる。~~

~~中世は何であるか、近世は共同体の諸契機が村落を超えて結ばれ、次第に分化すると見たのである。血縁規範がくずれるとすればいかにくずれたかの説明がわからない充分でない。ただ同一地域(集落)の家が簡単に結合していない(結合のし方に複雑性が生じた)~~

こういう考へ方のことはさしおいて、中村の共同体について行くとすると、共同体の契機として考へられるものは共同体関係を成立せしめる生活上の要求となるが、上にふれたように共同生活は家々のいろいろの組合せだから、全体として一つにならないでも共同体としなくてはならぬ。こういう状態は中村式に云ふと近世の村に見られるような形態になる。しかし中世になるとどうであらうか、古代からどんなちがいが見られるか、どうもよく解いてない。が

原始時代に各戸の間に平等関係が支配したのは生産力が低くて能力の差異が大きく出て来ないからである。その場合にその政

⑧下部の社会組織——即ち村落では一つの豪族がある村に居住して、附近の村を支配する。豪族居住の村落では同族が明白に組織される。他の村にもそれより小さい同族があるだろう。そういう小同族がいくつか共存して他村の豪族に支配される形もあるだろうし、同族の外に同族にもならぬ住民がいて他村の豪族に支配される形もあったろう。古い意味の同族は大きくても小さくても家連合であった。それと併存する同族以外の家連合もあったとしても、村というものは何等かそういうものが集落の生活をしていたと見たい。

しかし同族が存立するのはその中の本家（有力家）と共同関係を持つことに根拠がある。それを守ることによって自分を守る利害共同集団の性質を持っていた。そういう家連合はもちろん生活領域とはなれ得ないので、ある範囲の地域にひろがった。これは同族を結ぶ範囲である。同族の本家が有力であり、同族が大きければその領域はひろがった。そして一集落を超えることは可能であった。同族以外の家連合の場合でも小さな家連合は集落の内部に（或は一部に）限定されたとしても、これはそれに応じた生活領域を根本的に必要とした。したがって家連合が大きくなればその地域はひろがった。中村が村落共同体の地域性を論ずる場合に、近世はその諸契機が分化するとして、地域性に制約されなくなったことを説くが、それは村一集落の地域に局限されずにのびた場合をさすのである。しかし家連合には基本的に地域が伴うので山や水のあるものゝ如く、大きな場合になれば集落の外に伸びるというにすぎない。これは家の生活基盤がひろがるということであって、家がいくつかの共同関係（家連合）を持つことが変わったわけでない。共同関係の対象となるものが山や水利のように大きなものになると江戸時代のように小高の本百姓が多くなった場合にはそれを多のために多くの農家が関係を持つことになる。又山や水に対する権利のあり方と近世のように或る性質の村が上から認められて来たことゝ深い関係がある。中世なら地方知行として知行主の権利として支配が行はれるし、その使用や運営が知行主の権利として認められるが、近世の場合は■村役人を通して支配が行は——㉔

治構造に比較的平等組織が支配的だというのは一応推定出来る。それでも能力上の差異はあるから完全な平等はあり得ない。氏族制度の時代に豪族が成立して来たから明かに階級的になる。そして有力者がその以前に平等に利用していた土地を豪族が支配する。これも明かである。そして比較的大きな政治社会が成立する。これは下部社会の性質と伴う結びつくので村集落の中でもこの性格は表れる。そこでは同族もあり、そうでないものもある。⑧⁽¹⁾

~~それ以外はもっと大きな政治社会が生じて来て■替している。これが奈良時代以後武家社会までの変化である。この下部組織としての村落がそれに影響されないはずはないが、集落の中では家の結合の組合せがいろいろある。から影響はことなるのである。そういう政治組織の下部で家々がいろいろ組合せをする。近世から逆に見て行くと、近世の郷村制の中で山の組合水の組合がある。これを村落共同体とかりにする。しかしこれは幕藩の支配の中でのことである。そして、組合の運営に有力家があることもあり、比較的平等のこともあるが、これは多数の家の組合として運営される。水利がひろく各村落にまたがると一層そうである。中には一地主の権利におかれるものもある。これは蔵米知行を■機とするからこれを支配する形が村役人を媒介とする。村の側では多数の家がこれを組織しないと維持が出来ない。水利とか山野とかいう大きな利害を持つものは多勢の組合になることは当然である。しかしもっと小さい利害の場合には三軒でも三軒でもよいということは沢山ある。しかし共同関係を持たないと生活が出来ないのでいろいろの共同関係を結ぶのである。自結婚にしてもその家と共同関係を持つ手形になるのは同じ理由からである。親類がふえて来ると結婚が媒介した共同関係が大きくなることもある。生活関係はどんなものでも地縁的な関係が比較的強いのは日常生活の関係を結ぶのには近い距離にあることが必要だからだ。遠くなれば遠くなって■ちがう関係を結ぶわけであるが切れ易い条件も出て来る。~~

中世にのぼると地方知行であるから山野や水は知行主の直接の

(1) このページのはじめからここまでは、一旦線で消されたあと、「イキ」と書かれている。

経営となる。下級の知行主が支配する場合は村と密接に関係する。下級知行主の経営に参加する農民——農奴といほうと、子方百姓といほうと同じである——は村落を構成している。これも知行主に使役され乍ら彼等の生活関係を持つから共同体の組織がちがう。その中には知行主との関係、農民相互の関係という共同関係が重なっている。全体として一つに結合するものも、その中の小粒の家連合もあり得る。全体としての結合には知行主の支配と結びつくものであろう。水利は農民民自体が行うより知行主の事業となる。これは政治構造に支配規制される。

古代には氏族組が運営するから氏族組織がわからなければ駄目だ。こゝでも各戸の家がいろいろの共同関係を結めんだことを基礎として氏土支配の内部でどんな村落が成立していたかを知ることが大切である。

©れたので、村役人の階層分化が少くて有力になると村役人の権利として山野や水の支配が生じた。村役人の階層が多くて、比較的有力でない場合に村人の用益権がもっと強く認められる形態となった。後者においては本百姓の数が多いとか平等性が比較的強いという現象が生じた。水利については中世は知行主の権利であったものが近世には藩主や他の特殊な人が比較的大きな水利事業を起していくつかの村を灌漑することが多く生じてきたので、水利に有力な特殊な家が生じたとしても場合もあったとしても、多くの部落が参加する形も生じた。或はそういう有力家のみない個人の村の内部ではこの水利に対して平等性を持つ形が多かった。

中村は近世になると水の組がそのまゝ山の組になるには適しくなくなって分家化したと説く。(p.6) 家の方から見るとそのどの組にも入る必要があるが、組の方から見るといろいろのキノーから見て、重ならないと説くのである。この点は中々面白いが、家は独立していないで何かの共同体（共同関係）に属するから、共同体がなく

ならないで、共同体の拡散であるとみる。そして共同体的身分関係はうすくなり、同族の意味は血縁に近く縮小し、家の独立性が強化したという。

▼こゝで共同体身分というのは ~~本来の~~ 古い同族ということらしい。同族というなら同族的身分は考へられるが、共同体身分ということが考へられるだろうか。共同体は以上の用法から見ると家と家との共同関係である。このような共同関係を結ばねばならぬ理由はもちろん生活上の要求であるとしても、家と家との共同関係はいろいろある。その関係が身分的關係であるとはどういう理由で云い得るだろう。同族関係なら同族関係が親分子分、本家末家として古来成立したものだとすればそういう身分の意味がある。即ち主従的身分となる。しかし同族でない、平等な関係なら、身分の概念を含め ~~ることはできそうもない。~~ としても全然異なるものである。少なくとも二種の身分はあった。だから共同体身分がうすくなって血縁的身分 ~~が~~ になったとは云へない。古い同族的身分が次第に減少して平等関係の身分に移りつゝあったというのが正しい。そこでは決して血縁の中で同族がなくなったとも云ひ得ない[。]同族的身分は血縁にも非血縁にもあり、平等関係の身分も血縁にも非血縁にもあったと云うべきである。

そこで同じ集落における家連合の複合がうすめられたということは貨幣経済の発達にも伴った。こういうことは村落における共同関係をうすめるのは外の家や企業と関係を強めることから来た。村の内部の家との連合を少くするからであった。

P.8

「村落共同体を成立せしめていた諸契機が機能的に分化して来て、それだけ強さを失いつゝ消え去らずに外に拡大しつゝあることとやがてその過程を経て共同体の崩壊へ進む」

▼共同体の崩壊はこうにして行はれるか。家と家との共同関係の上に共同体が成立したと見て良いが、これが複合していることは部分的に部落外部に伸びることにより「拡散」しても、家の存立することにより簡単には崩壊しない。~~家は共同関係の「拡散」や消滅により、次第に孤立する方向に向うが、家族が家に充ててもらわなければならない必要がある限り~~部落外部に共同関係がひろがることにより共同体は消滅しない。それはその基盤に家連合があるからである。いくら外部にひろがっても家の存立の必要が解消しないからである。だから「拡散」ということによって共同体は崩壊しない。「拡散」という現象は貨幣経済の発達の上でも生ずる。今迄は族関係の上で消費が行はれる傾向が強かったのが消費は家々の個別的消費に移ったとすれば消費の共同体は消滅する。こうしていろいろの面で家の孤立化的現象は生じて来た。(例、金融等) それでも家が存立する限り、~~部落的~~共同関係が ~~消滅しない~~。全然消滅することは出来ない。それは家の必要は家が家族の生活保障を高く ■ 負わされる所に理由があるから、その限り ~~部落~~家連合の必要が消滅しないからである。

p.8 「部落がそのまゝ村落共同体だという見方に疑問を持ち……」「それに気をとられて部落の地域的意味を見失うことをいませめた……」

▼中村の考へ方に部落と村落の概念的区別がある。「部落を村落と同義に解する立場から云うと、この松木廿七戸は不分割の基本単位集団であるはず」P.6・7 といひ、27 戸は一単位の共同体として成立していないことを示している。つまり共同体は地域概念としての部落を超えるものであるから区別すべきで、部落の内外に及んでいるから全く別の概念だと考

p.11「それらの労働提供者つまり②を首長とする労働の上の共同体は地域的にまとまっているわけでもなく、とんでもない遠方からは来ないにしても、松の木の中だけではない」

へている。そこで中村の概念規定は行政区の ~~最小~~ 単位として部落をきめる。更に小単位の区画は小部落と云っても良いことになるから、煙山村の場合は丁場が小部落、松ノ木は部落で、村落共同体はこれらの部落の内部において、或は部落の境を超えて結ばれるものと規定するのである。但し中村は 小部落 という言葉は用いていない。

更に重要なのは部落が固定しても(即ち住居集団として家が固定しても)共同体としては変化が生ずるとしていることである。つまり松ノ木丁場で六戸の家が古くから存在しており、明治になってから七戸になって、そのまゝ現在に及んでいるが、(つまりそれ程動きがが少ないが) ~~家の~~ 共同体関係にはもっと大きな変化があることを述べている。共同体又は村落共同体関係を何と見るかを注目したい。

▼部落を地域的な行政区として限定してよいかどうか問題である。というのは共同体又は村落共同体には地域が限定されないかどうかという問題がついて来るからである。中村の調査の中で村落共同体は原始には部落の内に限定されるが、次第に分化することによって部落を超えると説かれている。それは煙山村の諸部落のように一種の散村において著しいと思はれるが、それでもこの共同体(共同関係といった方が良い)の範囲は無限でない許りか、比較的せまい範囲に局限されている。在来の近隣という地域概念も不明確な概念であるが、この共同体は少くも cooley の neighborhood の範囲である。このことは村落共同体はほゞ neighborhood に局限されることを示す。その理由は ~~地主の直営~~ このスケールの地主の直営においてはそれ以上の関係を持つ必要がないことである。ただ通婚や生産品の売却や肥料、商品の購入等の trade area がズット遠くにのびるのみである。地主以外の家の経営の場合には共同体は小さい場合が多く生ずる。(地主に附属する小農を中心として見れば地主に関係するから除外) 村落共同体も亦地域に限定される場合が生ずる。共同の諸契機が重なり合って一定の地域内に局限される場合の一つが部落と見て良いとすれば、部落のみが地域に局限されるとは云われぬ。部落を行政区として採用するかどうかは別の理由によるから、部落のきめ方

も決して簡単には行かない。

P.18「地域的に集団していることから、いろんな共同が生れるのでなく、いろんな共同が必要だから集団ができるのであって、それは素朴には同一地域に成立するだろうが、共同する契機の発達につれて地域の意味は小さくなるのだと解される。」「村という時だから共同体が問題になるのである」

▼この場合の地域とは ~~毎~~部落（行政区画）の如きものをさすのであるが、共同はいつでも地域（領域）を必要としている。共同が大きくなると新しい地域にひろがるということにすぎない。特定の地域からはずれる。共同と集団を因果的に見てもしかたがない。共同が集団であるからだ。集団とは共同関係である。~~そのキノと~~それはキノ的に地域を持つ。だから言葉の正しい表現では共同の発達につれて地域の意味が小さくなるということは出来ない。中村の意味はそれを特定の地域の上にのみ基礎をおくものとして考へるのは不充分だということである。それを行政区画 ~~の~~としての部落と見ようとした。

P.19 「組合う範囲が広くなったり狭められたりしながら弱くなり、やがてその一つずつが無用にな ~~つた~~り、ついですべてが無用になって、家々は独立し共同体は全く分解するという順序をとる」

▼これは共同体の分解の極 各個の家が独立すると共同体は全く分解するという考へ方であるが、この考へ方はギモンが多い。共同体の規定を家々の共同関係（家連合）とすれば各個の家が独立すると一応分解したといってもよいように思はれるが、共同体といっても中村が見たようにその結び付きの範囲の大小は極めてまちまちである。共同体という概念と村落共同体とが同じときめて良いかも簡単には云われぬ。

~~そこで問題になるのは部落外にひろがった共同体と部落内に局限された共同体との差異である。もちろんこの場合でも家連合を 基盤 規準としたものと家連合以外の共同とがある。(1) 家連合を 基盤 規準とするもの④部落内⑤部落外 数部落の場合のもの、(2) ④は同族、親分子分、等⑤は水利、入会林等 しかし同族でも部落外に及ぶものがあるからこの分類は正しくない。又水利入会も~~

~~④家連合を規準とするもの、これについては問題はない。家連合とするものを前近代的な共同体と規定する考へ方が多い。もし部落を行政区画と見るとすれば（中村）一定の政治構造においてこれは確定してものであるから、問題はその内部に局限されたものを部落内の家連合とし、その外部にひろがったものを部落外家連合とすることはできる。これは行政区画を規準としての名称にすぎない。家連合は行政区画としてはの規準として取り上げられることはほとんどない。行政区画はいかなる家連合が行われているかよりむしろ家屋の所在の近接が行政区画に便宜であることを目標とし、さらにその統治に都合の良いある種の家連合のあることだけを取り上げる。この意味において区画と家連合とは結びつく。~~

~~部落をつねに行政区画と見ることはできるだろうか。たとへば大字を一部落とするという意味では行政区画であるが。~~

中村の場合村落共同体は部落の内外に存在する家連合と見ているようであり、部落を行政区画と規定して、部落とはことなるものと考へている。そこでこういう家々の共同関係がいかんしてなくなって独立するか。例へば貨幣経済の浸透して来て、自己の生産物を売り、自分の家の生活に他の家との共同関係が消えて行くことを意味するのであると思ふが、家の生活がほかの家との共同関係からはなれて存在できるのはいかなる状態において可能となるであろうか。少くとも我々は資本主義経済による貨幣経済の浸透によつてはど うにも 決定的に展開しなかつた。②が部落内の他の家の米を集め又自分の米と共に盛岡の商人に売ったのは幕末からすでに行はれていた。②と商人との関係は家連合であつたのかどうか。私はこれですら町の商家と村の農家との間に結ばれた一種の家 連合 の関係と見たい。百姓の家連合において例へば農業上の共同でも葬式の共同でも一つの ■ 行に協力する形態であるが②に対する名子の場合は協同作業 名子間では協同であると同時に交換であるという差異が生じた。労賃を支払う場合には交換であるとするれば百姓と商人との関係も交換となる。この交換は家と家との間に行はれる。交換を共同と区別することは必要であるが、これを家と家との間に行はれ

た等価物の交換と見るべきであって、売買が個人的関係であるとは必ずしも云ひ得られない。資本制経済に移ってから家がなくならないので貨幣経済の中にはこの種の現象は相当に存続した。家の共同関係がなくなると共に交換関係が増大し、家はそれ丈独立して来た。それでも家が ~~個々~~ 完全に独立することは不可能に近いのは、家を存続させる基盤の中に家の完全独立を阻む条件があるからである。したがって共同体の分解はこの意味では完全に出来ないのが現実である。これはむしろ政治構造の変革に期待しなければならぬ。一方に共同関係一方に交換関係を持つ家が存続した。家の存続する限り共同関係がなくならないと思はれる。

そこで交換関係は部落内でも行はれるが、部落外でも行はれ、比較的遠方と関係を持つこともできる。共同関係は同様であるとしても部落外の比較的近い範囲に行はれる。資本主義経済の下では交換関係がより多く 部
■会を占めるようになるになった。これは決して共同体の分解とはならない。

中村のいうように部落は一定の行政区画であるとしても、又村落共同体がその内外において結ばれても、部落 ~~は~~ も共同体と政治構造の規制を受けることは変りはない。そして部落と共同体とは相互に規定し会ふ。部落が共同体を規定する側面もありその逆もある。水利組合の大きいものが部落単位の場合におかれることもある。入会でも同じである。部落は共同体により規定される側面では共同体の内部構造か部落組織に影響を持つ。部落は一定の政治構造の下では一定の行政区画として決められるが、常に一定しているのでなく区画の変更もあった。現在見られる部落はそういう結果生じたものであり、原始から同じ形態をなしていたのではなかった。

第2節調査地について

P.47 「⑭が⑬及び⑮に対して持つ関係を「いわば前近代的関係の残滓」として説明していることに対してのギモン

▼これは⑭がの労働が賃銀として対価を以て計量され得ない関係を示すのであるが、この種の場合に「前近代的」と云へばいつも明瞭であるかの如くであるのはどうであろうか。問題はどのようにして労働がはっきりした価格で表はされ得ないかということである。それは家の関係から個人がはなれて計量され得ないからである。完全に商品化されないからである。

⑬に対して小作・親類。農具を借りる。これは家としての共同関係

⑮に対して小作。 } 農具を借りる。これは家としての共同関係であるが前者と別種。賃銀をもらう
其他に対しては雇。 }

家の存在は前近代の残滓であろうか。■資本制経済でも家と結びついたのは政治構造の問題ではないか。政治構造が家の存立を許していたことにあるから単に残滓ではなく、現代的意味がある。

⑭に関する島田の記述の中にまだつぎのようなことがある。即ち

P.47「この外、⑭は他の家々にも農業日雇に出るのであるが、彼の場合は右のような関係の中で最初から半プロレタリア的な貧農としておかれて来た」云々

▼この記述はでプロレタリア的とある意味は前述の前近代的な関係とはちがうもの、如く記されているが、この日雇—即賃労働は「したがって階級的に半プロ貧農としてとらえられるが、われわれにはそれにまつわる前近代的なものの形骸が問題である」と説明している。即

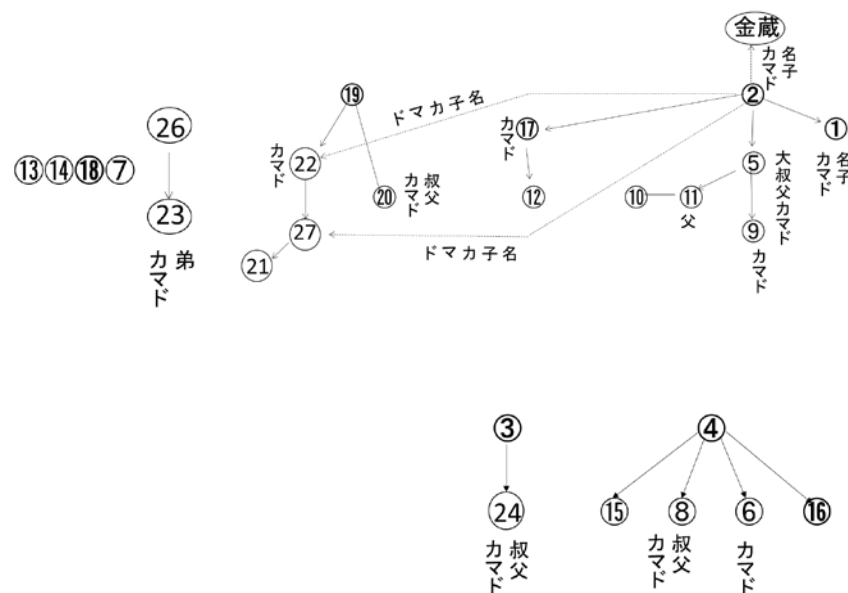
▼これによると半プロ的貧農は前近代的な貧農の形骸であると見ようとしている。こゝでも前近代的なものが残滓と見られるのであるが、残滓と説明するだけでは現実の説明にならない。近代が時代的に来ており、変化も多い。しかしそれは家を新しい意味で存立せしめている社会的地盤の性格に関連する。半プロ的貧農と見た所でそれは日本の特殊な家と結びついて存立している。決して個人主義の基盤の上にあるそれではないから

P.47の補足

⑭が⑬及び⑮に対して持つ関係を「いわば前近代的関係の残滓」として説明しているのは、⑭の労働が賃銀として対価を以て計量されていない関係を示していることから来たと思うが、この種の場合に「前近代的」と云へばいつも明瞭であるかのように思われていることを注意すべきである。実は問題の解決はこれではつかない。「前近代的」というのは個人主義的でない考へ方をさすのだから、その意味で必ずしも間違いとは云へないとしても、それではどうして労働が価格ではっきり表れないかとの理由は明かとはならない。両者の関係は次の如くである。

⑬に対して小作・親類、	農具を借りる、	これは家としての共同関係
⑮に対して小作	農具を借りる	同上
其他に対して日雇		これは家としての共同関係でもあるが前者とは別種で、賃銀をもらう

これで見ると家と家との共同関係が基盤で、個人の労働の価値をきり放して考計量ができないことにある。だから非近代的であるが、非近代的でも欧■の封建社会とは異なる。それは家特殊な素味の家を存立させる地盤を持つからである。そしてこの非近代的なるものとは日本の封建社会でもなく日本の資本制社会に属するのだから、簡単に非近代的ときめるけるわけには行かない。これを通例半封建というのだが、そういうきめつけ方でも決して説明は出来ない。



○ハ維新前から

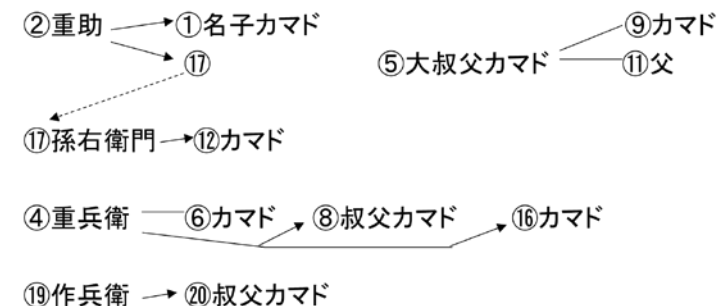
いかなる形の日雇であろうと家と家との関係に規定されるのである。日本の資本主義の上昇期における農村の家連合と結びつくことも当然である。家連合の基本的なものが前代におけるそれと何かの共通性はあるが、現代においては多く政治的社会的条件がことなる。日雇が多数に発生したこともその表れであるがそれが家の関係に規制される意味では共通性があることもそれである。これを唯前近代的なもの、形態・残滓と見ては仕方がない

この書で階級関係と称するものはこの場合半プロ貧農とその雇用者たる農家（地主）との関係である。②の地主であった時代にはこの家と特別関係を結ぶ家が比較的多かったが、今は日雇が多くの家々と関係する状態にある（p.48）それを階級関係として見ても、それは多くの家に関係するものと■■している（p.48）これを階級関係と見ることは出来るとしてもその底に家関係が位■■つく。これは村の家の経営を通して捉へて見ればその経営の変化によって生ずることがわかれると思う。依然として家が生活単位 政治的単位となることを見るべきだ。

P.49「カマド、養子カマド、名子カマドの外にこの種の名前がついていないでも地主本家に従属しているものが多い。したがってこの名 称は のつけ方も実は主観的であり一面的である」

▼これは一寸おかしい。これはむしろ一定の時期にカマド等の名称がつけられて後にもうこの名前をつけなくなった時期があるのではないか。それは多少なりとも時代的变化ではないか。後考をまつ。

P.53. 本家を中心とする集団



P.53「こゝには第五図の家の系統表の解説があり、非常に重要な説明がある」それによると松ノ木には②の下に①③④①⑨等を本家とする集団があり、又隣接地としての堤川目に立花與平治、谷地中、大木には與平治のカマドである立花惣兵衛、村松與助、野中彌七、田屋久左衛門を本家とする集団がある。一方②は江戸時代に堤川目大木等にかまどを出している。そして②が他の同族の家を自分の集団へ包摂して行くのが見られる。それが松ノ木ノ中だけでも②⑦金蔵という①に属したカマドを自分の名子カマドにすることにより包摂するという現象が生じている。

②以外の同族がこのようにして②に吸収される傾向が出ている。このことを「各個の家からいえば、自己の属する集団の地主本家との関係がしだいに薄くなりつつ、より有力な地主本家に従属してくる。つまり自己の属する集団が何重にもなって来たことが想定できる」と説明している。「しかもこれが徹底して進行せずに古い生産形態 ~~が~~を残して来た」と。

▼これはもちろん同族団の変化の一形態である。この場合同族団が重属的に存立するという指摘は大切であるが、これは②と他の小本家の勢力のバランスに関する条件によるものであり、②の勢力がもっと強いと、これらは②の同族団となる可能性もあることを示している。「徹底的に進行せず古い生産形態を残す」という条件によるものである。しかしそれは古い生産形態というべきでなく、古い小同族団を或る程度残しつつ、②の同族団を形成する関係へかなり進んでいるような状態を示すと見る方が良い。

[総説]

P.68 「前資本主義社会の基礎は共同体的な生産関係であり」「すなわち労働力は生産手段と結合して共同体に所有され、労働力の所有と利用、その生産と消費とは結合している。それ故労働力の生産並びに消費は協働社会全体の問題である。」「これは原始共同体の性格である」

▼この書物ではこう説明しているが原始共同体を説明しているわけではない。又原始共同体はこんな風に明確に規定されているのは大体 **Marx Max Weber** 等以来の学説による。しかしこれで良いだろうか。日本史の問題としては共同体をこのように解釈してよいだろうか。後考にまつとしても共同体が全体として生産手段や労働力を共有していたかどうかはなはな問題だ。これを説明し得る何物もない。本書においては近世封建的共同体において労働力の所有と利用、その生産と消費とに相当程度の分離があることを指示している。このことは後にふれるが共同体を構成する単位が家であり、家と家との間に政治的社会的階層があることを示している。家の相互が同族的系譜を持つこともすでに上代から見られるので、この点を論拠とすれば共同体は同值的な一全体としてとるよりも、階層の差のある家の結合したものと考へねばならないから、生産関係を単一体として見て良いような内容のものではない。そうでなければ家は存立しなくても良いはずだ。

P.70. 「より広い家とか村という共同体」「各家の経営労働組織＝共同体」「もとの共同体の形はくずれ切らないで、共同体の内部の家が他の集団(注 共同体) の家の労働に参加するようになる」

▼抄録し切れないが、要するに大小の地主がその家の経営中心としてそれに参加する家々を含めた大きな労働組織—経営形態が成立する。これを共同体と称しているから②の共同体、④の共同体という表現を使っているのである。そして②以外の3家の共同体

◎[共同体の概念について]

⑨ 中村たちの部落(地域的なもの)と見るものは松ノ木、大木、堤川目の如き地域名称を持つものをさすがこの種の数村的傾向を持つものを部落とする場合にもっと大きな地域を考えへて **Cooley** の所謂 **neighbourhood** の概念で考へ直して見るのが大切だ

はくずれきらないまゝにその共同体の内部の家が②の共同体に参加するという形を生ぜしめて来て「重疊的」になる。~~夫きく~~②のそれは④⑦⑩のそれとは同質のものだが大きくなるから関係がうすれる。これを「共同体の拡散」というのであって崩壊して行く過程であるが重疊構造においてつかむべきだということである。

共同体の概念をこうきめても良いが、これは家連合であって必ずしも村落でないから、一方に村落の家の集合生活を共同体と規定するものとひとくちがって来る Marx や Max Weber の Community などは村落を一体として捉へたものである。中村達の概念では村落と共同体とはちがうから家連合に共同体の名を■しようとするのである。そうすると共同体がいくつか重複したり、ずれた部分も生じたり、村落の内部で結合するものも、村落の外部にひろがるものも出来るものとして見なければならぬから、村落とちがった概念である。私としてはこれを家連合という言葉で捉へる方が村落と混同しないと思う。

P.74. 「地主本家二軒を持つと……保護奉仕関係がうすくなる。」「地主小作のつくる共同体は拡散して二重三重になるだけ関係はうすくなる」

▼地主本家が同族団を形成する経営組織が二つ三つ等並存している場合の同族団の相互関係を云うのである。本書では A が B の成員を吸収する場合に A が大きくなり弱まり拡散するといっているのであるが A が強力なら大きくなり強力になり B を全然吸収してしまうことも有り得る。この場合には拡大強化である。前代の強力な地主の同族団はかくして成立したものがあつた。

こゝで取扱う場合はその逆の場合に他ならないが②が他の同族団例へば⑩の名子を自己の名子に吸収するのは前者の方向を示すものである。しかし同時に同じ位の関係で地主を持った場合はその ~~双方の~~ 関係は一方に強い場合よりも弱いのは当然である。②は明治 28 年に出入人数 427 人 M30 には 449 人という繁畳ぶりであることを見るべきだ (p.75)

P.73 「スケ・スケラレグチは賃労働以外の手伝を云う。家格による区別はない。スケラレグチは明治になって用ひられる言葉であるが、名子や名子的出入人にくらべて比較的対等な家からの手伝を意味する」

▼これについての問題はスケをする関係が小作人の場合と本家地主の場合と二種類あることである。これらの場合にスケの関係が同じだとは見られない。

幕末期の関係を見ると (p.71) ⑪は当時持高 16 石余で、②のカマドであったが自分と共に自分のカマド ⑬ 藤右衛門と②に対して少量のスケを出していた。これらはおそらく分家（主家）としての関係から生じたものであろう。これに対して④（当時 20 石余）と③（7 石余）は自己のカマド⑩（6 石余）と酉蔵（4 石余）と共に②に少量のスケを出していた。しかし④の同族的独立性は強かったから④が②にスケを出したことは②に対する従属とは異なる。

「大木の與助のカマドである茂吉（6 石余）と与兵衛（9 石余）とは②へ少量のスケを出す、この関係は何によって生じたか不明だ。」しかし城内の松之助は②に相当依存し畑石代でスケを出しているからこれは小作人である。松之助を⑱、萬太、重太に近い存在と説明しているから、このスケはむしろ夫役と見るべきかも知れない。スケのあるものはたしかに夫役と見るべきものがあるかことを示している。

「堤川目、松ノ木、大木、城内、矢次村、広宮沢村に亘っていくつかの小共同体集団があるが、②の集団がそれらを部分的に侵食して拡大する。これらの家が②へスケを出す家は②の小作人がほとんど全部で、小作関係を持たぬものは⑲と、仁太、酉蔵、⑩だけにすぎない」

④は安政 4 年まで②の小作をしていた。其後小作関係がなくなっただけらしい。しかし④が他の貧農的小作人と同等であったわけではないらしいが、スケが小作に伴う条件であったことの残存と見れば、この種の小作関係の強い地方では小作関係とスケとが結びつく可能性は強い。そしてその基盤となるものは地主手作が大きいということであろう。

P.72 幕末労働組織図から

名子的夫役と 勞賃勞と併存する者

萬太

⑮

重太

スケラレロと賃勞と併存するもの

金治

萬之助（矢次村）

松之助（城内）

「賃労働のやとひは草刈などに時々名子又は名子的なものから 10 人前後とる」と説かれているが草刈は平常的な農業労働とやゝちがうものとされているから賃労働と見なされるわけである。スケラレロの方に入っている松之助はほぼ名子に近いものである。金治ハ平■仁太で②の奉公人分家として見て良いからこれも名子的なものである。

草刈が元々夫役として取られたことは明かであるが、第一にそれから分化して賃労働として見られるようになったことを注意すべきである。

矢次村の萬之助と広宮沢村の新九郎はおそらく②の小作人であろうがスケを少量出している。萬之助は矢次村から臨時の日雇をあっせんする関係にある。

P.74 「二重の本家」「本家と分家という形で地主・小作が形成される……

ここでは労働力の所有と利用、その生産と消費にまだ一体制が残る」云々

A が自分の分家 B を出す時②の小作を予定して分家をなす。この場合 B は②を一方に本家とするから A と共に二重に本家があるという説明になる。地主・小作＝本家・分家ということになると A と B との関係は本家・分家ではない。だからこゝには概念の混乱がある。即ち本家・分家が地主・小作であることもあり、地主・小作でないこともあるのはどこから来るか。本家にとって分家の派出は本家の経営に分家を従属させる目的で行うような条件—大手作—においては親分・子分的関係となることは当然

であり、大手作を次第に解放する過程において本・分家が地主・小作関係として成立することもすでに明かである。これらは封鎖的経済条件の強い限度において生ずるから、この限りでは本家分家の一体性は比較的強く残る。しかし分家の意味が次第に変わる。そして分家即小作とはならなくなる。前者では分家でも末家であるという意味が重要である。

したがって ~~地~~ 本家を二 ~~軒~~ 重に持つことはあり得るだろうか。一方は勿論ないとは云へないがそれにつれていろいろな条件がある。

中村達の p74 の説明では高 5 石又は 6 石位より以下の百姓が分家を出す時に（分前が少くて独立出来ないの）②の如き地主から小作地を分家のために借りて辛うじて分家が独立する場合②は本家となる。血縁の本家と二重になるというのである。②からの小作地貸与によって果して新分家は②を本家とするかどうか。他の地方の場合ならこうして簡単に本家が出来るとは思はれない。②の如き地主と親分子分となるといっても形式的であることもあり、土地の関係も浅い事もあるし、又本家の意味をこの関係に全然適用しない慣習の場合には親分でも本家とは呼ばない。

所で他の場合を見よう。⑬のカマド（血縁分家）である⑭は幕末期には②の名子となっていた。又同じカマドの仁太（金治）（3 石余）も②のカマド的存在で⑬はこれらが②に吸収されるのを止めることが出来なかった（p.71）ということは或る家が創立される時は⑬の分家であっても、②の分家になり得ることを示している。このことは②の勢力が増大し、⑬は没落過程にあると、⑬の保護支配した⑭や仁太が②の保護支配下に移ることを示すものであり、カマド・分家が血縁関係を規準に設定されるものでないことを示している。我々がすでに説いたようにこの場合本家の経営に従属するものとして創立された家はいかなる名称を以ていても ~~末~~ 家来・子分・末家であるという性格を持つのである。本家という言葉の古い意味が本末という対語として成立した事情を知るならこれを血縁関係を原則として成立したものでないことを知ることが出来る。所でこの場合は本家が⑬から②へ全く転換したことを示す。

説明は少しとぶがこれは親方の転換でもある⁽²⁾。そこでこの転換の過程を見ると初め①が完全に本家であるが①の没落の過程にしたがって②や仁太が②に次第に附くようになる。中間過程では①と②とが②等に持つ力が伯仲して来る。この場合でも初めから本家と見られた①が本家であるという意識が強かったであろうが、②の力が強くなると①の本家的權威は劣り、②が本家オーヤジドーであるという意識が強くなる。ついに②を完全に本家にするに至る。この過程では或る時期（多分②の力が①を凌ぎ初めた直後）に本家を二重に持つという状態が来るであろう。これは①であろうと②であろうとそれを本家とする意味は同じである。

所で p.74 に説く場合は創立の時に父兄から多少の高の分与をうけ、又②から小作地をうけるものである⁽¹⁾。或は父兄は小百姓で分与する土地も小作地もなく、②から小作地を借りる無高小作の場合である。⁽²⁾(1)の場合は父兄からの分家と意識され、父兄の家を本家とする。②を地主として本家とするのである。これは本家の意味が明かにことなる。父兄の家を本家とする小さな分家が一般化して来たのは近世であった、近世本家 が—の意味は次第に変わって来た。(2)②の場合を見るなら、無高小作の場合でも父兄の家からの直接の分家として土地（+小作地）を地主から借り 受けたものであるが小百姓の父兄の家と次三男の家との間に階級差はないから古い意味の本末家が生ずる ■はない。ここでは分家の意識が表面に出て来る。別に地主から小作地を借りて地主の厄介に多くなると地主に従属する場合が強いし、地主の土地の耕作にスケを出すからこゝでは明かに親分子分関係が生じて古い意味の本末家関係が再現する。幕末期になると二つの意味の本家が併存する。これらの場合に父兄の本家は無力であるし、これは親族的意味のものであり、地主的本家は親分子分的（主従的）ものものであるから 主-後者は生活の現実的圧力があり政治的関係である。（家は生活単位であるが、村という政治的小社会における政治的・社会的単位であるという意味を重要視する）だから「二重の本家を持つ」ということはこの場合にはちがった意味になる。そしてこの場合には「労働組織に

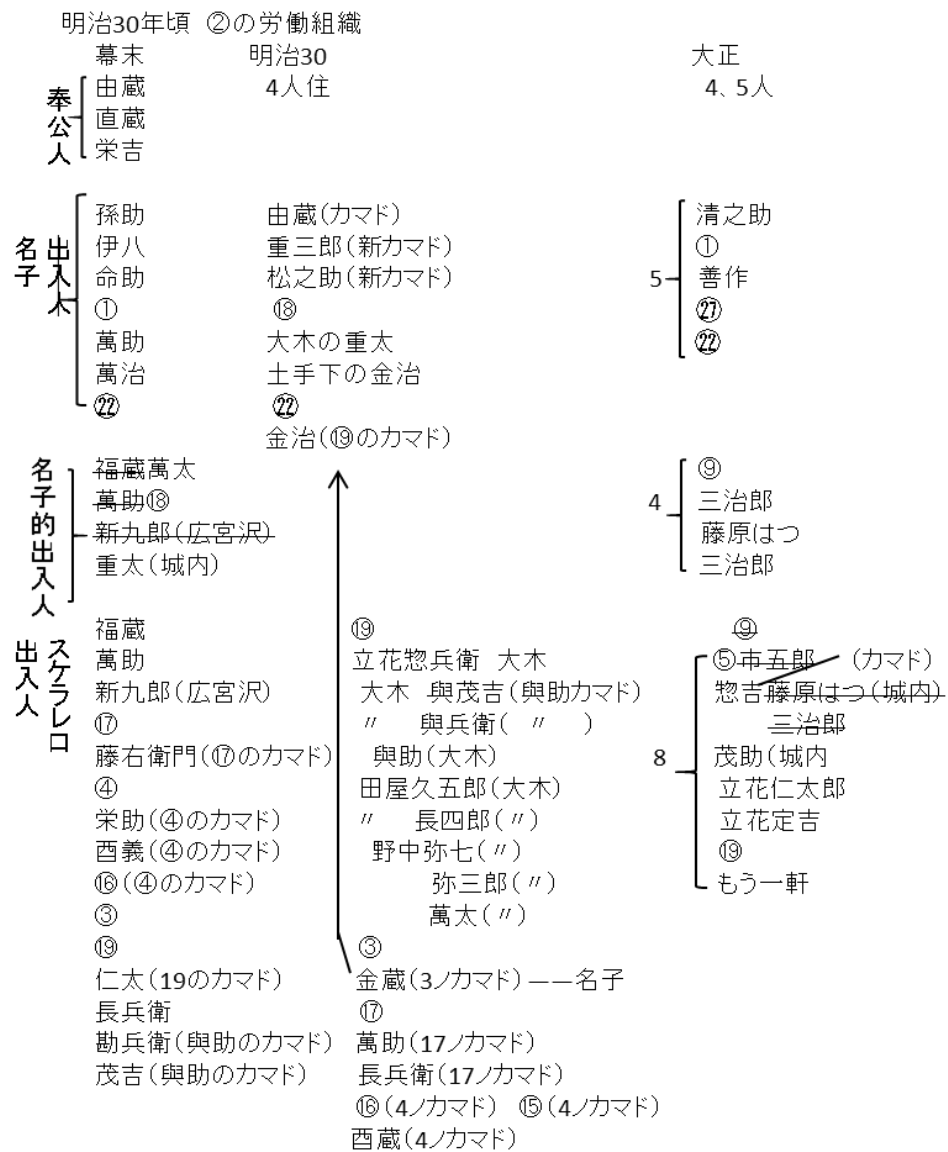
(2)本頁での(1)(2)の肩数字は原文の通り。

あらわれた共同体の重層性」p.74 ということは問題にならない位に意味が少い。したがって「土地所有の問題と重なる」p.74 はずもない。前述した①と②との関係においては各自を中心とする労働組織や政治的勢力の対立、牽引、結合等において様々の問題が生ずるし、「共同体の重層」組織として見られる。

「そもそも本家にとっては分家を立てるのは分家の労働力を期待するからである」p.74 と説 ~~いた~~ かれていたのは自分が「日本家族制度と小作制度」において最初に説いたことに ~~あ~~ 初まるが、これは少なくとも中世的本家の姿であって、近世になると本家の意味が次第に変わりつつあったから本家の意味も成立の要件とちがって来た。この種の中世的本家もかなり広汎に残ったとしても、分家 ~~は~~ 創立が分家の労働力を本家の経営にとって必要とすることは失われた場合も広汎に生じた。このことが本家の意味を変化させる導火線となった。その理由は経済の変化政治の変化によるものである。だから親分子分地主小作関係の集団にお ~~いて~~ ける家の相互関係と親族的本分家の相互関係とは著しくことなる。「本分家の一体性が残る」というのは前者であって、後者では経営の上では小部分の協力しかない。＝~~体~~他の生活の順時の協力も見られるが一体性と云うことは出来ない。

P74「地主本家を二軒持つことになると、どうしても以上の保護奉仕の関係がうすくなる」(P.74) ▼これは「つまり直接生産者における労働力の所有と利用とがしだいに分離してくる。生産手段の所有権が強まる。即ち 地主が支配権を強くして来ると、地主小作のつくる共同体は拡散して二重、三重になるだけ関係はうすくなる」

▼労働力の所有と利用とが一体となっているのは地主が支配が強いから、名子等の労働力を自己中心に確保することである。もちろん生産手段は地主が全部所有する。これでは小作は親方支配の内附関係に外ならぬ。この共同体が拡散するには小作人が一人の有力な親方に専属とならず他の親方の小作をし、その比重が両者に均等になるような状態でなければならぬ。したがって A 親方地主の勢力が弱められて生じたか、小作が A に従属すると共に



B 親方にも従属する必要が生じたか等の場合がある。煙山村の場合は②の勢力上昇により旧同族団の解体の過程に生じているようであるが、②の勢力の中に深く入るなら、他の同族団は拡散しても②の同族団が拡散したと見ることは出来ない。このことを明治・大正期の状態で見れば明かになる。

まず明治期 27-30 年頃には、②は幕末 100 余石から田 町畑 20 町に達した。明治末季には手作地 5 町となった。全体の経営としても上昇をつづけたが、手作 5 町となったことにより更に多くの労働力を必要としたことは明かである。②は旧来の関係の上では名子の夫役は余り動かなかった。しかし出入人の数は 28 年の 427 人から 30 年の 499 人にふえている事は手作地へ名子以外のスケが増大したことを示している。そしてそれは新たに小作関係を結んだ隣接部落の小農のスケ ~~によ~~をとる形を新に作り出したことになる。これにより隣接部落の中心となった農家の労働組織を崩す結果となった。

即ち⑬は松ノ木部落であるが⑬のカマド②と金治が②の名子的地位となった外に⑬そのものが②から借金してその利息の代りにスケに出ているから⑬のマキは総くずれで、②に従属してしまったことになる。

大木の立花惣兵衛のカマド重太は②に名子として所属してしまったが、本家の惣兵衛が②の小作になって、利息返へしのスケに出るに至った。さらに没落して子供三治郎を②に奉公に出したから、立花惣兵衛のマキも②に所属してしまった。

大木の與助のマキではカマドの⑬は前から②の名子になっていたから、この関係を二重本家と見ることは出来ない。②を本家とする名子である。したがって與助は②に対してははるかに劣勢であった。だから他のカマドの茂吉 (6 石余) 与兵衛 (9 石余) も②へ少量の小作をして少量のスケを出さねばならなかった (幕末)。しかるに明治期 (30 年頃) には本家與助も衰退して②へ大工働きなどに出なければならなくなり、他のカマドも②へスケを出す関係であったから與助のマキも著しく衰退した。この中⑬は明かに②のマキに属し、他は衰退しても與助の ⊖ マキであろうが、このマキ全体が

②への従属を次第に深めて来たからマキとしての独立性は極めてあやしいと見るべきであり、その従属を深めれば深めるほど②のマキの成員となるのである。これはマキの拡散というべきでなく他マキへの所属であり②を中心として見ればマキの拡大であり、拡大した外側では十分に所属しない部分があるので一応拡散に見えても、中心部に濃縮マキがあるのだからマキは拡散したのではない。一種の同心円の構造であろう。

大木の田屋久五郎とその分家長四郎がともに②の小作人としてスケを出すようになったのは、詳細は分からぬが、久五郎と長四郎が元本家分家であっても、②から見ると小作としては同じであり、一定のスケ関係を持つにすぎない。久五郎と長四郎が本分家であったことはマキとして成立していたであろうから、そのマキが新たに②に所属したことに意味がある。これもその間にマキ的労働関係生活関係があつたようであるが、②に所属することによって、その関係にも大きな影響があったことを想うべきである。この変質は②の労働組織の拡大によって生じたことであるが、②の労働組織が拡散したと見てよいのであろうか。②の遠心力が働くと同時に求心力が働いている

③松木安康の家は②と同じ位旧家であったが父、叔父の代②に 3、4 年の年奉公に入る関係におちた。その前に②の ~~奉公~~ 小作もしたからかなり前から没落して②に従属していた。幕末には②にスケを出していた。(スケラレロ) 明治になり③の分家の金蔵を②の名子円蔵絶家の跡へ名子として入れた。③の分家の松太郎も②にスケを出し③もスケを出した 年 3、4 人であるからスケも少ない。この歴史から見ると③は分家はあっても分家が②に厄介になっていたから、独立のマケとして②に対抗する力はなく②の勢力に附属したものであることがわかる。

④は幕末には②にスケに来たが、明治 30 年にはスケに来なくなった。④のカマドと酉蔵、~~⑩も~~ 栄助も②にスケに出た。スケラレロであるから②に深く従属していたわけではない。④が安政 4 年まで②の小作をしたことも必ずしも従属的地位にあって小作をしていたのではないらしい。だから明治になってからスケに出なくなったし、これは小作関係がなくなったことを意味するだろう④のカマドであつて②にスケを少し出した酉蔵と~~⑩~~とは②の小作をしていたのではない (P.73)

酉蔵と⑩とはどうして②にスケを出していたであろうか ⑦ 幕末には小作でなくて②にスケを出していたのは⑨と仁太がある。⑨藤原作家は最古の旧家と伝へられるが②へ年奉公をなし、大工として父の代から②には雇にも出る関係に落ちていたから②と関係が深かった。19のカマド仁太も3石余であったが②のカマド的なものになっていたから⑩や酉蔵とはちがう。⑩・酉蔵は④を本家としてその小作もしていたから②とはむしろ縁遠い。明治になると④のカマドの⑮が②にスケを出すようになったが④のマキが②にスケを出している理由は本書では明白ではない。しかし④のマキが明治に②のマキに所属を替えたということは云はれない。むしろ④のマキは独立性を堅持していたが②と軽い関係を持ったと見る外はない。

P.76 明治-大正期の②の経営とその周囲

②は T11 年に耕地 18 町 9 反、雑地 8 町 9 反の地主、自作地田 3 町、畑 1 町 5 反、奉公人 4or5 人

名子 5 家 主なる出入人 4 家 スケラレグチ 8 家 15 人

名子の夫役減少、一部賃銀労働となる（日雇人化） 出入人の労働動⁽³⁾化 貸付地の増大、小作人の手伝の減少。

名子の夫役の減少は名子の経営の発展による。即清之助は借入小作地をふやし、自作地を大きくするから、夫役がすくなくなる。それだけ自己経営の部分がますので自立的になり、同じような境遇の②の小作人立花仁太郎や②のカマド清五郎とユイをする。②が耕地を名子に小作させるのはカマドを出す時に名子に貸すからで名子の自用地と結びついて小作地をさせるからである。土地の新しい集積のない限りかくして直営耕地と名子に請作 ~~せ~~させて行く方向をとる。これは同時に一般に地主が自作を廃止する条件（小作料の利益が大きいこと）とマッチしているからである。即ち地主が土地経営を賃地料収取に基³ずけることになって来たからである。他方名子も自営を欲するからである。この場合地主の経営変化の意欲が積極的であると見るべきであろう。

名子の自営は ~~貨幣経済の~~封建的な封鎖性が広汎にとけて、資本制経済の発達、貨幣経済の進展から生じた employment の増加であり、賃銀

(3) 労働力の誤記か？

労働がふえて来た、地主に対する名子の夫役はこれに影響されて賃労働的要素が多くなり、夫役と賃労働が併存するに至る。しかし家の関係から来る賃労働においては労働が低い、スケ ~~ラレグチ~~ 等の出入においても賃労働に移るが、この場合も家の関係から来る低賃が支配していた。かくして名子のあるものは土地所有が可能となり名子ヌケも生じた。②の如きは田畑各一町（二町）を所有しこの経営により夫役（②への）の減少は著しい、即ち②のマケから分離の方向が明かとなる。~~又①との関係~~ 又②も自立する。②と②が②との親分子分（主従）関係を断つ条件は明かとなる。②と②②との双方に分離する条件が成長して来たのである。この間には元来親族的関係はないから、こうなると①との親族的関係は残るが、②、②は①とは親分子分的関係はこのために復活することもないし、その条件は全然ない。

「スケラレグチ」というのは明治期の②の帳面に出て来る。これは名子や名子的出入人のスケとくらべると②と比較的対等な手伝のことを意味する（p.73）賃労働以外の手伝（スケ）をこれと区別して良いのだろうか。大正期にはスケラレグチは②からのスケカヘシを伴っているからスケラレ・スケカヘシという対■として生じたと見て良い。これは②の如き大きな手作経営をした百姓が一方的にスケをとっているような条件においては有り得ない。②におけるスケが全体として減少したことは手作地の減少であるが、それにも拘らずスケが賃労働と併存するのは外部に賃労働が増加した影響であり、以前にはスケに来た人が食事をして藁等をもらって■ったのが、一部は比較的安い賃労働にふり返へられたのである。（地主はの方がむしろ得であった）（この種のスケは能率が悪く、地主の方で麦■を欲していた位のものである）~~一方的なスケラレがスケカヘシと結びついたのはスケラレグチは初め一方的なスケであったが、これもほぼ対等なスケ家でスケを出すことは~~

スケラレグチ。スケラレグチが比較的対等な家からの手伝を意味すると説明されてるが、第6図の農業労働組織概略図を見ると被助口の中に属する各戸は②から見るとはるかに低い社会的経済的地位にあるもの許りである。大正期に至る迄はスケラレグチはスケカヘシを伴わなかったのに大正期から

スケカヘシを伴うことはスケラレグチがやはり一方的のスケから出て来たものであることを示すようだ。明治期の帳面にスケラレグチと書かれているのはスケラレグチのスケカヘシもその時期からすでにはじまり出して来たのではないだろうか。これに対して小作人の間の協力をユイというのはスケラレグチスケカヘシには②との関係から来る上下的意識があったのではなかろうか。

②の労働組織において明治期に占めた地位から上昇した家 (p.76) として

主な出入人から → 被助口になった家 高橋惣吉 (重三郎)
被助口 → 一般小作人 4、6、16、村松與之吉 (與助) 同仁三郎 (與兵衛)、田屋東蔵 (久五郎) 同春蔵、高橋長作 (長兵衛) 野中弥治 (弥助) 誠 (萬太)
被助口 → ②と土地労働ともに無関係 17、㊦、㊩萬助 (西蔵) 立花惣太郎 (惣兵衛) 立花林三郎 (久兵衛) 田屋長一郎 (長四郎) 野中弥義

上にあげた所は出入人よりスケラレロが上位であり、スケラレグチより一般小作人や土地労働ともに無関係となったもの、方が上位であることを示している。この中で②と家格の古さを匹敵するのは④位であるがそれも②と比して政治的社会的地位は格段の差である。それはともかく一般小作人になることが上昇であり、小作人でない自作農になることも上昇であるとすればスケラレグチが決して対等のスケでないことを知る。

スケラレグチが②の大正期に減少したことは従属小作が普通小作に転換したことの中にもその理由は見られる。このことは地主の変質による。そして小作農が地主の労働組織の中でその位置を持っていた組織からはなれて来たことによる。それは中村達が「村の生産構造の変化」と称するものによく表れている。

P.77 ㊩の経営

㊩は大正 6 年に㊨を分家して、カマド ㊦の二軒をマキとし、②との間に労力や小作の関係を切り、独立する。(マキの独立) 田 4 町 1 反畑 1 町 8 反宅 2 セ (自作田 2 町畑 1 町 3 反 馬 2 頭家族労力 4 人) ㊨小作人㊩、中野留蔵、㊦の 4 軒からスケが出る。

この 4 軒との間にユイ (肥付の馬、田植) が行はれるが、これは本質的にスケ

又4軒との間に労働に対して「金銭払い」があるが、これも身分関係から見れば賃銀労働になっていない

▼この意味はよくわからないが、ユイと称してもスケ、金銭払いといってもスケがあるという意味ならん。本来家の間で行はれる給付関係には上下的な意味のものがあつて示す。

この外に⑱や㉔が世話をして日雇人夫を集めて来る場合は賃銀労働としての性格を持つといっているが、前者と異なる所は家連合の形をとらない点である。通例のユイが労力の交換であるとしても必ずしも正確に計量されないのは家の関係から来る。これは対等の関係であるが、親分子分の間では上下的な家関係である。これらが賃労働と紙一重だということも云ひ得るが、賃労働は労働の質的計量 ~~が~~ をより正確に計らうとする点に規準を持つのでこの種の家関係による労働が貨幣で換算されることが直ちに賃労働であると云つてよいかどうか、少くとも欧米的賃労働とはちがった規準にあることはたしかである。日雇を出す家とそれを雇う家との関係としても深まる可能性もある。

▼⑰の経営が以上のような自己のマキの形成の上になされることを以て、中村達は共同体的な性格だというのが、共同体のこういう概念による表現は適当か。部落を地域的な行政区画として家の連合がその内外を被つて生活組織が形成される。共同体を個人主義的なものでないとすれば日本の家連合を共同体といつても良いがそれは封建社会を以て終りをつけるものでないし、資本制経済の地盤にもなり、又社会主義への過渡期の現在にも存在している。それは家を存続させる条件によって生じているから資本制経済でも日本のようなものでは共同体はなくなる。

P.78 ④の経営

オジの分家で耕地をほぼ折半して経営が分家と同じ位になった。明治末か大正であろう

明治期の大経営(比較的)においてはオジの労力と分家のスケが多かった。大正期になると経営が縮小したので本分家間のユイになった(平等的関係)ユイが本分家間で行はれた▼当初には肥付のユイは次の家の間に行はれた。肥付のユイ ④佐々木純一③松木安康①⑦高橋芳男①⑥④ノカマド佐々木嘉藤治①⑤④ノカマド佐々木善太郎①③④ノ世話ニナッタ立花源一郎①⑥④ノカマド佐々木幸一ユイは当初あくまで本家のためのものという考へが強かった。▼もしそうなら当初上のような肥付のユイが成立するはずはない。「当初」というアイマイな表現が二ヶ所あるが、当初は③・①⑦等をまじえたユイがあったとすれば、それがなくなって本分家のユイにしめられて本家中心にユイをしたのを、本家④の経営が大正期に半減したのでユイの形態に大変化が生じたのだろう。

2 肝入層 ②重助家

P.80 宝暦6年 煙山村分10石 北矢羽々村分12石 計22石

P.82 元治1年 10町余

P.84 煙山村延宝5年検地帳 高360.石367 約100
元治1年打直検地 758. 048 約210

宝暦6 22.石231

文久3 51. 438

元治1 106. 370 改高(打直検地) 10.町5

明治8 10. 6

地租改 20. 7

P.87 宝暦7年分家以来「溜池送り」と云はれた程溜池に専念して来たと云はれる。②の開田面積は如何②

明治3年に大豆10人役(8反)粟13人役(1町4畝)稗39人役(31反2セ)の作付面積を持つ。(小作地も含まれている間)▼これによって見ると輪作をしていると思はれる。明治10年の収量の上では稗は2石1斗で余り少い

入作60駄 手作60駄 杓120駄

$60 \times 3/2 = 90$ 駄 小作地収穫 1.5 駄=1石 1 駄=6斗6升6合6勺

元治1年の手作推定4町

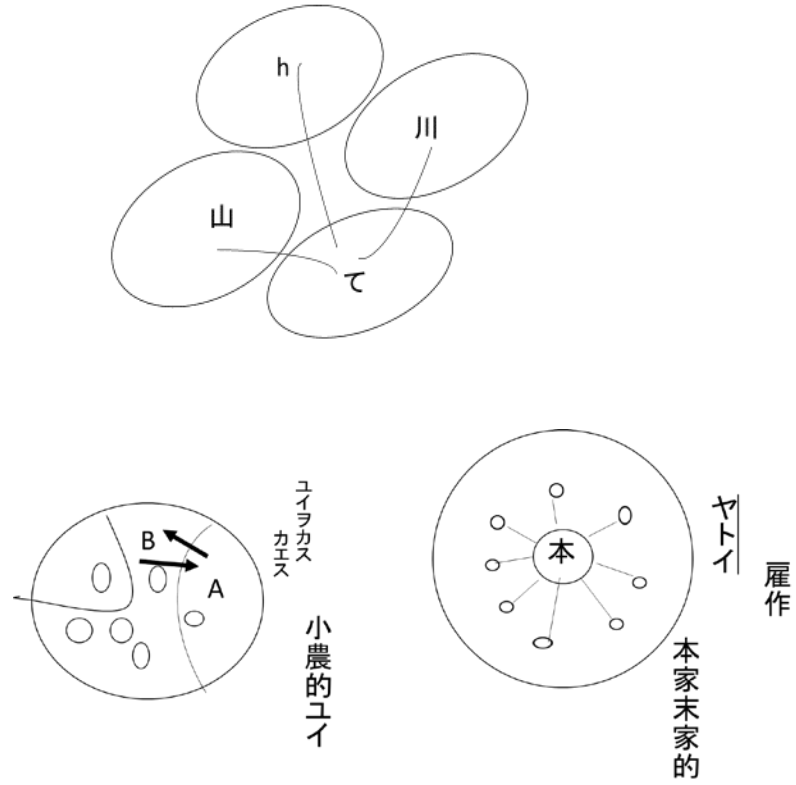
明治29年の36反 畑28反の比例で4町の割合を見ると

元治元年 26 14

[元治検地ハ6尺5寸平方が一坪、田ハ300歩が1段即ち12675坪、
畑ハ900歩が1段38025坪

26反=329550坪 14反=532950

(4)



児玉幸多 近世農民生活史 吉川弘文館

続日本記研究

東大出版会 伊藤鄭爾 中世住居史

(4) このページはノートから切り離されている。

天保明8 家族数不明 名子1家 小作人7戸
寛政1 家族数不明 奉公人1人
天保8

天保明 8

家族数不明

名子1家

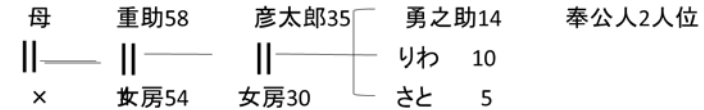
小作人 7 戸

寛政 1

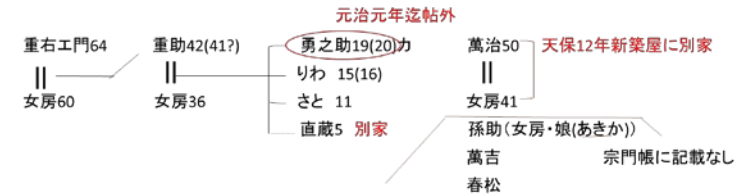
家族数不明

奉公人 1 人

天保 8



天保 14

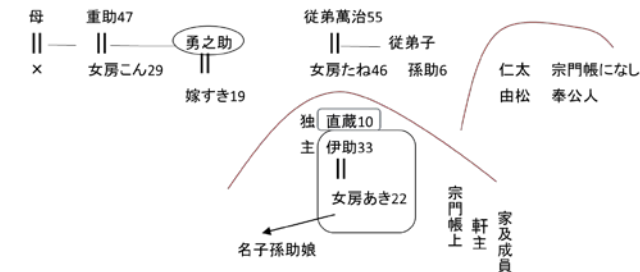


奉公人分家を別家ということは宗門人別帳により明かである。直蔵の所に「別家記」と附注されている。

萬次夫婦が天保 12 年に別家したことは同年の②の大福帳に見えるが、別家した後なお宗門帳は重助家に記載されているから、一面では他地方の宗門帳の如き記載とも思はれるし、他面ではその独立性がアイマイだから同家族の如く記載したとも見られる。いずれが正しいのであろうか。

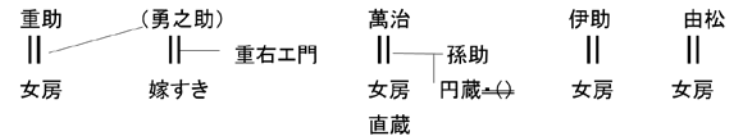
大福帳の記載に萬次の新居は「二間梁二五間半桁惣下屋二尺五寸に三尺なり、掘立なり、右江中縄二千餘夫代 十二月朔日萬次引移候」とあるが、この中惣下屋は惣土間の家のことであろうか又掘立であることも注目すべきことである。名子の家の状況を見るに注意すべきことだ。萬次は名子となって天保 13 年以後慶應 3 年に死去するまで②へ夫役に出ている。

嘉永元

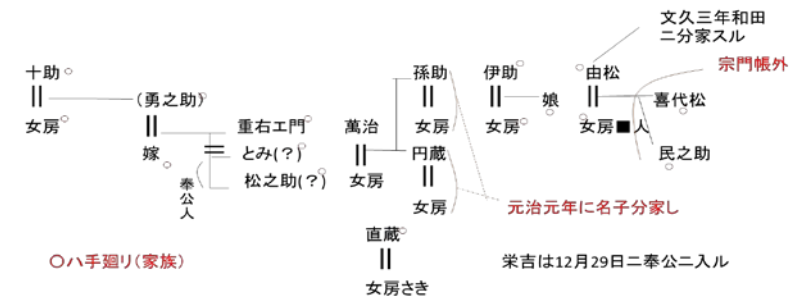


仁太、伊助、由松（由藏）は長い奉公の後嘉永 4、6、文久三年に名子分
家をした。

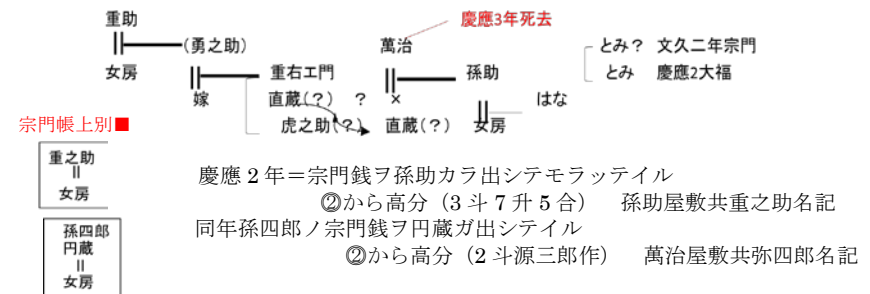
安政元 （13 人）



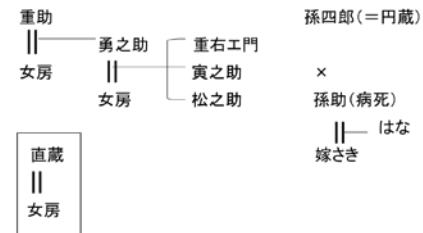
文久 2 （19 人）



元治元 （10 人）



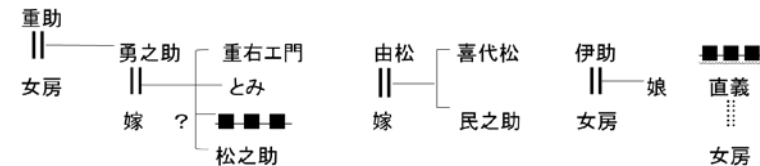
明治元年 （10 人）



元治元年の重之助、弥四郎は不可解である。この年円蔵夫妻は重助の家から別家にいるよう

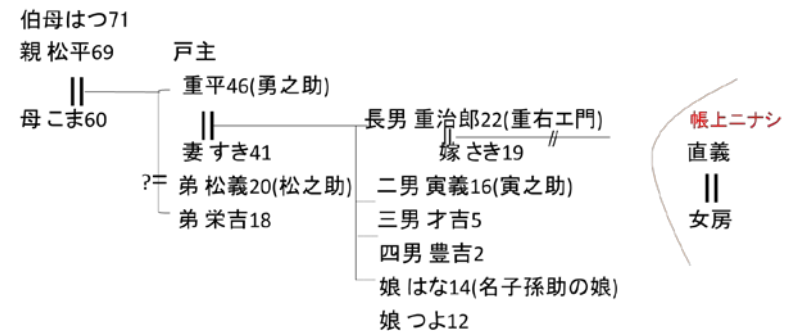
に見えるが、弥四郎は貢租の組も宗門改の扱いも②と同じ組に属しているから多分②の名子で、その名跡をつぐものとして弥四郎家に養子したのではないか。②から高分 2 斗あるが源三郎作萬治屋敷共とあるのは円蔵が萬治の屋敷の継承者であることを示す。重之助家が②からの高分 3 斗 75 と孫助屋敷を継承するのは重之助が孫助をつぐものか、或は同一人であろう。これを以て見ると萬治の子孫助と円蔵とは②の庇護により重之助孫四郎の二家となって来る。明治元年の宗門帳でそれがはっきりして来る。

▼文久 2 年大福帳に八月の粟青引刈、豆葉取、稲刈に多くの日雇を雇った理由を記した中に (p.95)「大はしか流行、手廻十五人内十人相煩候」ために「右の通雇人を雇候」として手廻十人 ~~の代りに~~は「松之助、喜代松（由松長男）、おさき（直蔵女房）重右衛門、おとみ、おゑん（由松女房）、民之助（由松次男）、虎之助、お徒よ、直蔵~~へ~~十人也」とある。文久 2 年の手廻十五人（家族構成）は次の如し



▼明治 3 年の宗門帳

栄吉は慶應 2 年に下人栄吉とある（大福帳）から弟栄吉は雇人である。娘



はなは名子孫助（明治元年死亡）の娘で明治 4 年に栄吉と娶はせることにして主家へ明治 4 年 2 月 2 日に引取った（大福帳）この宗門帳は明治 3 年であるからそれを予想して作ったのか大福帳の記載に誤りがあるかどうかわからぬが下人の息子や娘でもその家の一族としての考へ方が強くて弟、娘等と表現したものか

と思う⁽⁵⁾。即ち栄吉は親松平代に子として養取したから重平には弟分として表現されたのであろう。又はなほ重平の子（分）として養取したから娘分として表現されたものと見て良い。

嘉永元年の宗門帳に奉公人萬治が従弟として出ているのも何かそれに近い表現であったのではあるまいか。

もう一つ注意すべきは長男重治郎（重右衛門）は慶應3年以降（19才）直蔵、松之助、栄吉と共にホツ田（ホマチ田）を持っていたこと（稲刈数覚帳）である。家の嗣子も一人前になる前は同様であったことである。

P.100 直蔵

明治元年の稲刈数覚帳の中に「直蔵、重右衛門、松之助、栄吉ほった三人打」とあり、この4人に対してホマチ田が約2反与へられてゐる。

1町米二駄、去卯卯年穀田 直蔵分

内一駄半俵 御年貢米引 残片馬半俵 直蔵分 （下略）

このホッタは結局4人に別々に分れていたらしいが、直蔵分について見ると一駄半俵の御年貢米引いた残片馬半俵が直蔵の年取である。この土地は年貢のかかっている土地でおそらく下田か下々田である。そういう田をホッタとして与へていることを注意すべきで、又年貢を引いた残り全部が奉公人のものになるのは一種の分附的田地であることを示す。通例のホマチ田は主人が年貢を引きうけて全収穫を作る人に与へるものである。そういうホッタは場所の極めて悪い所である。この場合は少しく良い所を与へているから年貢分だけ出させることになるのであろう。

末家 p.101 or p.99 別家

~~由松家の名請百姓として分家（高1石4斗）となる時~~

明治4年大福帳に「直蔵末家ニ付家作願之通被仰付候御礼ニ」酒預（酒切手）三升、柿二連（5×620文に当る）を官辺へ出している。この場合は家作について②から手■をしているので由松の文久三年における別家が名請百姓（1石4斗）の取立となるのとやゝちがうとしても官辺へ御礼を出すことを注目すべきだ。由松の名請百

(5) ページ上部に

		M		K
3	2	1	3	2
22	21	20	19	

 の書き込みあり。

姓取立に関する上司へのお礼がいかに煩雑なものであるかも注意を要する
(p.99)

P.106 出入人の労働力

P.110 田植

明治6年5月

15日 18人のスケ

16日 8人

17日 12人 但シ午前10人(庄之助へ) 午後10人(孫助母へ)のスケを他家に出している。これらの自家労力を自家の田植に使用していない 自家労力が20人位一日にあることにあるが、これを何よって出すか。やはり名子等の労力だろうか。(次ニ明カニナル、名子ノ出役デアル)

18日 11人

19日 18人

20日 9.5人 但シ①へ10人出している。

②への労力の集中度が以上の如くわかる。

②から助を出した家の田植の日には他の出入人も名目は②への出役になっているが、事実はその家の田植えに協業したものである。

▼これは②を中心とした協業であって、②への出役の労力が②から他家へのスケとして用いられることに重要な意味があるのであり、②を媒介せずに協業しているのではない。「この時には②の家族又は奉公人もこの協業に参加している」ことはその意味である。

5月17日は午前庄之助家と② 午後孫助家と②とが田植したことになる。これらの労力は②へ全部出役したものを三つに分けて使用することになる。これは②を中心とする田植協業集団となる。庄之助の労力と孫助の労力は相互にスケをしたことになるとしても、それは二軒のスケ関係として見るべきものではなく②を中心とするユイ集団ということになる。これは

P.113. ⑥ これに関連するものとして②から田植え労力以外のスケを行っている場合を見ると、①が明治6年5月に刈敷三駄をもらっている。田植の場合は①から②へ11.5人出して10人をうけている。M8年には①の田植を②がやっている。①の②に対する依存度が強い。

▼これは②を中心とするユイ組織の内容をいろいろ考へさせるものである。②のカマドが或る程度名請百姓として立っているが、小作部分が多い。これらは小作地 ~~の~~ 耕作への地主の関与が大きい形である。①は肥料をもらい田植労働に多くの労働力をうける。その労働力は②自身の常備しているものではなくて外の子方百姓の出役を含むものである。奉公人労働力であることもある。

P.117-118

明治初年に小作人が地主に出す手伝は単なる夫役代納ではない。現物地代（小作料）が支配的になっているが、「小作人の生活状態からすれば現実には地主手作に従事して地主との身分関係に入らざるを得ない」そして「名子的なこれらの家は多くは②の分家ではなく他家の分家のものが②と本分家的な濃厚な労働関係を持つに至っている、この現実の関係で共同体がつくられている」

▼これは一定の借金を夫役で支払うことである。その借金は現物地代の未納分だからこれを夫役で支払う。これに伴って必然的に親分子分が生ずるということは云われぬだろう。現物地代を出しても親分子分とならないということも云われない。現物地代によってそれがきまるわけではない。夫役は地主がそれを要求する必要があり、要求し得る力があれば発生する。地主と小作が主従的身分関係に入るのは 夫■土地貸借が夫役地代か現物地代か貨幣地代かということによって規定されるのではない。まず基本的には政治構造から来る。政治が社会 政策-保護的政策の皆無な、或は極めて低い状態にある時個々の家の利害を中心とする利害共同集団が根本となる。そういうもの、一つの表れとして日

(6) ページ上部に

{	formal	の書き込みあり。
	Informal	

本の家がある。家連合を重層的に組織させた政治構造を考へる時に地主小作関係が出て来る。そして地主は大手作をなし、貨幣土地経済が支配的で地主は大手作を行う場合にそれを経営するために奉公人や名子を周囲に持つ必要があるから夫役が多い。大手作をしてもその外に土地を多く持つとそれは小作経営に移し、現物小作料をとる。貨幣経済が発達して来ると貨幣地代も出て来る。大手作をやめると夫役は少くなるというような関係が生ずるが封建的な構造の中では主従的關係が彼等の家関係を規制する。

分家(名子カマド)

由松(由蔵)	文久3年(1863)	p.98			
「由松別家諸入用控」参照		[名請百姓]			
高	1石4斗	家三軒	諸道具		
	(300刈 17人役)	小作地	田25畝 家畜穀物		
	明治4(1871)	p.101	畑若干		
直蔵					
	田500刈(7段)	畑4反	宅地200坪 原野一町 家作		
栄吉	明治8(1873)	名子孫助を嗣ぐ			
孫助	嘉永元(1848)				
	粃種一俵、早稲麦二升、小麦種一升、粟種三升五合、稗三升、黍一升、ソバー斗、大豆四升、小豆三盃、(以上種物)				
	食料、				
	家(弘化4年建之)				
萬治	天保12(1841)	名子カマド	条件不明		
伊八	嘉永4(1851)		条件不明		

P.117 名子と小作の結合した例

▼名子が地主本家に隷属度の強い場合は自覚の土地の極めて少い場合であろうが、そのために地主へのスケの量が多い。これは分家の条件によってほゞきまる。分與又は貸与の土地の少いことであろう。所で②の出入人の中

元治元年に持高のなかったものは 23 人中 6 人にすぎない。

南の萬助、①②、萬治、伊八、孫助である。

この間明治 3 年に取高したものは南の萬助と②であり、他の 4 名は無高。

無高の代りに②から小作地を借りていた

	元治元小作	慶応 2	明治 3
南の萬助	町米 5 駄片馬	40.28 セ	田 200 刈
	大豆片馬	5.17 石	
①	町米 3 駄	14.1	——
	大豆片馬	1.627	
②	町米 3 駄	44.11	——
	大豆 1 駄	4.795	
萬治	町米 4 駄片馬	49.26	200 刈
	大豆片馬	5.45	(小作料 3.5 駄)
伊八*1	町米片馬	——	——
	大豆 1 斗 5 升		
孫助*2	町米 2 駄片馬	——	——
	大豆 1 斗 7 升 5 合	——	——

*1 及 *2 ハ p.116 に家成立の説明あり。

P.116117②は⑱のカマドであったが、②へ家屋敷を売渡してに名子となった。年代不明。天明 8 年に屋敷、苗代、田 230 刈畑 24 人役を小作していた。(P.116) 年間 20 人位のスケを②に出した。明治 10 年には零細な自小作していた。しかし明治 3 年迄は高は持ため純小作農であり、天保 4 年に苗代小作料として莫産を納入していたし、幕末は莫産や豊表を毎年多量に納めていた(多量とあるが量は不明)。

P.117-122

由蔵(由松)文久 3 年に高 1 石 4 千の名請百姓に取立てられたとしても、これは確かに名子カマドである。元治元年に 6.304 石の持高となり、②の畑小作をした。慶應 2 年には畑 25.22 セ(石 5.24)の小作であ

った。文久 3 年に独立すると②に年間 53.5 人のスケを出した。元治元年には 30.5 人 金馬 1.5 草刈 2 人 200 文を出し、慶應元年には 22 人を畑石分として出した。畑石分とは畑小作料の代納として夫役を出したことらしい (P.117) 由蔵家の如く名子カマドとして②と密接な関係を持つものが、この期間に純粋な身分的夫役をやめて小作料代納の夫役に意味を替へて来たことはその隷属度が著しく減少して来たことによるのではあるまいか。

⑩は持高は元治元年に 5,000 石、明治 3 年 6,304 石で、元治元年に②の畑小作をなし、慶應 2 年に 19.5 セ (高 2.084 石) であるが、文久 2 年に②へ 5 人のスケ、文久 3 年 9 人 (畑石分)、元治元年 9 人 (畑石分)、慶應 1 年 7.5 人馬 0.5 (畑石分)

重太は持高 4.896 石 (元治元)、5.801 石 (明治 3) であり、文久 3 年②の畑小作 これに対して、文久 2 年は 9 人のスケ外に 2 草刈 200 文、文久 3 年に 7 人 (畑石分) 元治元年 7 人 (畑石分) 慶應元年 7.5 人馬 0.5 (畑 5)

萬太は持高元治元 3.67 石 明治 3 年 3.618 石 文久 3 年②ヨリ小作畑小作大豆 2 斗畑 2 人役分 6 人。②へのスケは文久 2 年 15.2 人。文久 3 年 13 人内 6 人は畑石分 7 人代払 元治元年 15 人内 6 人畑石分 9 人は 2 人が田植、7 人が平人 慶應元年 6 人畑石分 外 4 人代払

⑩重太 萬太は文久 3 年依頼畑石分としてスケを②に出している。

P.129 共同体的諸関係の崩れる要因としての賃労働

▼ヤトイ（夫役）から賃労働が発生する場合

1 夫役の中の非日常的労働が賃労働になる 例へば草刈や杣。

南萬助、萬治、㊟、㊠、重太 由蔵（1人百文）

2 日常的なもの 但し特別事情があろう 萬太

3 他農的作業以外のもの ㊟の土磨臼製作、庄之助の石振、大工

以上の労賃は安い

○この外に一般賃労働が存在した。これによって夫役内の労働が触発されているのではないか。この側面から見ると、賃労働が共同体関係を崩す要因のように見えるがその逆の現象を生ずる。

即ち一般の日雇が強められている段階でも、日雇は特定の家との間に強められる場合に所謂共同体関係が生ずる。中村達の説では共同体関係の強い段階では賃労働は生じても共同体関係の内部で発生するので一般賃銀よりはるかに安い。従って共同体関係の労働関係と切りはなすことは出来ないというのである。このことは身分的な労働関係を少しづつ変化させていると見るのであるから、共同体が外部の賃労働関係に影響されるのである。この見方を次の如くしてはどうか。共同体の身分関係が強いと労働は身分的性格を持つが、その外部に臨時的に賃労働はやはり存在する。それが内部にとり入れられる時これは共同体外部の賃労働であるから賃銀は高い。しかし中世的な関係においては外部の賃労働を必要とする条件は少いから一般に共同体外部の賃労働は発達しない。（これはAとかBとかいう地主本家がマキを形成してその inter-maki の労働関係がある場合にマキ以外の賃労働は生ずるという考へ方でよいと思う）所が一般賃労働が inter-maki として発達して来る。その場合でもその地盤でA又はBの如き地主本家に従属を深める日雇人は親分子分関係となる。

山林労働ノ場合ハチガウ

（7）賃労働の誤記か？

	田植	名子	被助口	中29日 雇	
				4:29日	34.5 スケラレ口 名子の夫役
M13	111人 (56人	34.5人	38人)	36.0 雇
M17	73.5 (73.5	51.0	0)	

スケカヘシ 名子

	田	(田植)	畑	計	家数
M6	142.5人	60.5人	47.5人	266人	20軒
	6.0馬		6.0馬	13馬	
M10				683	
13		111.		613	
M17	230	73.5	140	370	10軒

P.137 明治 10 年代の労働関係の特質

- ②から反対給付の労働・スケカヘシが少い
- 名子の夫役が一定になりつつある
- 一定にあった夫役に以上に出された労働に対し 又は他家よりのスケラレ口に対する現物の給付による差引（労働を以てスケカヘシしない）
- 代金払いによる雇が多い

これは幕末期と 10 年代後半ともちがう。インフレ期ノ特色

▼このことはマキ的内部の労働が著しく部落の賃労働に制約をうけて来たことを示す。しかしマキ内の賃労働であるという性格を失はない。名子の夫役性を一定することは経営上それ以上の労力を必要としないからで、それ以上に出されるのは出す方の cheap⁽⁸⁾ labor が過剰だからである。このことはマキを崩す理由によらずに逆である。そして労働は何等か計量され支払はれるように思えるが一般的賃銀とはならない。マキ内の夫役でも全然対価がないのではない。全然無報■の労働はない。だから一定の夫役以上になったものに現物が支払はれるといってもこの段階では著しくちがうわけではない。代金払いといっても高いことはない。10 年代前半の解釈がうまく出来ないと 10 年代後半の説明にうまくつづかない。こゝに何か誤解がありそうだ。

P.138 10 年代の後半の②の労働関係 () ハ注

- 全般的に労働量が減少する
- 代払（代金払か）による雇（日雇）を多く用ひることにより、今迄夫役をとっていた関係の家との関係が少くなる（らしい）
- 名子以外の家からのスケラレグチも少くなる
- それにも拘らず名子労働量の相対的增加の傾向（注このことは名子の夫役が余り減らない事を示すだろうか）
- 名子の夫役量は一定化しつつある
- 名子から夫役を多く徴した場合②より名子にスケカヘシが多い、その場合には

(8) cheap の誤記か？

下人労働がスケカヘシをする。

これらは②の経営における自家労働費の減少に結果するであろう。

▼M17、M18 年における手作米の収量は 64 駄 69.5 駄となっており元治元年の 60 駄と比較して余りちがわぬから手作地は四町前後と見てよいわけである。

名子やスケラレグチとの間にスケの交換が行はれることは名子スケラレロの経営が②へ労力を出したために欠陥が出来たことによる。M10、11 年はスケカヘシがなく、M12 年からスケカヘシが次第に多くなって来て 17 年には 87 人に達し、18 年には 16 人に激減する。M17 年の 87 人のスケカヘシの内 68 人は名子である。スケラレロには 19 人である。これが M18 年に名子へのスケカヘシは全廃されて、スケラレグチのみになることは経営の上の大変な変化である。これによって見られることは M17 年までの 6 年間に名子へのスケカヘシが始まったものが急に廃絶せしめられたのであるからこの M18 年から名子の夫役量は実質的には急激にふえたことになる。名子の夫役は完全に自家労働に投入されたのである。そうすると名子は②からの（あるいは②の協業集団からの）労力は期待出来ないから他からの労力を必要とする。それはおそらく相互のユイによったであろう。

M18、19、20 と経過する間に名子の夫役は減少して行く。一方的な夫役が成立して来るので夫役の絶対量は減少しても良いと思う。

P.[1]38 に「かくてまたここでは直接の生の労働の交換という共同体規制の形態が強化される」といっているが、交換の形にのみ共同体規制があると思うのは誤りである。スケカヘシの多少は②の保有労働力の関係であるように思われる。前の箇条ノ答

1. 全般的に労働費が減少したかどうかギモン。労働の内容が簡単に算定できないことも理由の一。M17 年はたしかに減少したようだが M18 年はそうは思われない。

2 M17 年の労働量の減少は代金払の労働が多かったからスケとしては少かったということだろうが、M17 年の記録には雇は 0 となっているから 14 年以後は 16 年の例外をのぞいて 0 であり説明上おかしい

(9)

	M6 年	M17	M27	M13 (17 年 eeee)
田植				
②ノ実際ノ労働費 61 ^人		74(73.5)名子 73.5		111 ^人 (+37)名子 56
全体ノユイ徴収 86.5 ^人		スケラレ 18		スケラレ 34.5
		ヤトイ 380		ヤトイ 38
稲こき	6	54(+48)	59	
田草	19	36(+17)		
田打	20	30(+10)		
稲刈	17	21(+4)		
全田作業	143	230(+87)		

(9) 上部欄外に以下の書き込みあり。

14.5	56
16.5	34.5
18.0	38
	128.5

3 名子以外のスケラレグチも少くなるとあるが M17 年は 19 人、M19 年は 30 人という如く多くなっている。

4 名子の労働力の相対増加はすでに見た如く M18 年から俄然状況がことなる。

5 はわからないがそうであろう

6 名子へのスケカヘシは M17 年までである。

M10 年代前半の理解の仕方にわからないことが多い。

P.140 M17 年と M13 年の比較について

名子労働の減少、雇の増加 スケラレロに対する現物の決済の増加はインフレ M13 年をデフレ M1317 年との対比の理由とするが、M13 年には名子へのスケカヘシは ~~極めて比較的~~ 少いので只数字の上で夫役の減少を考へることは出来ない。もちろん雇のむしろ実質的には多くなっていると見て良い。スケラレグチに対して現物決済の増加をいうが数字上では M13 のにスケカヘシがはじめて出ていて、それも M.14-18 年までに比して一番多く、23 人を算している。スケラレグチのスケは M10 年に 229 11 年に 97、12 年に 120 13 年に 202 であるから 13 年は多い方であり、11 年 12 年に比して急に多くなっているが、M10 年に比すれば多少減少している程度だ。M14 年以後はずっと減少して来ているのに比し多いことは明かである。だからこの中に現物決済が増加したであるとしても、スケカヘシも急に始まったことも又注意を要する。それもこれらは注意すべきことだが M10、11、12 の間にスケラレグチに対して全然スケカヘシが行はれなかったということもそれ以上に注目すべきことである。M10 年以前を見ると M6 年においては金治③④福蔵、長兵衛、孫助⑨⑩與平治の如きスケラレグチへのスケは 秤計 14 人出しているが、明治 10 年-12 年迄は全然見えない。これをどう解釈して良いか簡単には云へない。たゞ②の経営上の都合によるものであったと見て良い。都合の事情は問題である。

M13 年に名子労働は減少するどころか実質的にふえていると見たい。スケラレロに対して現物決済が増加していたとすればスケラレグチのスケも 23 人のスケカヘシを行っても②へのスケは著しく増加であった 202-23 =179 人は

まるまる②の経営に働いた⁽¹⁰⁾。それに雇が 89 人の多数になっているから、M13 年の総労働費 613・31=583 人でその前後に見られぬ数であるが、名子が過半数に及んでいること 322・8=314 人を知る必要がある。このことは商品経済の好況期の影響の中で行はれていることである。中村達は雇の増加、名子労働の減少、スケラレロの現物決済で増進と見て、共同体規制の一部変化と説明の実態と説明しているが、私はこれと少しくちがう。名子労働は増加している (NB)。スケラレロの現物決済増進、雇の増加と見て、名子を結集してスケカヘシを極小にどめようとし、他の労力 ■も各種の代払ひで 労力 スケカヘシを少なくしている。これは好況の波が名子自身の生活をいく分らくにして、②からの労力のスケカヘシを必要とする度合が少かったというのではないだろうか。

中村達のここの説明はインフレによって好況が生じ、貨幣経済が増進したので共同体制が多少くずれかけたが、10 年代後半の インフレデフレによって、共同体制の反動強化がはじまる (経営の不利、中小地主の危機) というのであるが、賃労働への多少の傾斜がすぐに共同体制のゆるみとなるかどうかギモンである。しかしインフレにより賃労働が一般にふえて来るので名子がそれに或る程度とびついて行く、しかし夫役があるので多く出られないとしても、次第にふえて来た。夫役のとりわけことは明かだろう。それによってもし②へ依存する度合が ■少くなれば共同体はくずれるが、スケは依然として多いし、■スケカヘシがないと実質的に多くなる。これはによって共同体が強化されたというのではなく、大体同じ状態をつづけたと見る。②からスケカヘシをしないのは名子の経営への干与が少なくなったことで、これはインフレにより賃労働への参加が多くなって②が名子の経営に深く関与しなくなったことを示すものではないか。それ故こゝではともかく商品経済の制約が多くなって来ているだろう。

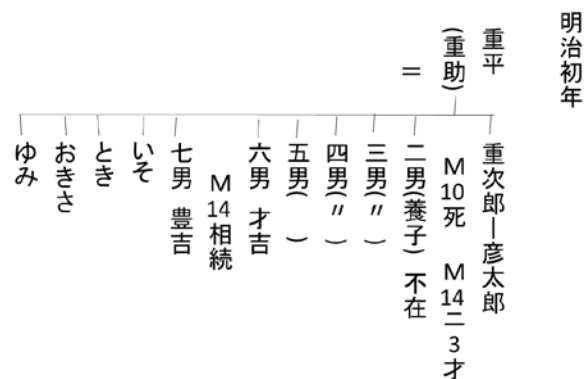
これがデフレに突き進むにしたがって名子も困って②からの関与が大きくなると維持が困難になる。スケラレロも賃労働による関係よりユイの関係になって行く。これが 14 年—17 年の数字になるかも知れないが、18 年にスケカヘシが廃絶し 19 年に ■へて 20 年にスケカヘシ 3 人が又出て来る。のは この説明がうまくつかない。この期間のスケカヘシが明治 6 年頃のスケカヘシとちがって来たことを示すだろう。名子は古い性質のスケカヘシをほごうけたとしてもスケラレロは賃労働と極めて近いものになって来たろう。(現物の決済) —13 年の雇の代用

しかし、貨幣経済の進行、employment の増大で共同体がくずれるとこのことは②のマキの規制の中で外部的变化の差異が内部関係のちがいを生ぜ

(10) 上部欄外に次の書き込みあり。

N.B

M13年の田植に関しては名子労働は減少しているが年間の通算で見るとスケカヘシは小さいので実質的にスケが多い。



~~いうことを只公式的にとらへてはならない。~~しめるのである。

要約すると②のマキの経営が M13 年のインフレ期に商品経済の影響により雇やスケラレロの大量の賃労働を入れ、名子の夫役労働をそれと結びつけて行ったのが、M17 年にはデフレにより雇全廃、名子とスケラレロで賄ったが、名子やスケラレロに対してかなり大量のスケカヘシを行ったのは名子の経営に対する関与を必要としたし、スケラレロに対しては雇代用の現物決済をしたと同時にスケカヘシによる関与もしたということになる。このことは②のマキの結合を M13 年より強くしたと説明し、「従来の共同体規制の反動強化、しかも全般的な経営の不利、中小地主の危機」p.141 としている。共同体を②を中心とする特定のマキを意味するとすればそれは M13 年と M17 年においては状態は異なるが、M17 年の方が M13 年よりマキの結合は強いのであろうか。「反動強化」とあるが、M17 年の不況により名子は②に依存を深め、スケカヘシを多くうけるに至った点でたしかにそうである。しかし雇を排除したのは不況という条件が②の経営に与へた影響の結果である。その代りスケラレグチを M13 年に多く用ひた雇の代用として採用したのは M17 年が不況といってもすでに商品経済の進展の中で旧に返へすことの不可能であった情況を示すものである。反動強化と云へば何か古い姿に戻るもの、如く印象づけられるが、それは M17 の新しい情況に対応した結果である。だから新しい条件の中で一旦地主から分離しはじめた名子でもカマドでも、賃労働を持つに至った小農でも、外部から彼等を地主に隷属せしめる条件が迫って来ると前とはいく分ちがった形で又地主の経営に従属せざるを得なくなるのである。これを共同体といってもそれは広い共同体と全然同じだということは有り得ない。この場合雇が一旦発展して来るとそれは社会構造の網の目に結びついて簡単になくなるものではない。むしろなくなることが出来ないような新しい社会構造が出来るのである。

P.144 名子と呼ばれるもの

A 重蔵 ①米蔵 ②栄吉 宅地、畑ノ小作料として夫役を出す

B 由蔵 ⑧重太 仁助 畑小作料として夫役を出す

■ 9 人で 312 人 一軒平均夫役 34.7未満弱 (M12 年)

畑小作料を出すものが必ずしも名子ではないが、種々の関係で②の経営に参

?

— M27、M30 年

⑧P.162 の第 50 表を見ると明治 17 年に A 型名子であったもののみが名子として残り、B 型名子（畑小作の夫役を出すもの）が主なる出入人になってしまっている。このことは名子と宅地との結びつきがいかに強いを示すものである。

関与し、多くの夫役を②に出すと共にその両生産に深く依存しているような小作人を云う。名子の場合には相対的自主立性が特に弱く、②との極めて深い関係、少族团的協業体の一環の中でのみはじめて存続し得るものである。——その過程は下人分家の形や宅地耕地共に②に売渡した本百姓にその源を発する。

▼所で畑小作料としての夫役を出す名子だが、畑小作料の夫役をのみ出すものが名子ではないのだから畑小作料の夫役を出して名子であるものは別の条件がついていなければならない。その条件は何か。⑧

もう一つ相対的自立性が特に弱く②との深い関係を持ちその協業集団の一環においてはじめて存続し得るものということになると②に従属の深いものになるが、これもどこから区別するかは必ずしも明かでない。主なる出入人の中にも従属の深いものがある。一番良い例は p.203 の大正 11 年のつは 69 人を出している。P.162 の明治 27、M30 におけるカマド松之助は 85 人、76.5 人を出している。松之助の家は M20 年の分家で水田約一町、畑約 7 反、原野 3 セ、馬一匹等をももらったから貧農ではなかったが、こんなに多くスケを出したので②のマキに従属したことは明かである。しかしカマドであり名子ではなかった。これは自立性が特に弱いのではないがカマドだから従属した。従属の ~~七方~~ は深かったが従属の性質にやゝちがった所があったから名子ではない。ということになると従属のいかなる性質が名子になるか。これらは ~~本家~~ ②との間に名子になるという相互認知が慣習上生ずることが問題なのである。名子は他の小作人より特に主従関係の深い ~~関~~ ものとして慣習の上できめられたことをやる。夫役或る場合に賃労働はあっても主人の要求した時に働きに出ることが初めは必要であった。この条件は次第にちがって行って夫役も少く賃労働も多くなっても、名子であるとの相互認知が大切である。

名子と主なる出入人とのちがひも大きなものではない。「濃い身分的従属関係」があったということになると松之助の如きカマドもそうだし、名子でない出入人とのちがひもそれ丈では明かでない。

P.204 には②が S6 年に宅地 348 坪を②から買うけて名子ヌケをした

が清之助はこの時宅地を買って名子ヌケするようにすゝめられたが価格が高くでやめた（だから名子として止まった）ものゝようである。名子ヌケの条件が宅地の私有にある例は他にもあるが、p.144 の M12 年の名子 9 人の中 4 人は宅地を借りていないから借屋敷が名子の条件にならぬ場合もある。それにしても多くは名子は借屋敷が条件であるらしい。そして屋敷を自分のものにすると名子ヌケと認められたことは、村に住んで独立した一軒、或は当時の意味での公民或は本百姓となる条件として屋敷の所有が数へられたことは認めてよい。そして明治中期以後借屋敷に一律に 20 人の夫役を課したことはその広狭に拘らないので宅地が名子身分と関係の深かったことを知ることが出来る。

p.144 M13 年には名子の夫役量を宅地代分、はせ田分 畑穀分としてはっきりわけている。この区別がいつ頃から生じたかわからぬが、これは小作料としての意識が生じて来たことを示している。それにしてもはせ田や畑の分はその反別によってきまって来ても屋敷は 20 人と一定していることに身分的な夫役の区別がある。又これらの総計が一年分の夫役であるが、それ以上の夫役を徴した場合 1 日に一升の米を（又は雑穀）その代価にすることはそれ以上の夫役を徴し得る関係であることそれを一方的に一升の米で安く計算し得ることが定額小作料と異なる点で身分的關係のしからしめることであることがわかる。

このことは「名子關係が内容的に明確化された」ことになるのであろうか。そしてさらに後には「雇として一定の代払を他の家と同様にうけて②へ働きに出る、つまり名子という身分關係が崩壊した」と考へてよい。P.145 ▼名子關係が明確になるとは無制限に賦役を徴されない状態になることであるがこれはたしかに名子關係の解消して行く過程ではあるとしても名子であることがそれによってなくなったのではない。文久 3 年の名子を見るに彼等は多量のスケを②に出している外に田 畑の現物小作料をも②に出していた。この時代に夫役には ~~はっきりした~~小作料的意識はなかったがそれと結びついて田の小作料は成立していたから名子關係は決

して夫役を徴される関係としてのみ理解できない。名子という関係は夫々の時代の条件に規定されて存立できたのであるから小作料意識が明確になったからといってそのために名子関係が崩壊したのではない。そこで名子とかオーヤとかいうのは何かということになる。この書物では身分関係だといっているが身分関係とすればそれは主従関係であり、親分子分関係である。名子という言葉が子分を意味している。オーヤが結局親分の意味を持つことは私がすでに明かにした。だからこの主従関係や親分子分関係が崩壊するのはこの従属関係がなくなることであるから、夫役が小作料になるとか、賃雇労働になるということだけでは駄目である。後に雇が夫役に代って発揚して来たのであるが、雇がいかに賃金を支払はれても、それは安い、②に従属する限り②に対して独立的な地位を持つことはむずかしい。だから名子たる身分がこのような変り方になってしまったとは思われない。さらにこれと同じ程度には雇関係を持ったとしてもそれで名子という関係が出来るわけでもない。双方でそういう親分子分になるのだという相互認知がないと生じない。比較的長いそれはたゞの支配従属の関係ではない。そういう深い関係を結ぶことを双方が認め合うことである。しかし名子も生活が少しでもらくになると従属的境涯から出ようとする場合が多いので、生活のそういう条件が生ずると名子ヌケは生ずるのであるが、家の長い関係や主家の力が存続すると名子ヌケによってはっきり主家からはなれることの出来ないこともあるのである。

P.145 名子米蔵へのスケカヘシ

▼この例は極めて面白い。これは ~~ヌケ~~ 名子に対するスケカヘシの良い例であるが、名子米蔵が②に対するスケの量 ~~が出ていないのは残念。~~ は p.146 にある。米蔵は小作田 5 反、畑 1 反 7 セ 16 ブ 草生地 2 セ 16 歩の経営だとあるが、畑はもちろん小作であろう。5 月 25 日午後から 29 日迄 4 日間に 10 人半と馬 6 匹が②から出ているとあるが、この小経営の田植にしては長すぎるから 26 日から 29 日まで毎日丸一日づゝのスケではあるまい。しかし 25 日は才吉豊吉という②の主要な家族が出ており、それに下人の要助と馬 2 匹とであった。26 日以後

は才吉は出なかったが、豊吉と下人要助に馬一匹、6月3日に要助と馬1匹となっていた。6月3日は田植であつたろうか。或は植直しのようなものであつたろう。もちろん、⑬、金治、⑭（名子）重蔵（名子）①（名子）栄吉（名子）が各1人 ③、長四郎が各半人でている。これは8人であるが、これが25日－29日までにどのように出たかは明白でない。②としてこれらスケの中へ②（本家）が自家の主要な労働力を出していること、外から来た8人（長四郎をのぞく）に赤魚二枚づゝ計16枚の札を出してこれを「手前ニ而致」すとしているのは、この田植労力の中心が②にあつたことをいかにも明白にしている。これが名子に対するスケカヘシの実状であつた。M14年という時期であることを考へに入れておくことが大切である。この場合赤魚の札をもらった名子5人があり、其他の4 3⁽¹¹⁾人は名子ではなくて⑬金治③である。中村達はこの名子5人が②の経営に対していわゞ外部のものとして即ち③や⑬と同じスケラレグチとして同じ程度の関係になっていることを注意しているが、スケラレグチといつても②との関係は濃淡があるので、この場合もそれを考へる必要がある。というのは⑬と金治は 金治は⑬の名子カマドであり元々同じマキである。⑬は元は旧家であつて②と対等の関係であつたのが⑬の没落によつてそのカマドの②や⑭は②のマキに属性するに至つたし、⑬そのものも②へ年奉公に入る関係により明治初年頃は大王として②に多くは雇に来る関係であつたから⑬や金治が②に従属したものであつたことは明かである。

M14における⑬③の状況はわからないが M3年には③孫治郎 20石余⑬作平 15石余 金治 3石余 (p.84) M6年の 出入先表 (p.108) 金治+5 -1、③+2 -2、⑬+2 -2 (p.110 田人足表) ⑬は後に没落して②への従属を深めるが M6年現在ではスケの関係では関係がうすいし、高もおそらく 15石程度を持っていたであろうから対等の関係と見て良い。⑬の没落をもし M17年頃のデフレの時期とすれば M14年の②との関係は M6年程度のものであつたろう。③から②への年奉公をしたものもいつ頃かわからぬが M14年は M6年程度とすれば、これらのスケラレグチと名子の場合とを同じに見ることは出来ない。今こゝで名子もスケの

(11)「3」は「4」の上に書かれている。

①M17年の出入人足表（第45表）p.147を見ると①③④の3軒に対しては①の+1-2（田植）、③+1-3人馬1、④+4-5人馬3となっている。①は高橋芳男家で②のカマド。M3には16石余になって来て上昇線を辿っていた。スケカヘシが1人分だけ多い。礼としては何もない。③に対しても2人と馬1だけ余分に出し、④に対して1人と馬3だけ多く出していた。これらは他に何も礼はしなかったのは多く出していたからで、おそらく②の方がスケカヘシをするに多くの労力を持つ優位にあった結果であろう。所が礼をやった記録のあるのは次の家である。

大道の酉蔵+5 -2、松ノ木①⑥+10 -2 煙山与助+4 -40

煙山の與兵衛+5 -0 堤 蔵太 +5 -0 大木 蔵吉 +2 -0

礼 礼の記載はよくても物を贈ったのはすべて労力の受取配置図である。さらに名子について見ると金銭分、はせ田5畑敷分にのみ夫役を出している場合

松木 重蔵	+47.5	-7.5馬6	= 40
②②	+39	-9	= 30
①	+84	-24	= 60
堤 栄吉	+46.5	-3.5	= 43
由蔵	+33.5	-9.2	= 31.5

其他は①60に対して米9升を呉れ、金蔵55.5に対し粟12升をくれ、重三郎17に対し8^ノ鮭1本炭俵にし（ん）1ワ餅10、①⑧16に対し米8升、惣兵衛~~5~~に対し木綿1反を呉れている。これらは名子のスケであり、スケカヘシも若干あるのであるから物をくれる必要は元来ならなかった所だろう。この時期には②からのスケカヘシも ~~名子に対する単なる耕作関与とはならなくなったかも知れない。ともかく~~ 少なくなったが多くの労力受取超過に対しては礼を出す習慣が強くなって来たのは外部の影響から名子労力を多少計算する必要が生じて来たからであろう。それはそれにより②の支配力を示すことがどうしても必要であったと思われる。これを「相互に依存し合う」自立している家々の間の平等な関係における相互依存関係ではなくて②の政治的社会的優越から生じたものであると思う。

礼⁽¹²⁾として赤魚を同じようにもらったとしてもそれで名子が外部のものとして扱はれたことになるだろうか ①。③、①⑨金治に対する赤魚の礼も労力の上ではお互にちがいのない交換をしているのだから、礼はいらぬはずだ。むしろ一種のおあいその如きものではなからうか、②の高い地位を表示するような。① ~~もしそうだとすると支配意欲の表れとも云ひ得る。スケに~~来た名子に茶をくれてやるというのと同じであるが、この場合は名子と共にもっと家格の高いものが参加しているのでその■伴としての意味だろうと思う。このために「古典的」な名子に変化があったと見ることは出来ないだろう。

P.146 共同体について

共同体規制がフラットな農民の関係から生ずることに対する反論。

共同体規制が名子関係の存立する所にもあるというのである。

▼こゝでいう共同体は必ずしも村落というのではない。特定の家を中心とする家連合をさすらしい。普通共同体というのは村落であるから論点にずれがある。フラットな関係を以て生じている村落社会は Marx, M. Weber 等の古典的学説である。これらは決して日本の同族団の如きものを予想していない。もし村落について論ずるとすればいくつかのマキやマキと関係のない組合せが複合したものとして村落があるから、その中の家連合を対家としてて共同体というのとはずれて来る。マキといっても上下的マキもあり、フラットなマキもあり、マキでない関係もマキと結びついているのだから村落がフラットだということを簡単には云へない。しかし家々が比較的フラットなものは近世以後だんだん生じて来ている。フラットな関係のものを共同体と云うなら大抵の村落はそれからはずれる。しかしそういうことは余り意味がない。日本の村が特定の意味の共同体でないとしても、それがいろいろの形で協共同生活を営んでいることは明かである。それが何かということが大切である。

中村達が②を中心とするマキに共同体という名前をつけても悪いことはないが、この命名はやはり混乱の元である。中村の述語によると村落はいくつかの共同体が複合するものとなる。そして地域概念としての部

（12）上部欄外に次の書き込みあり。「① もう一つ米蔵は名子でかくの如くスケられたのであるが他の名子も同じようにスケカヘシをうけたとすれば順番に同じことをされるので、がいぶのものと思うわけには行かぬ。」

落の内外にその複合が存立するから共同体は必ずしも村落を指すものではない。村落（部落）はこれとは別の概念である。村落が共同体でないとは云はれないが、共同体は村落に止まらなくなる。しかしこのことを中村は歴史的に一貫してそうだといっているのではなく、共同体もはじめは村落の中から生じ村落をかためるためにも働いていたと説いている（共同体の構造分析）これは共同体が小さい場合にそうだという許りで、百姓以外の共同体もあり得るのだからそういうものは村落のカラから忽ちはみ出してしまふ。共同体が村落からはみ出すかどうかは共同体の条件である。だからこの意味で共同体という概念をとりあげるといろいろの■域に出て来る。武士団も共同体である。こういうものゝ根本は家中心の企業体であるからそれは大きくなったり小さくなったり他の家との関係が変っても ■崩壊しずに来た。②のような主従の家を中心とした共同体は分解したが家中心の企業の仕方が全然崩れたということはない。何が変わったかと云へば家と家との結びつき方が変わったと云はねばならない。それはちがった意味の共同体である。中村式の考へ方を分析しながら掘進めて行くとこういうことになる。~~共同体の分解~~共同体のキノになる家の生活内容が外部的条件に影響されて変って来たので家の結びつき方がちがって来たのである。②が大きな手作を中心として経営 ~~の~~したから名子から夫役を必要とした。商品流通して来ると夫役の一部が賃労働に変化する。しかし名子の賃労働は安く評価されるというより身分関係の保護を伴うので賃労働としては充分なものになり得ない。その他の部分で賃労働が大きくなる。しかしそれも②の他の家は条件が悪いので **cheep labor** ということになる。スケの交換もこれらにまぢる。これが ~~資~~次第に賃労働を主体とするものに移るのは②の内部の奉公人の数々も少くなるからである。しかし②が手作を小さくし貸借部分が多くなると奉公人の減少は一層大きく少なる賃労ですませることが出来る。これらの変化は農業経営の上でのみ見られるが、農外の相互扶助の面ではスケの交換は残る。臨時の葬儀の如きもの

この方のスケアイは変りつゝあるが残る。農業の方はかなり大きな変化となる。貸付地主となっても小作人との関係は家の関係をなくすものとは限らない。特にせまい地域の内部においては（これは必ずしも部落が局限とはならない）

だから共同体の分解・崩壊ということをこの意味の共同体の場合にも簡単には云ひ得ない。

P.147 名子制も交替などありなから存続する。

ここでは名子の動揺を扱う。雇 出稼 開拓移民等である。

▼明治 10 年代の名子

M17	重蔵	松ノ木	
	①	〃	M6
	金蔵	〃	③のカマドで松前に行き 13 年に帰る 米蔵のあとに入る
	⑮	〃	M6
	栄吉	堤川目	
	②②	〃	M6
	由蔵	〃	M6
	重三郎	〃	
	重太	大木	M6
	惣兵衛		
	計 10 軒	計 9 件 不明	庄之助（松）孫助（堤） 円蔵（松）直蔵（堤）

M17 年には名子米蔵家はすでになく、M15 年には金蔵と代っている。米蔵は仙台に出稼金蔵は松前で失敗して帰■し②の名子となり、米蔵の家に入るというのであるが、米蔵以外に出稼・移住があったのは、名子の生活も全部②に依存して 全部②生活出来るという条件になかったことを示している。中には金蔵の如く他所で失敗したものが郷里で多少とも名子的依存関係をするにより安堵を感じる地盤があったことを示すものであろう。地頭が名子の生活を全面的に保護したものでないことはこのことから分かる 本家優先がここにも現れていた。

P.149 スケラレグチの地域の問題と 古い小族团的協業体の実家の没落して②に従属すること

▼「近隣がスケラレグチ ~~の~~を成立せしめる唯一の契機ではない」という説の近隣はいわゆる向三軒両隣の近隣である。しかし「分散の範囲は一時期において略限定されている」と称するのは結局近接丁場に限定されていることを意味している。これは Cooley の neighborhood として見るべきものであり、要するに②のマキの成立基盤を地域的に見ると neighborhood であることになる。このことは農業企業における地主大手作の限度によって来ることである。すべてのマキを neighborhood というべきでない。

もう ~~の~~一つ族团的協業とか小族团的協業という定義に表れた族团という定義は明かな概念を示し得ない 族は同族親族血族等の族を混同したものとして示されるからである。はっきりした概念規定をするべきであろう。

▼M17 年に、「幕末期の小族团的協業単位^②の分解と、その上にかぶさりひろがって新たな族团的協業体が成立していること、共同体規制の拡大稀薄化的再生産が商品経済の一層の進展によって進行したこと」とある。②のマキは拡大稀薄化したとは見られない。名子はほとんど従前通りで②と名子の関係が前進した如く多少の変化があった。雇は M17 年には全廃され、スケラレグチがその代用をしたがそれはスケとかスケカヘシにまだ結ばれた点がある。

P.152 雇 雇を出す家が比較的特定の家に限られたこと

1 人が来た最高回数 8 回

1 回－3 回まで 89.6% 全 12 回の内 述人数は少い

小数の人間で 4 回 or 5 回又は八回を占め総人員の大部分を占める。個人でなく特定の家から出ている傾向がある。

松ノ木は 62.5 人出ていて中名子だけで 45.5 人出ていた

▼雇は商品経済の影響をうけているといわれているが実質的には名子や主なる出入人がその労力の大部分を出し他はそれ以外のもので

(13)

$$\begin{array}{r} 63 : 117 = 180 \\ 10 \quad 1.7 \quad 17 \\ 63 \overline{) 117} \\ \underline{63} \\ 440 \\ \underline{441} \end{array} \quad 10:17=70:x \quad \begin{array}{r} 47 \\ \overline{) 119} \end{array}$$

(13) 上部欄外に以下の書き込みあり。

$$\begin{array}{r} 119 \\ 2 \quad 79 \\ 3 \overline{) 238} \\ \underline{21} \\ 25 \\ \underline{27} \end{array}$$

補っていると見る事が出来る。これによって共同体（マケの意）が崩れたことにならないのは前述の通りだ。共同体の内部関係がちがう点でちがってくるが、雇に変化したから名子関係（身分関係）が後退したといわれない。

（p.153 の後カラ 3 行の文章によって明か） p.154 の前半

P152.

「明治十年代の商品経済をの影響を強くうけるに至った時期の主要特徴は雇の問題であった」⁽¹²⁾

「この雇は②の経営の集約化に伴う投下労働量の増大において共同体組織を補充し、乃至は従来の共同体規制の結合を緩和し、これに一部代替する役割をもってあらわれたものとして見られる。そしてこれが②との関係において一応代金払という形を正面にだしてつながって来るために、それだけ直接的な人身的な身分関係は後退し薄弱化してくるわけである。」⁽¹⁴⁾

▼直接人身的身分関係という言葉はわかりにくいだが、これは主従関係を夫役で結ぶ関係を意味するのだと思う。それが賃銀（又は現物）で支払はれる雇に変化して来たことの説明である。賃銀や現物をもって支払はれる関係は身分関係のルーズになって来た条件で成立しているものとの解釈のように思われる。雇が純発達した賃労働であるとは云っていないが、賃労働へ一歩近まったものであると見ている。それはそして直接的な人身的身分関係の後退だというのであるが賃労働をそういう意味にとっても充分ではない。た

それからすぐあとの所で「この雇もまたその大半は真に人身的な拘束から解放された自由な労働力の販売者によってうめられたものとなりえず、ほとんど前記の名子や分家などの人達の追加的労働として、しかしこれがともかく一定の代払をうけて夫 形 役とは区別されるという形において、あらわれたものがこの雇の実体なのである。」といい従来の共同体を大きく変質せしめることは出来ないと結んでいる。こういう所論に見られるように賃労働が生じて、現実には人身的身分関係の変化をもたらさない面もあることをのべているが、これらは矛盾だと思う。直接人身的身分関係を夫役を

(14) 実際の記載は p.153 である。

出す主従関係とすればそれが雇を出す主従関係になったということであって主従関係がなくなったのではない。主従関係即ち身分関係は夫役が賃労働になっただけでなくるのではない。事実近世の主従関係の中には夫役もあり、現物又は貨幣給 附 付の労働もあった。労働 の 価 値 への支払が直接にあるかないかということだけで主従的身分関係があるかないかという規準にはならない。雇の内容を見ても家族単位の賃労働が多いこと (p.152) それらは名子関係として出て来るものが多い (p.150) 例へば栄吉、①②とその家の春蔵、⑱及びおさとの如きものである。これは多子であり、その他分家もある (p.153)。回数の多い家は萬右衛門や孫七の如き高頭級のものもある。

名子や分家は追加的労働である。これは一方に名子夫役が一定化して来たので追加労働は安い賃銀を支払うことになったことになるが、この関係によって身分関係（主従的）がなくなったことにならない。むしろ主従関係の内容の変化が生じたことになる。だから直接人身的身分関係が後退したといっても身分関係の内容もわからないし、又それがなくなって来たような印象が強いが、賃労働の関係でも特定の人に深く従属すると主従的身分が強くなるのであって、賃労働が発生するとそれがなくなるかの如く考へるのはあやまりである。たゞ賃労働が発達して来て農村でも employment がふえて来ると特定の人に深く従属することが余り生じない。いかに貧弱な雇労働者でもいろいろの家の労働に従事すると特定の人に深く従属することがなくなるから主従的身分関係は生じないのである。こういう日雇労働が広汎に生ずる社会的地盤が明治時代にふえて来たということに時代的意義がある。江戸時代においても一般的にはこういう日雇労働は生じにくい条件にあったが、部分的には生じなかったとは云われない。その場合にこの傾向が生じた。明治 10 年代の煙山村に ■ れば 10 年代前半のインフレでやゝ日雇が生じて来たにすぎない。そこには②のマキが強力に存在した。そのマキは明治中期まで上昇線を辿ったから他のマキを席卷 する勢力にあった。外部

①	M17	雇を出した名子	M27	M30
栄吉	夫			
	+46.5	-3.5=43人	29人	65人
		〔屋敷分 はせ田分〕	〔20 宅 9 穀米〕	〔20 宅 45 米4斗5升〕
		雇？		
①	+84	-24=60人	48人	30人
		〔屋敷分 はせ田分 一米9升〕	〔20 宅 25 穀代〕	〔20 宅 10 米1升〕
		雇？		
②②	39	-9=30人	28人	41人
		〔屋敷 大畔穀米〕	〔20 宅 8 畑〕	〔20 宅 21 穀米〕
		雇？		
①⑧	16	-?=16?人	6.5人	14
		〔畑穀分 米8升〕		〔6 米8升 8 畑〕
		雇？		
		M17年は名子か	M27年は出入人	

の商品経済の影響によって賃労働もふえつゝあったがそれは下人労働や名子の夫役を主体とする②のマキ（労働組織）の中では重要な位置をとり得なかったから名子等の追加労働の意味しかとり得ず徹底的な cheap labor として現われなければならなかった。換言するとマキの構造は主従的身分関係であったからその中で生ずる賃労働もそれに制約されたことになる。これは小作関係の場合でも同じことでマキの内部に生ずる請負耕作は子方耕作となつたのである。そして地主関与の度合の多い請負耕作にもなったのである。

そこで雇という代払の伴う労働を出すことは代払の仕方によっては地主への従属性を示すこともあるし、又その経営の自立を増進させる方向にも向かっている。明治 10 年代の煙山においてもこの二つのものがたしかに存在した。それは名子から主なる出入人、スケラレグチにだんだん上昇して行った家は後者であった。そして明治末まで名子に止まった家々の如きはこの期間は前者として表れている。商品経済の発展期でもそれに伴って名子が自立できたとは限らない。新しい条件の中で主従的身分関係の中へ深く入り込んで行ったものもある。そしてそれは古い身分関係に依然として止っていたわけではなく、雇も出した。現物小作料も出した。夫役も少なくなったという状態であった ①

教育大学の大学院で中村吉治の「村落構造の史的考察」を講義して来たので、今日の最終講義はその延長として試みるにすぎない。題して「耕作地主の労働組織」としたが岩手■旧煙山村の高橋重平氏の経営を中心として幕末期から明治末年までの変遷について中村氏達が行った極めて精細な分析について多少の批判を行うことにしたい。原著がすばらしい作品だということはいうまでもないが、こういう共同研究を成立せしめた雰囲気を作り上げたということはもっと大きな仕事ではなかったかと思うのであるが、それにはここではこれ以上言及しないで専ら研究の内容について見ることとする。皆さんの中でこの書物を見ていない方のために一々詳しい説明をすることはこゝでは出来ないので、それを或る程度読んでいる方を対象として喋べることを許して頂きたい。

○幕末から明治末年迄の高橋家の手作は約四町と見てよいらしい。それが明治末年から大正にかけて約二町位に縮小して来たのであるが、この手作経営に名子や出入人・スケラレグチと称する人々の労働を結集して行う形態であったというのが大ざっぱな要約である。この種の耕作地主は大きな手作経営を持っていたため自分の家のまわりに遠近はあっても関係の深い家を持ってそれから労働力を出してもらい組織を作りあげていた。我々が二十年位前から名子と称して来たものはそういう労働組織に属した人々であるが、この労働組織がそれに属する人々の家と家との関係に出来上がっていたことは重要なことであった。

しかしこれらの家が地主を中心として生じた現象を従来社会学の方では同族団というテクニカルタームで表したが、同族団の分析が不充分であったのでいろいろな誤解が生じていた。歴史学や経済学の方面からの解批判もあったが、テクニカルタームの解釈の上ではいろいろ

いろの行違が多かったし、同じ現象についてもタームの作り方がちがっている。中村氏の書物では高橋家の労働組織が雇人（下人）と名子、其他の出入人に大別されているが、各表をよく見ると 雇 結局下人と出入人の二種としてよい。そして出入人を別けて名子、主なる出入人、スケラレダ手の三種としている。

中村氏の著書では高橋家の労働組織を共同体という名称で説いている。それに属するものが下人、名子、スケラレグチというように区別されている。しかし下人は奉公人であって家内労働力であるが、他は地主とは別の家に属し、地主と特殊な関係によって地主に労働力を提供するものであった。これを出入人と称したようであるが、高橋家の記録には例へば明治 6 年には名子をふくめて主な出入人とスケラレグチの二様に区別されている。つまり名子も出入人の一種であるから、それは高橋家の成員とは考へられていないのである。そういうことが出入人という概念の内容となるように見える。M17 にも名子とスケラレグチが出入人としてあげられている。M27 又は 30 年には名子と主な出入人とスケラレグチを区別しているが、スケラレグチは記載から見ると主な出入人でない出入人と思はれる。名子と主な出入人と区別しているがこれにはいろいろのギモンが生ずる。

即ち M12 年の出入人の中に名子分 312 人と記してある (p.144) のは名子は明かに 主な出入人として見られたことを示すが、その時の名子に宅地及び畑の小作料として夫役を出していたものが 5 人、畑小作料として夫役を出したものが 4 名ある。この 4 名の中 3 人までは M27 年には名子でなく主なる出入人としてあげられている。この書によれば名子には二種あって宅地及畑小作料としての夫役を出すもの (A 型) と畑小作料としての夫役をだすもの (B 型) とであるとしている。しかし畑小作料としての夫役を出した場合にこれが名子とよばれたとは限らないとも記してあるから M12 年の B 型の名子が M17 年に名子ヌケして主なる出入人になったのかともうた

そこで M17 年を見ると

がわれるが、M17 年の記録ではこの 4 名は名子に属している。

この 10 年間に名子から主なる出入人に変化したようにも見えるが、名子は元来主なる出入人であったのだから、宅地及畑の小作料として夫役を出すものと畑小作料として夫役を出すものとが M27 になってはじめて区別されたものとは考へられない。M17 年や M12 年の名子の中でも宅地小作料として夫役を出すことにやはり大きな意味を見とめていたのではないかと推測させる。このことは M27 年 30 年 までにおいても確かに名子と認められた②という家（高橋はる元⑩藤原作家のカマドで後に②高橋重平家のカマドになった）が S6 年に②から宅地 348 坪を買って 名子ヌケ したということからも推測されるように名子と宅地との結びつきは極めて重要であった。S6 年に清之助という②の名子が宅地を買う交渉を②からうけたが宅地の値段が折り合はず 名子ヌケ をしなかったということとも関係している。

そこで M17 年を見ると名子の内前述の 5 軒のものは宅地 ~~ハ~~と 畑の畑 ~~ハ~~はせ田の小作料として 夫役 ~~em~~ ~~■~~ ~~■~~ 夫役を出す ~~外~~ ~~■~~ し、他の 5 軒（1 軒ふえている）は田畑小作料としての夫役を出すことは M12 年とあまり変わらないが、~~夫役~~ スケ何人と一年に出すものが宅地は何人 ~~畑~~ 田畑は何人としまっているのではなく宅地も田畑もつくるめにして何人と記されている。所が M27 年になると宅地についてはどの家も 20 人で 畑の ~~其他のスケ~~ ~~■~~ ~~■~~ ~~■~~ ~~面積ハ~~ ~~■~~ ~~■~~ は差異がある。宅地小作料としての ~~夫役~~ スケといわれているが宅地は 5 軒について見ると M30 年の記録では 196 坪（①）、252（栄吉）292（金蔵）348（②）374（庄之助）となっている。これが一律に 20 人に一定して来て ~~■~~ ~~■~~ ~~■~~ ~~■~~ ~~■~~ ~~■~~ 夫役-他のスケと区別されている。

このことはどういう意味があるか。借宅地の面積のいかににかかわらずスケ 20 人と決めたのは宅地の借地料としての意味が極めて不充分であることは明かである。小作料が借地料から出発したものであるとすればこういうことは成立するはずはない。小作料が借地料の意味に

近ずいたものとして M27 年の宅地小作料としてのスケと畑小作料、他のスケが分離して来たことを考へないといけない。それはもちろんこの書物にもとくように商品経済の進展につれて賃労働の発達が生じたり、借地料の意味をかなり持って来た定額小作料の発達に影響されたものと思って良いが、とにかくこの表の分析にもう少しついて進んで見たい。M27 年に宅地が一律に 20 人にスケが徴されることはその前の M17 年に宅地や田畑をつくるめにしてスケが徴されたこと、関係がある。しかも M17 年のスケの会計はスケを出した量が記されているのである。この中には②家からのスケカヘシもあるが、このスケの合計は宅地や田畑を何反歩かしたから何人のスケを出せと一定にきめたのではなくて、②の労働との必要に応じて無制限に徴されたのであるが、田植などに②にスケを沢山出すと名子の田植が出来なくなったから名子の田植の時には②の方からスケガヘシをしたので、~~■決して~~よく見ると一方的のスケというわけには行かない。しかし②が中心となってこの労働組織を大きな協業集団として組織したというのがこの書物の説明である。

~~それが~~ M27 になるとスケが一定化して来た。宅地代として 20 人というのがそれだが、これは ~~純粋に~~借地料としての小作料のようには見えない。~~それは借地料としての小作料の意味ではということである。しかし~~というのは一定化したように見えてもこれ以外に地主で入用があれば行かねばならぬことがあったから、純粋に借地料でないとはそれが身分関係の制約をうけていたことを示すものである。この書物では直接人身的な身分関係とかいているが、わからない言葉である。私は主従的な身分関係と規定したい。オーヤと名子 オーヤとカマドとが主従関係であるということは当事者の相互認知とその周囲の社会の承認とによってきまる慣習であった。その内容は時々生活条件によって差異があった。この関係の中において生じた土地の貸借が純粋に借地料にならないことも当然であったが、この場合②が大きな耕作地主であったことがそれを一層強めていたのである。同じ時代に依存した大きな貸付地主の場合にはやゝちがって来た。例へば二戸郡安代町浄法寺の小田島家の場合には小作人（日本家族制度と小作制度 p.472— ）すでに一般に借地料と

しての小作料（現物）を支払っていたのは地主の自作が極めて少く、広汎に貸付ていたという条件が、のちがういがあったからである。②では大手作に対して労力を大きく必要としたので或る範囲の小作人に対して大きなスケを要求したのである。そしてそれらの小作人は②の名子カマドが深い従属関係を伴った名子であったから、地主の経営の必要に応じなければならなかった。

そこでもう一度 M17 年の表に戻ると由蔵重太⑩は畑小作料としてスケを出しているが、⑩の場合は 16 人のスケは畑石分であっても、田植にスケガヘシをうけ、その外に米 8 升をもらっている。重三郎の場合はいろいろの物を貰っているから 17 人のスケの多少ながらも代償のように見える。惣兵衛は 5 人に対して木綿 1 反であるから同様である。これらを見ると畑の小作料らしく見えるものと賃銭らしいもの（現物だが）とある。だから名子と云ってもいろいろの関係のものから出来ていた。スケが小作料であるということを簡単には云へない。又スケが十分に借地料としての小作料であるという事は出来ない。このことは M27 年になるとスケの内容を分類して来て借地料としての小作料に近づいて来たのでそのことを考へるためには更に■料となった。その一つが宅地の均一のスケであった。しかし畑の検地料を見ても、一見面積の差異によって多少が生じて来たことは認めても畑の小作料として反別によってスケの大きさをきめたのかどうかギモンのある点もある。それはスケの総量は毎年必ずしも一定しないので、一定にきめてもそれ以上不時に入用でスケを名子から■すことがあった。そういうものがこの中のどこかの家のスケの量に加算されている。M27 年の記載において④の 48 人の中 28 人穀米不足引というのは 28 人来たから■畑小作料の不足を帳消しにすると意味にとれる。これはこの年畑穀分と不足分とがあったのではあるまいか。金蔵、栄吉の場合は穀米引であり、畑穀をスケで相殺したという意味だろう。②の畑分引と同様であろう。スケラレグチに畑穀分とあるのと同じであろうと見る。これらは畑穀分という限り畑の借地料としての概念を持っていたと思う。しかし畑石分の記載はすでに文久 3 年に見られた (p.114) ここにおいては名子においてそれがあつたのではなく⑧とか重太（松兵衛マキ）⁽¹⁵⁾

(15) 次のページは破り取られている。

M27・30年の表によると例①48人（20人宅地代28人穀米不足引）の如きものは、20人が1定のスケであり、28人は規定以上のスケであり、これに対しては1人1日1升の支払をうけたからこれは安い労賃の如きものに相当する。M30年の庄之助を見ると20人は宅地代6人は畑代でこれは一定のスケであり、14.5人は一定以外のスケであるから米1斗4升5合の支払をうけた。この余分の支払は労賃の如きものをするもこれらは新しい経済の発展にいく分でも対立したものとして考えられそうである。M30年に名子が宅地代について20人のスケを出したことが名子関係の表象であると見て、それ以外に予定以上のスケを出したことも名子関係の表象と見ることが出来るからこの宅地代はいかに小作料から遠い観念のものかわかる。M30年には名子は田畑を各一定の定額小作で別に借りていた。これに対しては他の小作人たちがう所がなかったのであるから宅地代とさらにその外に多くのスケが併存していたことが名子の表象であったと見ることは誤りではない。それ故この点を起点としてM12年を見るなら宅地及畑小作料としてスケを出す名子畑小作料としてのスケを出す名子という区別は重要ではなく、

だからM30年の安い賃労働らしいものが存在しても、それによって名子の地主への従属が浅くなったとは云われない。名子のスケが前にはこのように支払はれることはなかったから名子関係が変わったということは或る意味では正しい。しかし前の名子関係においても名子が全然地主からスケの反対給付をうけないことはなかったのであるから反対給付の形は変わったとしても変わったことによって従属が浅くなったとも言うことが出来まい。名子ヌケの出来る条件はその周囲に多くなり、そのキカイも多くなったわけだが、その中で特定の名子が地主への従属を深めることはいくらでもあり得る。安い賃労働のような支払をうけても、スケは地主に要求され、拒むことは出来ないのは従属が深いからだ。その中で㉔の如きものが名子ヌケの方向へ上昇するとしても他の家がすべてそうであったわけではない。新しく発展し

農業政策ノ貧困 非近代性ノ残存

農業ノ商業化 商人ノ利益

■之小作 主従関係 貧困

過剰人口

○村——共同体の結合

家（■伝）——同族団

た条件の中で従属が深まればいくらかでも予定以上のスケを出す関係が生ずる M27 と M30 年と比べてみればよくわかる地主の必要があればこんな急激にスケを増すことが出来る。

岩手県立大学総合政策学会 Working Papers Series No.147

日本村落研究学会東北地区研究会ミニシンポジウム報告
「あらためて中村吉治を読む―煙山調査を中心に―」
(Reports of the Mini Symposium by Tôhoku Area Study Group
of the Japanese Association for Rural Studies
"Revisiting Nakamura Kichiji: Focusing on Kemuyama
Research")

著者 長谷部弘・三須田善暢・泉桂子

発行年月日 2020 年 8 月 10 日

発行 岩手県立大学総合政策学会